平成 23 年度
体育センター長期研修研究報告

ろう学校生徒のコミュニケーション･スキルを高める
バスケットボールの授業

―仲間とのかかわり合いを通して－

神奈川県立体育センター
長期研究員
神奈川県立平塚ろう学校　　吉田　浩司

目　次

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題・・１
２　主題設定の理由・・１
３　研究の目的・・・１
４　研究の仮説・・・１
５　研究の内容と方法・・・２
６　研究の構想図・・・３

第２章　理論の研究

１　中学校学習指導要領及び解説について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
２　特別支援学校小学部・中学部学習指導要領及び解説について・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
３　バスケットボールの特性について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
４　インクルーシブ体育について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
５　聴覚障害について・・11
６　ろう学校の体育における工夫について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
７　聴覚障害者とスポーツについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
８　コミュニケーションについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
９　コミュニケーション・スキルについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
10　「かかわる」ことについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
11　体育学習における言語活動について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
12　集団の中で行われる支援について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
13　「仲間づくりの授業評価」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
14　「体育授業の雰囲気の観察方法」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
15　「ソーシャルスキル尺度（中学生用)」について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
16　コミュニケーション・スキルの高まりを見る方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

第３章　検証授業について

１　研究の仮説・・23
２　検証の方法・・23
３　学習指導計画・・・24
４　授業の実際・・40
５　検証授業の結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
６　指導の工夫とその効果及び課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
７　検証授業全体を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

第４章　研究のまとめ

１　研究の成果と課題・・69
２　今後の展望・・・69
３　最後に・・70

＜引用・参考文献＞・・71

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題

ろう学校生徒のコミュニケーション・スキルを高めるバスケットボールの授業
―仲間とのかかわり合いを通して―

２　主題設定の理由

「近年、わが国において加速度的に進んでいる少子化、あるいは都市化に伴う遊び場の消滅、コンピュータゲームの普及などの要因によって、子どもたちが「他者との交流」を直接的に体験する機会は減少し、希薄化する人間関係が大きな社会問題となっている。」[1)]

また、ろう者（学校によっては「聾」という漢字を使っているが、本研究では「ろう」とひらがなを用いる。）がコミュニケーションを取るには、手話などが必要になるが、現在の社会ではその使用がまだ一般化していない状況にあり、ろう者にとって十分な環境になっていない。

更にろう学校に通う児童・生徒は、遠方から通学するケースが多く、以前から地域の仲間と遊んだり交流したりする機会が少ないと言われている。そうした地域社会における人間関係の希薄さが日本語獲得の障壁ともなり、ろう学校児童・生徒のコミュニケーション・スキルの向上を困難にしている要因の１つとも考えられる。

平成 19 年度よりろう学校が「特別支援学校」として制度化されたことに伴い、従来からの障害種に対応した教育と共に、障害の多様化、重度・重複化への対応なども課題となってきている。

さて、これまでの私のバスケットボールやサッカーといった球技（ゴール型）の授業を振り返ると、基礎練習や技能の高い生徒中心のゲームなど、個人技能習得のための一斉指導が中心であり、チームで協力して作戦や戦術を話し合ったり、教え合ったりする活動が不十分であった。

また、障害を併せ有する生徒（以後「重複障害生徒」と言う。）には、いつも補助の教員がサポートに付いて活動していたため、聴覚に障害がある生徒（以後「聴覚障害生徒」と言う。）とのかかわり合いが少なかった。そのため、集団的な技能や戦術を競い合うことや作戦を立てて勝敗を競う過程や結果に楽しさや喜びを味わうという球技などの運動の特性に十分に触れられずにいたと考える。

これらの課題を解決するためには、生徒同士にかかわり合いを多くもたせ、仲間との間に肯定的な雰囲気を高めさせる授業作りが必要であると考える。

そこで本研究では、重複障害生徒を含めた「助け合い」「教え合い」「話し合い」「認め合い」の学習活動をバスケットボールの授業に導入し、仲間と肯定的にかかわり合うことで、コミュニケーション・スキルが高まる授業作りを実践したい。その方法を明らかにすれば、生徒が運動の特性に触れ、生涯にわたって運動に親しめるようになると考え、本主題を設定した。

３　研究の目的

ろう学校で、コミュニケーション・スキルを高めるための、仲間とのかかわり合いを重視したバスケットボールの授業作りを提案する。

４　研究の仮説

ろう学校のバスケットボールの授業において、仲間との肯定的なかかわり合いを行えば、コミュニケーション・スキルを高めることができるであろう。

５　研究の内容と方法

（１）本研究を進めるにあたって、理論的裏づけを文献・資料を基に行う。

ア　中学校学習指導要領及び解説について
イ　特別支援学校小学部・中学部学習指導要領及び解説について
ウ　バスケットボールの特性について
エ　インクルーシブ体育について
オ　聴覚障害について
カ　ろう学校の体育における工夫について
キ　聴覚障害者とスポーツについて
ク　コミュニケーションについて
ケ　コミュニケーションスキルについて
コ　「かかわる」ことについて
サ　体育学習における言語活動について
シ　集団の中で行われる支援について
ス　「仲間づくりの授業評価」について
セ　「体育授業の雰囲気の観察方法」について
ソ　「ソーシャルスキル尺度（中学生用)」について
タ　コミュニケーション・スキルの高まりを見る方法について

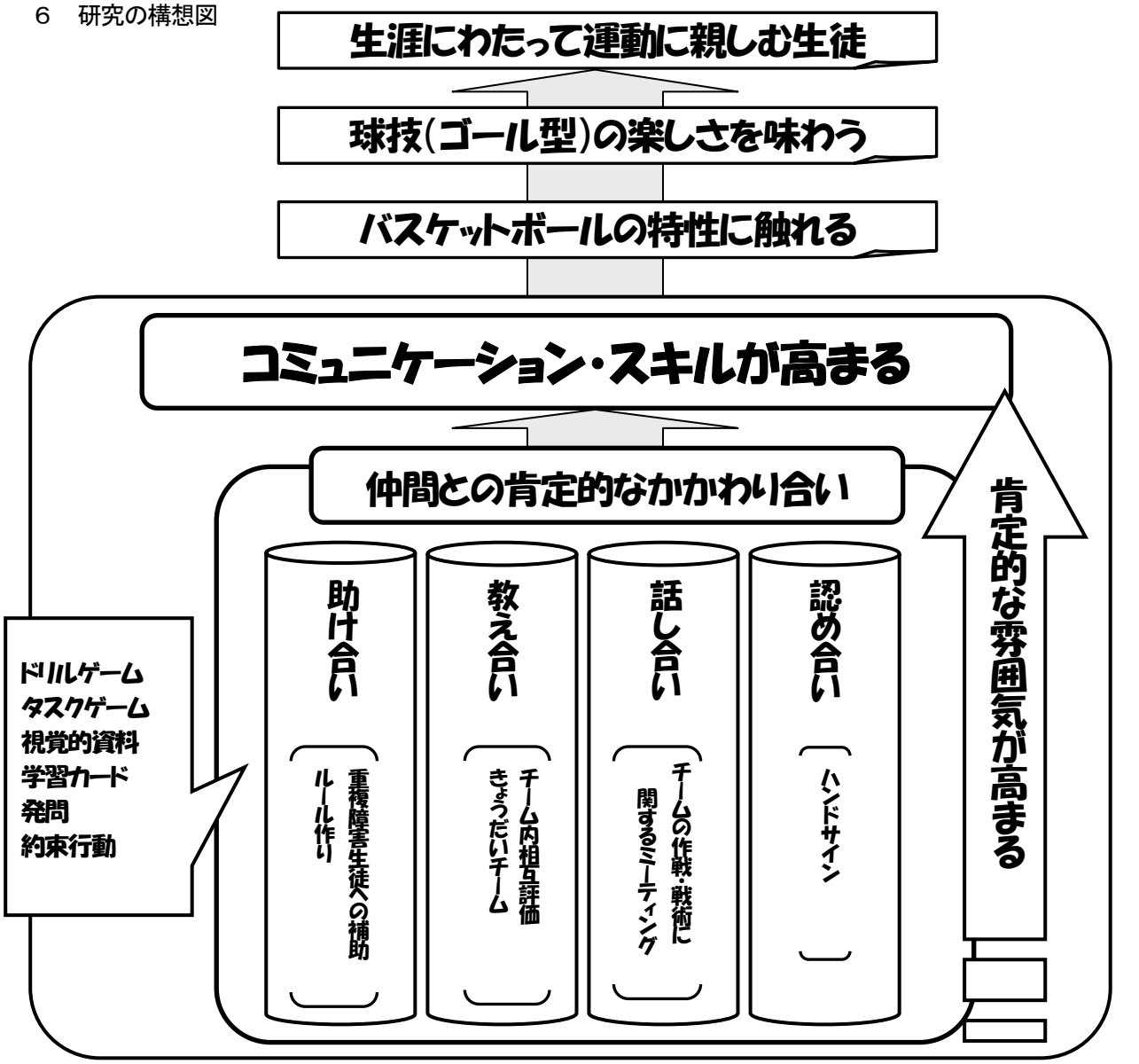
（２）理論研究を基に学習計画を立て、検証授業を実施する。

ア　研究の仮説
イ　検証の方法
ウ　学習指導計画
エ　授業の実際
オ　検証授業の結果と考察
カ　指導の工夫とその結果及び課題
キ　検証授業全体を振り返って

（３）以上のことを理論研究と実践研究を基に研究のまとめを行う。

ア　研究の成果と課題
イ　今後の展望
ウ　最後に

６　研究の構想図



バスケットボールの特性に十分触れられていない

＜球技（ゴール型）の授業での課題＞

〇バスケットボールの特性に十分触れられていない。
- ・仲間と協力したり教え合ったりすること。
- ・作戦や戦術を話し合うこと。
- ・一人ひとりがゲームに貢献し、仲間と力を結集する喜びを感じること。

〇重複障害生徒と共に学び合うこと。

コミュニケーション・スキルが十分に育っていない

＜平塚ろう学校の実態＞

〇学校目標としてコミュニケーション・スキルの向上をねらっているが実態は不十分。

〇重複障害生徒が増えている。

〇少人数のため体育の授業のみ複式で展開。

＜平塚ろう学校中学部・体育授業の実態＞

〇個人技能中心の一斉指導。
- ・技能的には健聴者と同様の学習内容が可能。
- ・話し合い、教え合いといったかかわり合いが不十分。
- ・技能の高い生徒中心のゲーム。

〇重複障害生徒にはいつも教員がサポートに付いているため、聴覚障害生徒とのかかわり合いが少ない。

第２章　理論の研究

１　中学校学習指導要領及び解説について

（１）中学校保健体育科改訂の要点[2) 3)]

①　生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化を図ること。

（２）中学校保健体育科の目標[2) 3)]

心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」、「健康の保持増進のための実践力の育成」、「体力の向上」が重要なねらいとして示され、相互に関連しているという認識の下、学習内容の明確化、系統化が図られた。

体育分野の目標については、指導内容の体系化の観点から、第１学年及び第２学年と第３学年に分けて示された。

（３）「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」とは

「それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとするとともに、公正に取り組む、互いに協力する、自己の責任を果たす、参画するなどの意欲や健康・安全への態度、運動を合理的に実践するための運動の技能や知識、それらを運動実践に活用するなどの思考力・判断力などを指している。

これらの資質や能力を育てるためには、体を動かすことが、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ、運動の楽しさや喜びを味わえるよう基礎的な運動の技能や知識を確実に身に付けるとともに、それらを活用して、自らの運動の課題を解決するなどの学習をバランスよく行うことが重要である。」[2)]

（４）体育分野の目標（３）について[2)]

運動における競争や協同の経験を通して、公正に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たすなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。

表２－１　体育分野の目標（３）の第１、２学年と第３学年の内容

	第１、２学年	第３学年
公正・協力	・「公正に取り組む」とは、運動独自のルールや仲間を賞賛するなどのマナーを守ろうとする意志をもつことが大切であることを示している。 ・「互いに協力する」とは、技能の向上や安全に学習を行うために、仲間の学習を援助するなど仲間や組んだ相手と積極的にかかわろうとする意志をもつことが大切であることを示している。	・「公正に取り組む」とは、運動独自のルールや仲間を賞賛するなどのマナーを大切にしようとする意志をもつことが大切であることを示している。 ・「互いに協力する」とは、自主的な学習を進めるため、仲間と助け合ったり教え合ったりするなど仲間や組んだ相手と自主的にかかわり合おうとする意志をもつことが大切であることを示している。
責任・参画	・「自己の責任を果たす」とは、授業を円滑に進めるための準備や後片付けなどの分担した役割に積極的に取り組もうとする意志をもつことが大切であることを示している。	・「自己の責任を果たす」とは、記録会や試合、発表会などを自主的に進める上で、仲間と合意した役割に責任をもって自主的に取り組もうとする意志をもつことが大切であることを示している。 ・「参画する」とは、グループの課題などの話合いなどで、自らの意思を伝えたり、仲間の意見を聞き入れたりすることを通して、仲間の感情に配慮して合意形成を図ろうとするなどの意志をもつことが大切であることを示している。

（５）球技（ゴール型）の内容 [2)]

ア　第１、２学年

（１）次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームが展開できるようにする。

ア　ゴール型では、 ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること。

（２）球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話合いに参加しようとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。

（３）球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

イ　第３学年

（１）次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できるようにする。

ア　ゴール型では、安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開すること。

（２）球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすること、作戦などについての話合いに貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。

（３）技術の名称や行い方、体力の高め方、 運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

（６）体育の運動領域・保健体育の体育分野、「体育」を構成している領域[2) 4)]

表２－２　体育の運動領域・保健体育の体育分野、「体育」を構成している領域

<table>
<tr><td colspan="4">小 学 部</td><td colspan="2">中 学 部</td><td colspan="2">高 等 部</td></tr>
<tr><td colspan="2">様々な動きを身につける時期</td><td colspan="2">多くの運動を体験する時期</td><td colspan="2">少なくとも1つのスポーツに親しむ時期</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">4</td><td colspan="2">4</td><td colspan="2">4</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>1・2年</td><td>3・4年</td><td>5・6年</td><td>1・2年</td><td>3年</td><td>1年</td><td>2・3年</td></tr>
<tr><td colspan="3">体つくり運動</td><td colspan="2">体つくり運動</td><td colspan="2">体つくり運動</td></tr>
<tr><td>器械・器具を使っての運動遊び</td><td colspan="2" rowspan="2">器械運動</td><td>器械運動</td><td rowspan="3">＊器械運動、陸上競技、水泳、ダンスから1以上選択</td><td rowspan="3">＊器械運動、陸上競技、水泳、ダンスから1以上選択</td><td rowspan="6">＊器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンスから2以上選択</td></tr>
<tr><td>走・跳の運動遊び</td><td>走・跳の運動</td><td>陸上競技</td><td>陸上競技</td></tr>
<tr><td>水遊び</td><td>浮く・泳ぐ運動</td><td>水泳</td><td>水泳</td></tr>
<tr><td colspan="2">ゲーム</td><td>ボール運動</td><td>球技</td><td rowspan="2">球技・武道から1以上選択</td><td rowspan="2">球技・武道から1以上選択</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>武道</td></tr>
<tr><td colspan="2">表現リズム遊び</td><td>表現運動</td><td>ダンス</td><td>＊選択</td><td>＊選択</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">体育理論</td><td colspan="2">体育理論</td></tr>
</table>

（７）「ゴール型」の特性[2)]

「ゴール型」とは、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートを放ち、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゲームである。

（８）小学校、中学校、高等学校学習指導要領「ゲーム（ボールゲーム）、ボール運動（ゴール型ゲーム）、球技（ゴール型）」領域における評価規準の系統表

表２－３－１　小学校、中学校、高等学校学習指導要領「ゲーム（ボールゲーム）、ボール運動（ゴール型ゲーム）、球技（ゴール型）」領域における評価規準の系統表

学年		小学校1，2年	小学校3，4年	小学校5，6年	中学校1，2年	中学校3年・高校1年	高校2，3年
関心・意欲・態度	愛好的態度	・ボールゲームに進んで取り組んでいる。	・ゲームに進んで取り組んでいる。 ・集団対集団で仲間と協力して競い合う楽しさや喜びに触れている。	・ゲームに進んで取り組んでいる。 ・集団対集団の攻防によって競争する楽しさや喜びに触れている。	・積極的に取り組んでいる。 ・集団対集団で勝敗を競う楽しさや喜びに触れている。	・自主的に取り組んでいる。 ・勝敗を競う楽しさや喜びに触れている。	・主体的に取り組んでいる。 ・勝敗を競う楽しさや喜びに深く触れている。
	公正・協力	・運動の順番やきまりを守り、勝敗を受け入れ、友達と仲良くゲームをしている。	・規則を守り、友達と励まし合って練習やゲームをしたり、勝敗を受け入れている。	・ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをしている。	・フェアなプレイを守ろうとしている。 ・仲間の学習を援助している。	・フェアなプレイを大切にしようとしている。 ・互いに助け合い教え合いをしている。 ・技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。	・フェアなプレイを大切にしようとしている。 ・互いに助け合い高め合おうしている。 ・技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。
	責任・参画	・用具の準備や片付けを、友達と一緒に行っている。	・用具の準備や片付けを、友達と一緒に行っている。	・用具の準備や片付けで、分担された役割を果たしている。	・分担した役割を果たしている。 ・作戦などについての話し合いに参加している。	・自己の責任を果たしている。 ・作戦などについての話合いに貢献している。 ・作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための適切なかかわり方を見付けている。	・役割を積極的に引き受け自己の責任を果たしている。 ・合意形成に貢献している。 ・作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための調整の仕方を見付けている。
	健康・安全	・危険物がないか、場の安全に気を付けているか。	・場の危険物を除いたり、用具の安全を確かめている。	・場の危険物を除いたり、場を整備したりするとともに、用具の安全に気を配っている。	・健康・安全に気を配っている。	・健康・安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。	・健康・安全を確保・維持するために、自己や仲間の体調に応じた活動の仕方を選んでいる。
思考・判断		・ボールゲームの行い方を知り、得点の方法などの規則を選んでいる。 ・ボールゲームの動き方を知り、攻め方を見付けたりしている。	・ゲームの行い方を知り、易しいゲームを行うための規則を選んでいる。 ・ゲームの型の特徴に合った攻め方を知り、簡単な作戦を立てている。	・楽しいゲームの行い方を知り、簡易化されたゲームを行うためのルールを選んでいる。 ・チームの特徴に応じた攻め方を知り、自分のチームの特徴に合った作戦を立てている。	・ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 ・自己やチームの課題を見付けている。 ・提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。	・提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。	・チームが目指す目標に応じたチームや自己の課題を設定している。 ・課題解決の過程を踏まえ、取り組んできたチームや自己の目標と成果を検証し、課題を見直している。

表２－３－２　小学校、中学校、高等学校学習指導要領「ゲーム（ボールゲーム）、ボール運動（ゴール型ゲーム）、球技（ゴール型）」領域における評価規準の系統表

学年		小学校1，2年	小学校3，4年	小学校5，6年	中学校1，2年	中学校3年・高校1年	高校2，3年
技能	ねらい	・ボールゲームでは、的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームにおいて、簡単なボール操作やボールを持たないときの動きができる。	・易しいゲームにおいて基本的なボール操作やボールを持たないときの動きができる。	・簡易化されたゲームで攻守が入り交じった攻防をするためのボール操作やボールを受けるための動きができる。	・ゴール前での攻防を展開するためのボール操作と空間に走り込むなどの動きができる。	・ゴール前への侵入などから攻防を展開するための安定したボール操作と空間を作り出すなどの連携した動きができる。	・空間への侵入などから攻防を展開するための状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの動きができる。
	ボール操作	・いろいろなボールでつく、転がす、投げる、当てる、捕る、蹴る、止めるなどの簡単なボール操作ができる。 ・ねらったところに緩やかにボールを投げたり、転がしたり、蹴ったりできる。 ・ボールを捕ったり止めたりできる。	・ボールを持ったときにゴールに体を向けることができる。 ・味方にボールを手渡したり、パスを出すことができる。	・近くにいるフリーの味方にパスが出せる。 ・相手にとられない位置でドリブルできる。 ・ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立てる。	・ゴール方向に守備者がいない位置でシュートすることができる。 ・マークされていない味方にパスを出すことができる。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ・パスやドリブルなどでボールをキープすることができる。	・守備者が守りにくいタイミングでシュートを打つことができる。 ・ゴールの枠内にシュートをコントロールすることができる。 ・味方が操作しやすいパスを送ることができる。 ・守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすることができる。	・守備者のタイミングをはずし、守備者のいないところをねらってシュートを打つことができる。 ・守備者の少ないゴールエリアに向かってトライすることができる。 ・味方が作り出した空間にパスを送ることができる。 ・ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶことができる。 ・守備者とボールの間に自分の体を入れて、味方と相手の動きを見ながらボールをキープすることができる。 ・シュートを打たれない空間にボールをクリアすることができる。
	ボールを持たないときの動き	・ボールが飛んだり、転がってくるコースに入ることができる。 ・ボールを操作できる位置へ動いている。	・ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動できる。	・得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどができる。 ・ボール保持者とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐことができる。	・ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。 ・パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くことができる。 ・ボールを持っている相手をマークすることができる。	・ゴール前に広い空間を作りだすために守備者を引きつけてゴールから離れる動きができる。 ・パスを出した後に次のパスを受ける動きをすることができる。 ・ボール保持者が進行できる空間を作り出すために、進行方向から離れることができる。 ・ゴールとボール保持者を結んだ直線上に守ることができる。 ・ゴール前の空いている場所をカバーすることができる。	・自陣から開いて陣地の侵入しやすい場所に移動することができる。 ・シュートやトライをしたり、パスを受けたりするために味方が作り出した空間に移動することができる。 ・モールやラックから、味方と連携してボールをつなぐための動きをすることができる。 ・ボール保持者がプレイしやすい空間を作り出すために、必要な場所に留まったり、移動したりすることができる。 ・スクリーンプレイやポストプレイなどの味方が侵入する空間を作り出す動きをすることができる。 ・得点を取るためのフォーメーションやセットプレイなどのチームの役割に応じた動きをすることができる。 ・味方が抜かれた際に、攻撃者を止めるためのカバーの動きをすることができる。 ・一定のエリアからシュートを打ちにくい空間に相手や相手のボールを追い出す守備の動きをすることができる。
学年		小学校1，2年	小学校3，4年	小学校5，6年	中学校1，2年	中学校3年	高校1，2，3年
知識・理解					・特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力、試合の行い方、審判や運営の仕方があることを理解している。	・技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法、試合の行い方、審判や運営の仕方があることを理解している。	・技術などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方、審判の仕方について理解している。

２　特別支援学校小学部・中学部学習指導要領及び解説について

（１）特別支援学校小学部・中学部における指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項[4)]

ア　個別の指導計画の作成

イ　交流及び共同学習

ウ　重複障害者の指導

エ　言語活動の充実

平成 19 年度より、従来の「盲学校、聾学校及び養護学校」は、障害種を超えた「特別支援学校」として制度化され、従来からの障害種に対応した教育と共に、複数の障害種への対応や、障害の重度・重複化への対応などが課題となってきている。

ろう学校における体育の授業場面でも、生徒の障害の多様化や重度・重複化が見られる。また少人数のため複式での授業が展開されている。

これらのことから体育の授業を計画していく上で、重複障害生徒を含め、異学年の生徒や男女共習の場面で計画的・組織的に授業を実施し、生徒同士の教え合い、認め合いといったコミュニケーションを大切にしていく必要があると考える。

（２）特別支援学校（聴覚障害者）中学部における各教科の目標及び内容等[4)]

特別支援学校（聴覚障害者）中学部では、「各教科の目標、各学年、各分野又は各言語の目標及び内容並びに指導計画の作成と内容の取扱いについては、中学校学習指導要領第２章に示すものに準ずるものとする」とされている。

「準ずる」とは、原則として同一を意味するが、指導計画の作成と内容の取扱いについては、児童生徒の障害の状態や特性などを十分考慮しなければならない。

障害のある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校ごとに必要とされる指導上の配慮事項についての説明も十分に踏まえた上で、適切に指導する必要があると考える。

（３）知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校・中学部［保健体育］の目標及び内容[4)]

１　目標

適切な運動の経験や健康・安全についての理解を通して、健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

２　内容

（１）体つくり運動、簡単なスポーツ、ダンスなどの運動をする。

（２）きまりや簡単なスポーツのルールなどを守り友達と協力して安全に運動をする。

（３）自分の発育・発達に関心をもったり、健康・安全に関する初歩的な事柄を理解したりする。

内容の（１）は「いろいろな運動」の観点から、（２）は「きまり」の観点から、（３）は「保健」の観点から、それぞれ示されている。

（４）聴覚障害者の言葉等による意思の相互伝達[4)]

児童生徒の障害の状態や発達の段階に応じて、多様なコミュニケーション手段（聴覚活用、読話、発音・発語、文字、キュード・スピーチ、指文字、手話など）を適切に選択・活用することが大切である。

義務教育である小学部・中学部段階の児童生徒においては、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得に努める必要があり、それに結び付くように言語力の向上に努めることが大切であると考える。

３　バスケットボールの特性について[5)]

（１）機能的特性（生徒から見た運動の魅力）　※下線は本研究における特性のとらえ

バスケットボールは、攻防の切り替えの早いゲームであり、運動量も多く、生徒も比較的好む教材である。バスケットボールをはじめとするボール運動の特性は、勝敗を競うことである。そのために、バスケットボールでは、チームとして「相手に勝つため」にパスやドリブル、シュートなどを駆使し、集団的な技能や戦術を競い合うことや作戦を立てて勝敗を競う過程や結果に楽しさや喜びを味わうことが大切である。特に、ゲームでは攻防の早さ、シュートに結び付けるまでの様々な作戦や協力、声かけなどを通して、ゲームそのものを楽しむことができる。

（２）構造的特性（運動独自の技術的構造・ルールなど）

バスケットボールは、コート内で２チームが入り乱れながら、ドリブルやパスなどを使って相手の防御を破り、リングにシュートをして、一定時間内に得点を競い合うゴール型のゲームである。ゲームは一瞬にして攻守が入れ替わるスピーディな展開のため、ボールコントロールやボディコントロールなどの習得が必要であり、さらにパスやドリブル、シュートなどの細かい技術をしっかり身に付けなければならない。そして勝敗の要因に大きく働く集団技能に強い関心が寄せられるため、個人的な技能を生かしたフォーメーションなどの集団技能がゲームにおいては重要となる。

（３）効果的特性（運動が心身におよぼす影響）

バスケットボールは、相手や味方が入り乱れて、時には身体接触をともないながらゲームを展開するので、ボールをコントロールすることはもちろん、相手や味方のプレーヤーの動きを把握しそれらに応じたすばやい身のこなし（ボディコントロール）が必要である。また、瞬時に変化する場面に応じた判断力が要求される。また、一人ひとりの生徒がゲームに参加、貢献していると実感でき、みんなの力が結集され勝利を手にすることができたときの喜びがバスケットボールの魅力でもある。

４　インクルーシブ体育について

（１）インクルーシブ体育とは

障害のある子どもと障害のない子どもが同じ集団の中で、一緒に思いきり自分を生かすための活動を行う体育をいう。しかしながら、必ずしもすべて同じ場所で同じことをしなければならないという意味ではなく、可能な限り一緒に行うことが大切である。

1994 年、スペインのサマランカで開催された国際会議では、「万人のための教育」について話し合われ、インクルーシブ教育を行うことが必要だという「サマランカ宣言」が発表された。

インクルーシブ教育の推進にあたり、共に生きる社会を作るための知恵と共に生きることの喜びを学ぶことが求められることから、体育は個性が出やすい教科として大きな期待が寄せられている。障害に限らず、性、年齢、人種などから生じるあらゆる偏見や差別をなくしていくには、その基礎となる一人ひとりの個性のゆるぎない認め合いが必要となる。[6)7)]

この考え方から、特別支援学校の体育の内容は、基本的には小学校、中学校の学習指導要領に準じているが、柔軟な対応ができるようになっているので、インクルーシブ体育の視点を取り入れて展開していくことが大切であると考える。

（２）インクルーシブ体育の創造性

「インクルーシブ体育においては、障害のある子、ない子が一緒に思いきり自分を生かすための新しい活動をつくっていく必要があります。その際、アダプテッド体育のこれまでの成果も活用しながら新しいかたちをつくっていく。このような意味でインクルーシブ体育は『創造の体育』と呼ばれている。」[6)]

このことから、体育の授業においても「特別ルール」を創るという運動へのかかわり方を取り入れることによって、運動の得手不得手に関わらず、重複障害生徒も含め、生徒一人ひとりが主体的に取り組むことができると考える。

５　聴覚障害について

（１）障害を受けた部位での分類[8)]

ア　伝音性難聴（伝音系の障害）外耳から中耳に損傷がある場合
イ　感音性難聴（感音系の障害）内耳や聴覚中枢に損傷がある場合
ウ　混合性難聴（伝音性難聴と感音性難聴が重なっているもの）
聴覚障害児童・生徒の大半は感音性難聴である。

（２）聴覚障害の程度[8)]

聴覚障害の程度は、「dB（デシベル）」という単位で表す。数値が大きいほど聴覚障害の程度が重度であることを示している。

30～50dB を「軽度難聴」、50～70dB を中等度難聴、70～90dB を「高度難聴」、90dB 以上を「ろう（重度難聴）」と表記している分類表もあるが、身体障害者福祉法においては両耳の平均聴力レベルが 70dB 以上の者が「聴覚障害者」とされている。

（３）聴覚障害者への誤解[8)]

聴覚障害があっても外見上は聴者と変わらずに見えることから、声をかけたのに「無視された」とか「返事もしない」などと誤解を受けることがある。

また、眼鏡をかけると見えるようになることから、補聴器についても、補聴器を装用すると聴者と同じように聞こえるようになると誤解している人が多い。しかし、聴覚障害者の大半は神経などに障害を受けている感音性難聴であり、音や声がゆがんで脳に伝わるため、音がしたのはわかっても、ことばとしては聞き取れないことが多いのである。

更に、リテラシー（考える力及び考えたことを表現していく力）や書記日本語力の獲得は、今もなお聴覚障害教育の大きな課題であり、文字の形で情報保障がなされても、その意味がわからないケースが見られる。

このようなことも、なかなか自己肯定感をもてない理由の１つであると考える。

６　ろう学校の体育における工夫について

（１）種目選択の工夫

クラスや学習グループの実態に合わせて、運動内容をどう選択するか、選択した内容をどう実施していくかなどの工夫が必要になってくる。[6)]

（２）ルールの工夫

参加している子どもの状態によっては、通常行われているゲームのルールを少し変更してやりやすい状態を作ることによって、学習活動を活発化させることが可能になる。[6)]

（３）ゲーム化の工夫

体育としては必要な運動ではあるが、子どもにとってはそれがあまり面白くない運動の場合もある。その場合、強制的に行う方法もあるが、それをゲーム的な活動に編成してモチベーションを高めていく方法もある。[6)]

（４）アダプテッド体育という視点

アダプテッド・スポーツの領域では、障害のある人たちの状態を見てルールを改変したり、新しいスポーツを作ったりしている。パラリンピックの種目を見てもわかるように競技に人間を合わせるのではなく、人間に競技の方法を合わせるという視点に立っている。あらためて子どもたちの実態をとらえ直し、教師が子どもたちの実態に合う活動を作っていくことも必要であると考える。[6)]

（５）学習形態の工夫[9)]

ア　一斉学習・・・・同一の内容を一斉に指導し学習する形態。多様な子どもが属するため異質集団になる。最も能率的な指導が可能で、基礎的･基本的内容を共通して学ぶのに適している。

（短所）・受動的な学習態度を生じやすい

・個人差への対応は困難

イ　班別学習・・・・それぞれの集団に応じて指導し学習する形態。一斉学習の能率のよさと個別学習の個人差への対応のよさを取り入れている。班別学習の集団は等質集団もしくは異質集団になる。

（短所）・排他的人間関係が生じないよう留意が必要。

・リーダーを置く場合、教師の役割を担い学習に参加できないことがあるため留意が必要。

ウ　グループ学習・・各集団に所属する子どもが自分たちの学習計画を立案し学習する形態。グループ学習は基本的に異質集団である。子ども相互の社会的関係は重視され、子ども相互の教え合いや相互援助が求められ、主体的な学習態度の獲得が期待できる。

（短所）・能率が低かったり、時間を浪費したりする可能性がある。

エ　個別学習・・・・個々に指導を受けて個々に学習する形態。個別学習は基本的な学習形態であるといわれる。子ども相互の社会的関係は重要ではなく、子ども相互の教え合いを求めない。個々の子どもの能力に応じたプログラムが提供でき、学習のペースを保障することができる。

（短所）・集団が形成されることはなく能率が悪い。

（６）ティームティーチングの活用

インクルーシブ体育では､必ずしもすべての運動種目をすべて同じように行う必要はないので、授業においては、ティームティーチングで取り組むことにより学習活動を活発化・多様化していくことが可能となる。

子どもの特性をよく理解している教師とともに、指導の流れや学習形態などについて事前に打合わせしながらすすめるなどの工夫が必要である。[7)]

このように、体育の授業にインクルーシブな視点を取り入れていく際には、様々な工夫をし、生徒の実態をとらえた柔軟で多様な対応が必要になると考える。

７　聴覚障害者とスポーツについて

（１）「デフリンピック」とろう学校の体育について

聴覚障害者のオリンピック「デフリンピック」は、競技志向で記録重視の考えからスタートしている。「デフリンピック」ではルール上でもスタート音や審判の声による合図を視覚的に工夫する以外、オリンピックと同じルールである。身体障害者のオリンピック「パラリンピック」は、リハビリテーション重視の考えから始まっているところに違いがある。（現在は、両方とも障害の存在を認めた上で競技における「卓越性」を追及する考えに転換している。）また知的障害者のオリンピック「スペシャルオリンピックス」は、他人に勝つことではなく、自己の最善を尽くすことを目的にしている。

このように、ろう学校の体育は、「デフリンピック」に象徴されるように、他の障害種の特別支援学校に比べて競技的で、視覚的な工夫は必要なものの技能的には健聴者と同様の学習内容を

扱うことが可能である。

また、重複生徒の体育授業を考える上で「パラリンピック」の精神である「何ができないかではなく、何ができるか」という視点に立って進めていくことが大切であると考える。[10)]

（２）聴覚障害者の生涯スポーツについて

ろう学校に限らず、学校体育では生涯にわたって運動を豊かに実践していく力を育むことが求められている。

生涯にわたって運動を楽しむには、社会人になる前の学校教育の場で運動に親しみ、楽しむことができるようになる必要がある。大橋は、「学校で学ぶ体育の学習とは『技ができた』『記録を達成した』ことに重点を置くより、『どうしたら楽しくなるか』『何が楽しいのか』という運動を創造するという過程を通して、それぞれの運動が持つ楽しさを追求する学びが重視されるべきだ。」と述べている。[11)]

聴覚障害者にとっての生涯スポーツは、同じ聴覚障害者の集団で行う場合と聴者集団の中に入っていく場合とがある。前者は聴覚障害者同士の出会いやコミュニケーションの場であり「コミュニティ」としても大きな役割も果たしている。

後者の参加形態を考えたとき、聴覚障害は音声情報が入らないということの他に、２次的な障害としてコミュニケーションの問題が生じるため、一般のスポーツ活動に参加するにあたって障壁となっている。[12)13)]

このような見地から、ろう学校の体育の授業をはじめ聴覚障害者の運動を考えるとき、技能の向上だけを優先するのではなく、生涯にわたって運動に親しむために人とのかかわり方やコミュニケーション・スキルを身に付けることが大切であると考える。

８　コミュニケーションについて

コミュニケーションとは、「情報の転移ないし交換を意味する。情報の送り手と受け手の間で、会話や文書などの言語、あるいは身振りや表情などの非言語によって行われる。教師の指導活動や学習者どうしの相互作用は、意志や知識の一方的な伝達だけでなく、双方向の交換によって成立する。情報の受け手はコミュニケーションの技能に応じて、伝達されるメッセージを解釈し意味を理解するとともに、何が望ましいかという規範や価値を共有することができる。」[14)]

「コミュニケーションには、言語的コミュニケーション（バーバル・コミュニケーション）と非言語的コミュニケーション（ノンバーバル・コミュニケーション）とがあり、特に試合中などでは、非言語的コミュニケーションが重要な鍵となることも少なくありません。

『非言語的コミュニケーション』とは、音声として発せられる言葉以外の相手の動作から自分の体験を通して感覚的に理解することであり、『身体の言葉』による行動での意思疎通の部分といえます。

スポーツ活動においても、『非言語的コミュニケーション』と考えられる場面は非常に多いと思われます。仲間が何を求め、何を必要としているのかなど、声かけや視線を送ること（いわゆるアイコンタクト）で相手を理解するためには、普段からのコミュニケーション量が重要となります。スポーツ活動における体験または仲間との共通体験は、目的をもった集団として密度の高い特別な時間を共有することになります。それによって集団の結束力も高められます。」[15)]

心理学者のアルバート・メラビアンが 1971 年に報告した「メラビアンの法則」では、話し手が聴き手に与える印象の大きさは「視覚情報（見た目や表情）55%、聴覚情報（声質や口調）38%、言語情報（話の内容）７%」の割合だという。つまり、言葉以外の非言語的な要素で 93%の印象が決まってしまうということであり、授業においても重要な要素であるといえる。[16)]

９　コミュニケーション・スキルについて

（１）コミュニケーション・スキルとは

今村は、「スポーツ集団での『コミュニケーション能力（スキル）』とは、選手同士または選手と指導者とが、それぞれ送り手として受け手に対してメッセージを発信・伝達する能力（情報を伝えるスキル）、及び受け取り手として送り手のメッセージを受信する能力（情報を受けるスキル）

を指します。つまり、両者に『表現力』と相手のあらゆる情報を理解するための『知識』と『受容力』とが求められます。」

また「話し合うこと（向き合うこと）を習慣（トレーニング）とし、批判しない、相手を納得させながら自分を伝えるという能力を、まずは基本として身に付ける。それがコミュニケーション・スキルを高める大切な第１歩です。」と述べている。[17)]

この考え方から、コミュニケーション・スキルとは、様々な情報を得る準備をして受け取るだけでなく、理解して反応を表現していく能力と考える。授業を通して、コミュニケーション・スキルが高まっていくよう、生徒同士のかかわり合いを工夫していくことが大切と考える。

文献の中には､｢コミュニケーション能力｣という言葉を用いているものもあるが､本研究では､「コミュニケーション・スキル」を用いることとした。

（２）コミュニケーション・スキルを高めるために

白石は、「コミュニケーション能力を高めるために、教師は積極的に子どもたちのよさを認め、広め、肯定的な雰囲気を高める必要がある。」と述べている。[18)]

図２－１にあるように教師の働きかけによって、子ども一人ひとりの肯定的なかかわり合いにつながっていく。そして授業における肯定的な雰囲気が高まり、コミュニケーション・スキルが高まる授業へ発展していくと説明している。[18)]

また今村は「指導者や保護者に最も求められているのはその環境作りかもしれません。」と述べている。[18)]

この考え方から、今回の検証授業でも、まず教師側から積極的な働きかけをするとともに、子どもたちの肯定的なかかわり合いを促していけるような学習環境を整え、コミュニケーション・スキルを高めていきたいと考える。

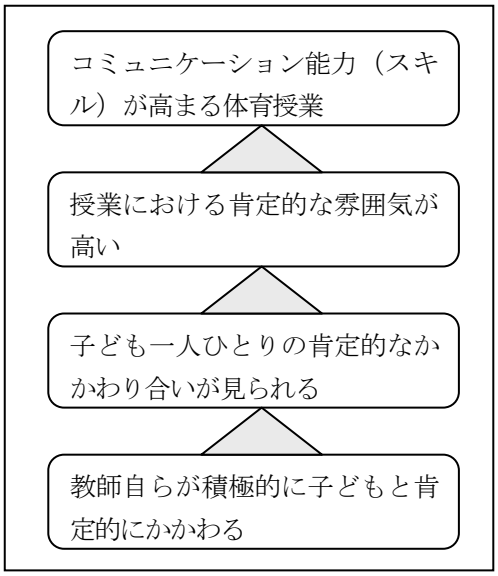


図２－１　コミュニケーション・スキルを高める[18)]

（３）コミュニケーション・スキルが育っている集団とは

白石は、「コミュニケーション・スキルが育っている集団とは次のような行動が認められる集団である」と述べている。[18)]（**図２－２**）

- 人の失敗を責めない。笑わない。
- 困っている人や失敗した人に「ドンマイ」と声をかけることができる。
- お互いの良さを認め合う。
- 頑張っている人や一所懸命行っている人に「いいよ」「やったね」と笑顔で言うことができる。
- 意見交換ができる。

図２－２　コミュニケーション・スキルが育っている集団に見られる行動[18)]

このような相手のことを配慮する態度が見られる集団には、授業において肯定的な雰囲気が感じられると考える。

また、中島は、コミュニケーション・スキルが育っている際の子どもの姿として、次の４点を挙げている。[19)]（**図２－３**）

- 子ども同士がお互いの感情に対してより多く反応するようになる（共感し合う）。
- 子ども同士が相手の考えをよく聴き、使い、利用するようになる。
- 教室内の討論や対話が増える。
- 笑い合う姿や楽しげな様子が多く見られる。

図２－３　コミュニケーション・スキルが育っている子どもの様子[19)]

以上の考え方から、本研究でのコミュニケーション・スキルが高まるとは、話し合いの場面やゲーム中のパフォーマンスに対して、相手のことを配慮しながら自分の意志を表現する機会が増えることとする。

10　「かかわる」ことについて

高橋は、「新しい学習指導要領において、体育の目標や学習内容の構造が、『身体能力』『態度』『知識、思考・判断』で捉えられたことから、現場ではこれらをより平易に『わかる』『できる』『かかわる』という言葉で表現するようになっている。」と述べている。[20)]

この考え方から、本研究では、「かかわり合い」を通して「態度」に関する活動が活発に行われるよう工夫していくこととする。

11　体育学習における言語活動について

中野らは、「答申では児童生徒の思考力・判断力・表現力などをはぐくむためには、**図２－４**のような学習活動が重要であるとしている。そして、これらの活動は言語が基盤であり、各教科の教育内容として、記録、要約、説明、論述といった学習活動が必要であると述べている。そこで、言語を基盤とした学習活動を参考に話すこと、書くこと、読むこと、聞くことなどをコミュニケーション・スキルの基礎である言語的な活動を基に、体育学習における言語活動の例を**図２－４**のように示した。」[21)]

言語を基盤とした学習活動

① 体験から感じ取ったことを表現する。
② 事実を正確に理解し伝達する。
③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
④ 情報を分析・評価し、論述する。
⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
⑥ 互いに考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

① ゲーム後の話し合いや活動の中での表現運動
② ゲームの審判やゲームの結果や記録を集計・分析
③ 資料を活用しながらの教え合いや話し合い
④ 対戦相手の特徴の理解や分析・結果の戦評の記述
⑤ 課題の設定・解決をねらった学習や学習ノートへの記述による自己評価
⑥ グループでの話し合い活動やアドバイスなどによる教え合いの活動

図２－４　体育学習における言語活動の例

佐藤は、体育学習における言語活動は、次の**図２－５**のような場面の充実が求められるとしている。[22)]

・仲間と教え合う場面で、技能の構造や行い方などの知識を基に、動きの改善点などについて、相手の理解しやすい言葉を用いたり、身体表現を交えたりして自分の意見を伝える。
・話し合う場面で、練習や試合の結果を基に課題となっている点について、仲間の意見を聞いたり、仲間の感情に配慮しながら自らの意見を伝えたりする。
・話し合う場面で、一度立てた作戦などに対して、建設的な批判的思考を用いて、作戦の見直しを図ったり、新たな作戦を提案したりして、チームの合意形成を進める。

図２－５　言語活動の充実に向けた具体例

梅田らは、**図２－６**のように「体育学習における言語活動の具体例」をあげている。[23)]

これらの具体例を参考に、言語活動自体が目的とならないように注意しながら、何を身に付けさせたいのかを明確にして授業を展開し、言語活動を充実させていきたいと考えた。

その際、上述したように、ここに記載されている具体例の他にも、非言語的コミュニケーションの表現も重要視していきたいと考える。

○作戦を話し合う
○練習方法を話し合う
○ルールづくりを話し合う
○場の工夫を話し合う
○運動のポイントを伝え合う
○運動の変容を伝え合う
○技，演技のできばえを伝え合う
○課題解決に向けて教え合うなど

図２－６　体育学習における言語活動の具体例

12　集団の中で行われる支援について

（１）年齢や障害の枠を越えた集団活動の大切さ

「動きに制限のある子どもにとって、活動的な子どもといっしょに行動することは、模倣の力や人とかかわる力を高めていく。

必要に応じて、さまざまなタイプの子どもがいっしょに活動できるよう、教育課程の中に合同体育などの授業を位置づけ、異年齢の子どもたちが共同でかかわり合える活動を展開していくことは、子どもの運動機能や精神面での発達を促していく。また、本人の気持ちを考え、できることから少しずつ参加させていく対応は、最も大切な配慮事項であろう。」[24)]

この考え方をもとに、異年齢や重複障害生徒とかかわりながら授業を進めることは、生徒一人ひとりの運動機能や精神発達に良い影響を与えると考える。

（２）セルフ・エスティーム（自尊心）を高めるために

「個々人のセルフ・エスティームを高めるためには、教科学習や集団活動を通して「できた、やれた」という達成感や成就感が得られることも重要である。特に中学校段階では、成績の向上が本人のやる気を引き起こし、学習への意欲を促していく契機となる場合も多い。」[24)]

この考え方から、チームという集団の仲間とのかかわりを通して、個人やチームとしての達成感を味わうことができ、学習意欲を向上させることにつながると考える。

13　「仲間づくりの授業評価」について

（１）「仲間づくりの授業評価」の意義

高橋は、「体育授業の評価法として広く活用されているのが形成的授業評価法であるが、これはいわゆる体育授業改善に向けて開発された一般的な評価法である。体育授業で営まれる児童生徒間のかかわり合い活動、仲間づくりの成果をより厳密にアセスメントしようとする場合には、形成的評価法の因子的な妥当性や簡便性を継承しつつ、質問項目をいっそう特化させ、実際の授業場面を想定する形で調査票を組みなおす必要がある。」と述べている。[1)]

（２）調査票の作成

調査票は、毎授業時間終了時に形成的授業評価であるという点を考慮し、調査によって抽出された「集団的相互作用」「集団的活動への意欲」「集団的人間関係」「集団的思考」「集団的達成」の５因子 10 項目で作成された。**（表２－４）**

質問１、２は「集団的達成」の因子に属し、グループの課題が達成できたか、それに導かれる喜びを味わうことができたかという、「みんなでできた」ことを確認する項目として設定されている。質問３、４は「集団的思考」の因子に属し、話し合いの場面で、仲間の話に傾聴できたか、積極的に意見を出し合うことができたか、という点をチェックする項目である。質問５、６は「集団的相互作用」の因子であり、積極的な補助・サポートや励まし合いの活動に着目している。質問７、８は「集団的人間関係」の因子を表し、学習活動を通して仲間との一体感、連帯感を味わえたかをたずねている。質問９、10 は「集団的活動への意欲』の因子であり、学習活動への満足

度や更なる活動欲求という情意的な側面を表している。[1)]

「これらの５因子を先に述べた体育の教科内容領域に対応させると、『集団的達成』因子は『運動技能』の領域に、以下『集団的思考』の因子が『認識』に、『集団的相互作用』と『集団的人間関係』の２因子が『社会的行動』に、『集団的活動への意欲』の因子が『情意』にそれぞれ一致している。」。[1)]

表２－４　仲間づくり調査票

体育授業についての調査　　月　　日（　）

年　　組　　男・女　　氏名（　　）

今日の体育授業について質問します。次の１～10 の質問に対して、あなたはどのように思いましたか。
自分の気持ちに一番近い答えに〇をつけてください。

1．あなたのグループは、今日課題にしたことを解決することができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
2．あなたは、グループのみんなで成しとげたという満足感を味わうことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
3．あなたのグループは、友だちの意見に耳を傾けて聞くことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
4．あなたのグループは、課題の解決に向けて積極的に意見を出しあうことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
5．あなたは、グループの友だちを補助したり、助言したりして助けることができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
6．あなたは、グループの友だちをほめたり、励ましたりしましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
7．あなたは、グループがひとつになったように感じましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
8．あなたは、グループのみんなに支えられているように感じましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
9．あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員で楽しむことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
10．あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員でもっとやってみたいと思いますか。	はい	どちらでもない	いいえ

（３）調査、集計方法

表２－４の質問項目を元に、更に聴覚障害生徒が理解しやすいように文章表現を工夫し、振り仮名を付けて、授業終了時の「まとめ」の段階で「学習カード」に組み込む形をとる。回答に際しては、ダブルマーキングや回答漏れに注意する。

回答は３件法であるので、「はい」に３点、「どちらでもない」に２点、「いいえ」に１点を割り当て、データ入力を行う。

高橋は、「ワークシート関数などを利用してクラスの平均得点、因子ごとの平均得点を算出すれば、授業で行われた仲間づくりの成果として活用できる。」[1)]と述べている。

また調査結果と解釈について「これまでにこの調査票を使用して蓄積されてきた研究協力校のデータからすれば、少なくとも２．５点以上の平均得点を得ていることが授業成果の目安と判断される。平均得点が２点を下回るようならば、子どもたちは「もの足りなかった」「あまり協力できなかった」という印象をもっていると考えられ、得点を低下させた何らかの要因が授業中にあったと見るべきである。」[1)]とも述べている。

この形成的授業評価法である「仲間づくりの授業評価」を毎時間終了時（２時間続きのときは後時）に記入させ、生徒たちにとってより良い授業になるよう改善に役立てていきたいと考える。

14　「体育授業の雰囲気の観察方法」について[1)]

（１）授業の雰囲気を観察する

「授業の勢い」と「授業の肯定的雰囲気」は、子どもが評価する「よい体育授業」に表れる２つの大きな特徴である（高橋、1992)。「授業の雰囲気」の観察のしかたについては、教師と子どもとの関係、子ども同士の関係、子どもと教材（運動、学習課題）との関係によって生み出されるが、ここでは、とくに子どもの人間関係行動や情意行動に着目することにしたい。授業の中で子ども同士が肯定的に、しかも頻繁にかかわり合っている姿が見られる場合、授業の雰囲気は実に明るく、また大きな学習成果を予想させる。逆に、雰囲気が悪く感じられる授業では、子ども同士のかかわり合いの頻度が少なく、ときには否定的なかかわりが生じたりする。

同様に、授業の取組みの中で子どもたちが心を解放させ、笑顔、拍手、歓声、ガッツポーズなどの肯定的な情意行動が頻繁に見られる場合、授業は明るく楽しく感じられる。逆に、雰囲気の悪い授業では、そのような表現が少なくなるだけでなく、不安、悲しみ、怒りなどの否定的行動が表れたりする。

「楽しい体育」が標榜され、「関心・意欲・態度」の評価観点が強調されてきたが、そこでは、肯定的な雰囲気に満ちあふれた授業を実現することが求められる。形成的に運動特性論や学習過程のモデルを採用すればよいというわけではない。それらが本当に有効であったかどうかを、授業での子どもたちの学習行動を観察評価し、よりよい授業の実現をめざすべきである。

（２）授業の雰囲気の観察方法

このような授業の雰囲気を観察するために、私たちは「人間関係行動」と「情意行動」の２つの行動を対象にした観察法を開発した。**表２－５**は観察カテゴリーを表している。

「人間関係行動」の次元では、仲間同士で教え合ったり、練習の補助をしたりといった肯定的人間関係行動と、仲間に対して文句を言ったり、たたいたりするような否定的人間関係行動をカウントする。これらの行動をカウントすることにより、集団の「連帯性」や「親和性」を見ることができる。つまり、肯定的人間関係行動が多く、否定的人間関係行動が少ない授業ほど「連帯性」や「親和性」が高い授業ということになる。

「情意行動」の次元では、拍手、歓声といった行動に表れる肯定的な感情表出や、不安や不満といった否定的な感情表出をカウントする。これらの行動観察により子どもたちの学習への熱中度や情意的雰囲気を読み取ることができる。つまり、「情意的開放」が多く、「情意的緊張」が少ない授業ほど雰囲気の良い授業と考える。

表２－５　　人間関係行動・情意行動の観察カテゴリー

観察カテゴリー		運動学習場面における具体的行動例
人間関係行動	肯定的な人間関係行動	・仲間と協力して場作りをする ・掛け声をかけたり、声援を送ったりする ・仲間と協力して練習する ・練習やゲーム中に仲間をほめる ・ゲーム場面においてグループで作戦を確かめる ・練習やゲームにかかわって仲間に助言を与える
	否定的な人間関係行動	・仲間の行動に文句を言う ・仲間の演技やプレイをけなす ・仲間を脅すしぐさをする ・仲間を押したり、たたいたりする
情意行動	学習内容にかかわった肯定的な情意行動	・仲間の技の達成に拍手する ・応援で味方のプレイに歓声をあげる ・自分やチームのプレイが成功して喜ぶ ・ゲームに勝ち、感動して涙を流す
	否定的な情意行動	・運動課題への挑戦を怖がる ・練習やゲームで身体的な痛みを訴える ・練習やゲームで失敗して不満を表す行動や態度を示す ・審判や相手プレーヤーに対して怒りを表す ・ゲームに負けて悔し涙を流す

15　「ソーシャルスキル尺度（中学生用）」について[25)]

この尺度は、社会性に困難を持つ生徒を指導する際に、子どもの目標となるスキルを特定化するためのものである。子どもの生活年齢や特性によって、指導すべきスキルは異なる。この尺度で困難なスキルがいくつか特定されたら、次の段階として、対象児の社会適応に役に立つものを選んでいく必要がある。指導の際は、対象児にとって大事なスキルを１つか２つに絞って指導を開始する。

本研究では、**表２－６－１～５**「ソーシャルスキル尺度（中学生用）」の中の**表２－６－３**「コミュニケーション・スキル尺度」を活用して、生徒のコミュニケーション・スキル獲得の状況を見ることとする。評定にあたっては、日頃から生徒をよく観察している学級担任及び体育担当教諭が行い、それぞれの生徒に対し３名で実施することとする。

【実施方法】

① 各項目について「０：いつもできない」「１：たいていできない」「２：だいたいできる」「３：いつもできる」の４段階で評定する。具体的に把握できない項目について、憶測で評定することは避ける。行動観察などの情報収集を行ってから評定し直す。

② 「集団行動尺度」「仲間関係スキル尺度」「コミュニケーション・スキル尺度」のそれぞれの項目の点数を合計し粗点を出す。粗点を出すときは、残余項目（黒く塗ってある）の得点は計算から除いて算出する。

③ 粗点が出たら、換算表（下記）にて評価点を換算する。評価点は、その同学年集団において対象児がどの位置にいるのかを示すものである。平均は10、１標準偏差は３となっている。

【評定者】

学級担任、指導機関の指導者、または、それに準じる者。

表２－６－１　ソーシャルスキル尺度（中学生用）の集団行動スキル尺度

【対人マナー】	いつもできない	できない	たいていできない	だいたいできる	いつもできる	備考
状況に合わせた適切な言葉づかいをする(敬語やくだけた言葉の使い分けなど)	0	1	2	3		
自分が悪いときに自らすすんで謝罪する	0	1	2	3		
相手の話に関心を示しながら聞く	0	1	2	3		
適度な距離で人と接する（くっつき過ぎない）	0	1	2	3		
時間を守る	0	1	2	3		
異性と適切に関わる(過度に意識して離せなくなる、なれなれしくしたり、つきまとったりしないなど）	0	1	2	3		
【状況理解・こころの理論】						備考
相手のしぐさを表情から気持ちを読み取る	0	1	2	3		
冗談や皮肉など裏の意味のある言葉を理解する	0	1	2	3		
身だしなみに適度に気を配る（髪型や服装を整える、季節に合わせる、また、気にしすぎ・潔癖にならないなど）	0	1	2	3		
人の目を適度に意識して振る舞う（奇異な行動をしない、意識しすぎないなど）	0	1	2	3		
場の雰囲気を感じる	0	1	2	3		
【セルフコントロール】						備考
授業や課題に集中して取り組む	0	1	2	3		
行動する前に、じっくり考える（衝動的に行動しない）	0	1	2	3		
自分のした行動を振り返る	0	1	2	3		
感情的になっても、気持ちをうまく切り替える	0	1	2	3		
【課題遂行】						備考
与えられた仕事を最後までやりとげる	0	1	2	3		
失敗や予定外のことが起こっても、柔軟に対応する	0	1	2	3		
仕事や課題に取り組む際、計画を立て、それに沿って実行する	0	1	2	3		
共同の作業で、与えられた役割をきっちりとこなす	0	1	2	3		
仲間と協力しながら仕事（または課題）を行う	0	1	2	3		

表２－６－２　ソーシャルスキル尺度（中学生用）の仲間関係スキル尺度

【仲間関係の開始】	いつもできない	できない	たいていできない	だいたいできる	いつもできる	備考
適度に視線を合わせて人と話すことができる	0	1	2	3		
臆することなく仲間に話しかける	0	1	2	3		
仲間を遊びに誘う	0	1	2	3		
【仲間関係の維持】						備考
仲間と冗談を言い合う	0	1	2	3		
仲間と会話を続ける	0	1	2	3		
友だちとの約束を守る	0	1	2	3		
外出や遊びなど、仲間と計画を立てて実行する	0	1	2	3		
仲間と趣味や興味のあることを共有する	0	1	2	3		
仲間と秘密を共有する	0	1	2	3		
【仲間への援助】						備考
仲間が失敗したときなど励ましたりなぐさめたりする	0	1	2	3		
困っている仲間を助ける	0	1	2	3		
仲間の悩みや不満を共感しながら聴く	0	1	2	3		

表２－６－３　ソーシャルスキル尺度（中学生用）の コミュニケーション・スキル尺度

【聞く･話す】	いつもできない	できない	だいたいできる	いつもできる	備考
相手の話をさえぎることなく聞く	0	1	2	3	
適切に発表やスピーチをする（正しい姿勢、わかりやすいように話すなど）	0	1	2	3	
【非言語的スキル】					備考
適切な声の大きさで話をする	0	1	2	3	
タイミングよく、うなずき・あいづちを入れる	0	1	2	3	
身振りや手振りをうまく使って表現する	0	1	2	3	
【アサーション】					備考
知っている人に自分から挨拶をする	0	1	2	3	
集団に向かって自分の考えを述べる	0	1	2	3	
人に感謝の意を伝える	0	1	2	3	
いやなことはしっかりことわる	0	1	2	3	
くやしさや怒りを言葉で伝える	0	1	2	3	
わからないことは質問する	0	1	2	3	
親しい人に不安や心配なことを話す	0	1	2	3	
困ったとき、人に助けを求める	0	1	2	3	
【話し合い】					備考
話し合いの内容に沿った発言をする	0	1	2	3	
決まった意見に同意する	0	1	2	3	
話し合いの際、多数決、妥協案などの方法を提案する	0	1	2	3	

表２－６－４　ソーシャルスキル尺度（中学生用）の合計粗点から評価点への男子換算表

	1年男子			2年男子			3年男子			
評価点	集団行動	仲間関係	コミュニケーション	集団行動	仲間関係	コミュニケーション	集団行動	仲間関係	コミュニケーション	評価点
1	0-8	0-4	0-2	0-7	0-4	0-3	0-13	1-6	0-4	1
2	9-10	5	3-4	8-10	5	4-5	14-15	7	5	2
3	11-13	6-7	5-6	11-13	6-7	6	16-18	8	6-7	3
4	14-15	8	7-8	14-16	8	7-8	19-20	9	8-9	4
5	16-18	9	9-10	17-18	9	9-10	21-23	10-11	10-11	5
6	19-21	10	11-12	19-21	10	11-12	24-25	12	12-13	6
7	22-23	11	13-14	22-24	11-12	13-14	26-27	13	14-15	7
8	24-26	12	15-16	25-26	13	15-16	28-30	14	16-17	8
9	27-28	13	17-18	27-29	14	17-18	31-32	15	18-19	9
10	29-31	14	19-20	30-32	15	19-20	33-35	16-17	20-21	10
11	32-34	15	21-22	33-35	16	21-22	36-37	18	22-23	11
12	35-36	16	23-24	36-37	17-18	23-24	38-39	19	24	12
13	37-39	17-18	25	38-40	19	25	40-42	20	25-26	13
14	40-41	19	26-27	41-43	20	26-27	43-44	21	27-28	14
15	42-44	20	28-29	44-46	21	28-29	45-47		29-30	15
16	45-47	21	30-31	47-48		30-31	48		31-32	16
17	48		32-33			32-33			33	17

表２－６－５　ソーシャルスキル尺度（中学生用）の合計粗点から評価点への女子換算表

	1年女子			2年女子			3年女子			
評価点	集団行動	仲間関係	コミュニケーション	集団行動	仲間関係	コミュニケーション	集団行動	仲間関係	コミュニケーション	評価点
1	0-7	0-5	0-4	0-10	0-7	0-7	0-10	1-9	0-6	1
2	8-11	6	5-6	11-14	8	8-9	11-14	10	7-8	2
3	12-14	7	7-8	15-17	9	10-11	15-17	11	9-10	3
4	15-17	8	9-10	18-20	10	12-13	18-20	12	11-12	4
5	18-20	9	11	21-23	11	14-15	21-24	13	13-14	5
6	21-23	10	12-13	24-27	12	16	25-27	14	15-16	6
7	24-27	11-12	14-15	28-30	13	17-18	28-30	15	17-18	7
8	28-30	13	16-17	31-33	14	19-20	31-33	16	19	8
9	31-33	14	18-19	34-36	15	21-22	34-37	17	20-21	9
10	34-36	15	20-21	37-40	16-17	23-24	38-40	18-19	22-23	10
11	37-40	16	22-23	41-43	18	25-26	41-43	20	24-25	11
12	41-43	17	24-25	44-46	19	27	44-47	21	26-27	12
13	44-46	18	26	47-48	20	28-29	48		28-29	13
14	47-48	19	27-28		21	30-31			30-31	14
15		20-21	29-30			32-33			32-33	15
16			31-32							16
17			33							17

16　コミュニケーション・スキルの高まりを見る方法について

生徒のコミュニケーション・スキルの高まりを見る場面や項目、具体的な行動について「授業の雰囲気の観察方法」（P19、**表２－５**）の観察カテゴリー及び「ソーシャルスキル尺度（中学生用）」の「コミュニケーション・スキル尺度」（P21、**表２－６－３**）に示された内容を参考に、**表２－７**として整理し、今回の研究の検証に使用する指標として映像分析で活用することとする。

表２－７　コミュニケーション・スキルの高まりを見る項目と具体的な行動例

場面	項目	肯定的な人間関係行動	肯定的な情意行動
ゲーム中 （コート内）	非言語的スキル	・ハイタッチ ・応答	・拍手 ・ガッツポーズ ・歓声
	アサーション （自己主張）	・指示を出す（声かけ） ・ハンドサイン ・パスの要求	・残念がる、くやしがる
応援 （コート外）	非言語的スキル	・ハイタッチ	・拍手 ・ガッツポーズ ・歓声
	アサーション （自己主張）	・指示を出す ・ハンドサイン	・残念がる、くやしがる
話し合い	聞く（見る）話す 話し合い	・仲間の意見を聞く（見る） ・積極的に意見を言う ・内容に沿った発言をする	

第３章　検証授業

１　研究の仮説

ろう学校のバスケットボールの授業において、仲間との肯定的なかかわり合いを行えば、コミュニケーション・スキルを高めることができるであろう。

２　検証の方法

（１）期間

平成 23 年 10 月６日（木）～11 月１日（火）11 時間扱い

（２）場所

神奈川県立平塚ろう学校　体育館

（３）対象

中学部１～３年生（32 名）

平塚ろう学校中学部生徒の実態

障害区分	補助の有無	主に頼りとする コミュニケーション手段	1年生（15名）	2年生（10名）	3年生（7名）	計（32名）
聴覚障害（ろう・難聴）28名		手話、指文字 ・日本手話 ・日本語対応手話	11	8	5	24
		聴覚口話（音声） 書記日本語（筆談）	2	0	2	4
重複障害 4名	補助あり	手話、指文字 ・日本手話 ・日本語対応手話 ・身振り手振り	1	1		2
		聴覚口話（音声）	1	0		1
	補助なし	手話、指文字 ・日本手話 ・日本語対応手話 ・身振り手振り	0	1		1
		聴覚口話（音声）	0	0		0

（予備アンケートより）

（４）単元名

バスケットボール

（５）方法

ア　単元学習指導計画立案

イ　実態調査と分析（予備アンケート、事前・事後アンケート）

（ア）予備アンケート　７月 12 日（火）実施

（イ）事前アンケート　10 月４日（火）実施

（ウ）事後アンケート　11 月２日（水）実施

ウ　授業実践

エ　学習カードの分析（個人用、チーム用）

オ　映像の分析

カ　結果の分析

（６）分析の視点と方法

表３－１　分析の視点と方法

分析の視点	具体的な分析の観点と方法
（1）仲間と肯定的にかかわり合うための手立ては有効であったか。	ア　仲間と協力して助け合うことができたか。 （ア）個人用学習カードによる分析 （イ）チーム用学習カードの記述内容による分析 （ウ）個人用学習カード及び事後アンケートの記述内容による分析 イ　仲間にアドバイスするなど教え合うことができたか。 （ア）事前・事後アンケートによる分析 （イ）チーム用学習カードの記述内容による分析 （ウ）個人用学習カード及び事後アンケートの記述内容による分析 ウ　課題解決に向けて仲間と話し合うことができたか。 （ア）個人用学習カードの記述内容による分析 （イ）事前・事後アンケートによる分析 エ　仲間の良いところを見つけ認め合うことができたか。 （ア）個人用学習カードの記述内容による分析 （イ）事後アンケートの記述内容による分析
（2）コミュニケーション・スキルを高めることができたか。	ア　コミュニケーション・スキル尺度による分析 イ　事前・事後アンケートによる分析 ウ　映像による分析

※　事前、事後アンケートによる分析には、「はい」とそれ以外で、クロス集計によるカイ２乗検定を行った。なお、優位水準については、以下の通りである。

有意水準

マーク	文章中の表現	
＊	５％水準で有意差がある	$p<0.05$
＊＊	１％水準で有意差がある	$p<0.01$
ｎｓ	有意差は見られなかった	

形成的授業評価では、平均得点が２．５点以上で授業成果の目安と判断される。また平均得点が２点を下回る場合、得点を低下させた要因が授業中にあったと判断される。

３　学習指導計画

（1）単元の目標

＜第１、２学年＞

ア　ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開することができるようにする。（技能）

イ　積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、仲間のことを考えて特別ルールを考えるなどの話し合いに参加しようとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。（態度）

ウ　球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。（知識、思考・判断）

＜第３学年＞

ア　ボール操作と空間を作り出すなどの動きによってゴール前への進入などから攻防を展開す

ることができるようにする。（技能）

イ　自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすること、仲間のことを考えて特別ルールを考えるなどの話し合いに貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。（態度）

ウ　技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。（知識、思考・判断）

＜重複障害生徒＞

簡易化された用具やルールで、友だちと協力して安全に運動することができるようにする。

（２）評価規準

ア　第１、２学年

評価規準に盛り込むべき事項

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
球技の楽しさや喜びを味わうことができるよう、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとすることなどや、健康・安全に留意して、学習に積極的に取り組もうとしている。	球技を豊かに実践するための学習課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	球技の特性に応じて、ゲームを展開するための基本的な技能や仲間と連携した動きを身に付けている。	球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力、試合の行い方を理解している。

評価規準の設定例

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
・球技の学習に積極的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを守ろうとしている。 ・分担した役割を果たそうとしている。 ・作戦などについての話し合いに参加しようとしている。 ・仲間の学習を援助しようとしている。 ・健康・安全に留意している。	・ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 ・自己やチームの課題を見付けている。 ・提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。 ・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けている。 ・学習した安全上の留意点を他の練習場面や試合場面に当てはめている。	・ゴール型では、ゴール前での攻防を展開するためのボール操作と空間に走り込むなどの動きができる。	・球技の特性や成り立ちについて、学習した具体例を挙げている。 ・技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ・球技に関連して高まる体力について、学習した具体例を挙げている。 ・試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。

イ　第３学年

評価規準に盛り込むべき事項

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
球技の楽しさや喜びを味わうことができるよう、フェアなプレイを大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保して、学習に自主的に取り組もうとしている。	生涯にわたって球技を豊かに実践するための自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	球技の特性に応じて、ゲームを展開するための作戦に応じた技能や仲間と連携した動きを身に付けている。	技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法、試合の行い方を理解している。

評価規準の設定例

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
・球技の学習に自主的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを大切にしようとしている。 ・自己の責任を果たそうとしている。 ・作戦などについての話し合いに貢献しようとしている。 ・互いに助け合い教え合おうとしている。 ・健康・安全を確保している。	・提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。 ・仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。 ・作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための適切なかかわり方を見付けている。 ・健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。 ・球技を継続して楽しむための自己に適したかかわり方を見付けている。	・ゴール型では、ゴール前への侵入などから攻防を展開するための安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きができる。	・技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ・球技に関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。 ・運動観察の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ・試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。

（３）学習場面における具体の評価規準と学びの姿及びＣ・Ｃ△の生徒への手立て
（第１、２学年）

	（運動への、健康・安全への） 関心・意欲・態度	（運動についての、健康・安全についての） 思考・判断	（運動の）技能	（運動についての、健康・安全についての） 知識・理解
A○	①②③④⑤～いつも意欲的に取り組もうとしている。	①②③～適切に整理している。	①②③④～とてもよくできる。	①②③～常に十分言ったり書き出したりしている。
A	①②③④⑤～意欲的に取り組もうとしている。	①②③～整理している。	①②③④～よくできる。	①②③～十分言ったり書き出したりしている。
B	①積極的に取り組み、チームで勝敗を競う楽しさや喜びに触れようとしている。 ②仲間の学習を援助したり、フェアなプレイを守ろうとしている。 ③分担した役割を果たそうとしている。 ④作戦などについての話し合いに参加している。 ⑤健康・安全に気を配っている。	①ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるためのポイントを見つけている。 ②自己やチームの課題を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を整理している。 ③仲間と役割分担をする場面で、役割に応じた協力の仕方を見付けている。	①ゴール前の空いている場所に動いて守備者がいない位置でシュートすることができる。 ②マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ③パスを受けるために空いている場所に動くことができる。 ④ボールを持っている相手をマークすることができる。	①バスケットボールの技術や戦術の名称を言ったり書き出している。 ②練習や試合の行い方、簡易な試合のルール、審判や運営の仕方について、言ったり書き出したりしている。 ③バスケットボールに関連して高まる体力について、言ったり書き出したりしている。
C	①②③④⑤～取組もうとしないときがある。	①②③～整理が不十分になっている。	①②③④～できないときもある。	①②③～断片的に言ったり書き出したりしている。
C△	①②③④⑤～取組もうとしない。	①②③～整理できずにいる。	①②③④～全くできないでいる。	①②③～全く言ったり書き出したりできずにいる。
C C△ の 生 徒 の 手 立 て	・バスケットボールの楽しさや喜びについて、興味が持てるように説明する。 ・フェアなプレイをしたり、分担した役割を果たすことでみんなが楽しく取組めることを説明し、肯定的な声かけをする。 ・安全に活動することの大切さを説明する。	・学習ノートや映像を通じて課題を見付けられるようにする。 ・発問したりアドバイスすることで思考を促す。 ・教師や仲間が見本を示してイメージを持たせるようにする。	・つまづきのポイントを明確にして系統立てて指導する。 ・具体的にどういう動きをするのか見本を示しながら、練習では意識してゆっくりと行うよう支援する。	・学習資料を活用し、練習内容や方法について具体的に示すことで理解を促す。 ・グループでのコミュニケーションが活発になるように支援し、理解が深まるよう促す。

（第３学年）

	（運動への、健康・安全への） 関心・意欲・態度	（運動についての、健康・安全についての） 思考・判断	（運動の）技能	（運動についての、健康・安全についての） 知識・理解
A○	①②③④⑤～いつも意欲的に取り組もうとしている。	①②③～適切に整理している。	①②③④～とてもよくできる。	①②③～常に十分言ったり書き出したりしている。
A	①②③④⑤～意欲的に取り組もうとしている。	①②③～整理している。	①②③④～よくできる。	①②③～十分言ったり書き出したりしている。
B	①自主的に取り組み、チームで勝敗を競う楽しさや喜びに触れようとしている。 ②仲間と教え合いながら、ゲームではフェアなプレイを大切にしようとしている。 ③自己の責任を果たそうとしている。 ④作戦などについての話し合いに貢献している。 ⑤健康・安全を確保するために体調管理に気を配っている。	①仲間に技術的な課題や有効な練習方法を選んで指摘している。 ②自己のチームや相手チームの特徴を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を選んでいる。 ③作戦などの話し合いの場面で、チームの合意を形成するためのかかわり方を見付けている。	①守備者が守りにくいタイミングで、シュートをゴール枠内にコントロールすることができる。 ②マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方に操作しやすいパスを送ることができる。 ③パスを出した後に次のパスを受ける動きをすることができる。 ④ゴール前の空いている場所をカバーして守ることができる。	①バスケットボールで用いられる技術や戦術等の名称があり、それらをゲーム中に適切に発揮することが攻防のポイントであることなどを言ったり書き出している。 ②練習や試合の行い方、ゲームのルール、審判や運営の仕方について、言ったり書き出したりしている。 ③ゲームに必要な技術と関連させて補助運動や部分練習を取り入れ、継続して取り組むことで体力を高めることができることについて、言ったり書き出したりしている。
C	①②③④⑤～取組もうとしないときがある。	①②③～整理が不十分になっている。	①②③④～できないときもある。	①②③～断片的に言ったり書き出したりしている。
C△	①②③④⑤～取組もうとしない。	①②③～整理できずにいる。	①②③④～全くできないでいる。	①②③～全く言ったり書き出したりできずにいる。
C C△ の生徒の手立て	・バスケットボールの楽しさや喜びについて、興味が持てるように説明する。 ・フェアなプレイをしたり、分担した役割を果たすことでみんなが楽しく取組めることを説明し、肯定的な声かけをする。 ・安全に活動することの大切さを説明する。	・学習ノートや映像を通じて課題を見付けられるようにする。 ・発問したりアドバイスすることで思考を促す。 ・教師や仲間が見本を示してイメージを持たせるようにする。	・つまづきのポイントを明確にして系統立てて指導する。 ・具体的にどういう動きをするのか見本を示しながら、練習では意識してゆっくりと行うよう支援する。	・学習資料を活用し、練習内容や方法について具体的に示すことで理解を促す。 ・グループでのコミュニケーションが活発になるように支援し、理解が深まるよう促す。

（４）指導と評価の計画

時間	学習のねらいと活動	学習活動における具体の評価規準				評価方法
		関心意欲態度	思考判断	運動の技能	知識理解	
第1次 オリエンテーション（1時間目）	（1、２年及び３年）学習のねらいや全体のイメージをつかみ、バスケットボールの特性を知る。 （重複）仲間とかかわりながら体を動かす。 1　オリエンテーション ・学習のねらい ・学習の全体のイメージをつかむ。 2　ためしのゲーム ・各チームの実態把握	⑤			③	【関・意・態】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 【知・理】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像）
第2次（2時間目～7時間目）	（1、２年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。 （３年）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作りだすための動きを身に付ける。 （重複）友だちと協力して安全に練習に取り組む。 1　集合・挨拶・健康観察・準備運動 2　本時のねらいの確認 3　ドリルゲーム ・30 秒シュート ・３対１パスゲーム ・ドリブルシュートリレー 4　チーム練習 （２時間目）シュート練習 （３～５時間目）３対１パスゲーム 5　タスクゲーム （６時間目）ハーフコートゲーム （７時間目）セーフティエリア・ルール	③ ④	① ②	① ③	①	【関・意・態】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 【思・判】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 【技能】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 記録カード 【知・理】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像）

時間	学習のねらいと活動	学習活動における具体の評価規準				評価方法
		関心意欲態度	思考判断	運動の技能	知識理解	
第3次（8時間目～11時間目）	（1、2年）練習やゲームを通して仲間と積極的にかかわりながら、チームで話し合った作戦を成功させゲームを楽しむ。 （3年）練習やゲームを通して仲間と自主的にかかわりながら、チームで話し合った作戦を成功させゲームを楽しむ。 （重複）きまりやルールを守って、みんなとゲームを楽しむ。 1　集合・挨拶・健康観察・準備運動 2　本時のねらいの確認 3　タスクゲーム（8時間目） 4　練習試合（9時間目） 5　確かめの試合（10時間目～11時間目）	① ②	③	② ④	②	【関・意・態】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 【思・判】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 【技能】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像） 記録カード 【知・理】 個人用学習カード チーム用学習カード 行動観察（映像）

（5）時間ごとの評価計画

観点		1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目	11時間目
関心・意欲・態度	①											◎
	②											◎
	③					◎						
	④						◎					
	⑤	◎										
思考・判断	①		◎									
	②						◎					
	③										◎	
運動の技能	①				◎							
	②								◎			
	③			◎								
	④									◎		
知識・理解	①			◎								
	②							◎				
	③	◎										

◎は、重点的に評価する観点

（６）重複障害生徒の個人目標

生徒	学年	体育の目標	単元目標	内容・方法・手立て
A	1	活動に興味をもち、楽しく体を動かすことができるようにする。	補助してもらいながらボールを保持したり仲間を意識して投げたりしてみんなと一緒に運動することができるようにする。	ビブスの色を意識するよういつも着用する。仲間からの声かけを多くしてチームの仲間を意識させる。
B	1	集団の中で楽しく運動に取り組む。きまりを守り安全に活動できるようにする。	チームの仲間と協力し、集中して指示された運動を安全にできるようにする。	仲間や周りからの声かけを多くして、関心が授業に向くように支援する。
C	2	マスゲームでは仲間と協力し、安全に気を付けて活動する。球技では自分の役割に応じた動きができるようにする。	簡易化された道具やルールの下、自分の役割に合わせて、無理せず安全に運動することができるようにする。	タスクゲームやゲームでも、補助が代わりにボールを受けることでその後のプレイができるようにする。
D	2	協力してマスゲームを覚え、表現豊かに行うことができるようにする。球技では積極的にゲームをすることができるようにする。マラソン大会に参加することができるようにする。	自分の体調や体力に注意しながら仲間と協力しながら安全に運動することができるようにする。	取り組む課題ごとに本人と相談しながら進めていく。適切に声かけをしてオーバーワークにならないように意識させる。

（７）バスケットボールの授業の実際　（45 分×11 時間）

月日		10月6日（木）	10月11日（火）		10月13日（木）	10月18日（火）	
時		1	2	3	4	5	6
ねらい	1,2年	学習のねらいや全体のイメージをつかみ、バスケットボールの特性を知る。	分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。				
	3年	学習のねらいや全体のイメージをつかみ、バスケットボールの特性を知る。	自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。				
	重複	仲間とかかわりながら体を動かす。	友だちと協力して安全に練習に取り組む。				
はじめ		集合・挨拶 健康観察 準備運動 <オリエンテーション> ・学習のねらい ・学習の流れを説明し全体のイメージをつかむ。	集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時の ねらいの確認	本時の ねらいの確認	集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時の ねらいの確認	集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時の ねらいの確認 きょうだいチームを決める。	本時の ねらいの確認
なか		・チームのキャプテンと副キャプテン、体操係、チーム名を決める。 <ためしのゲーム> ・ためしのゲームの先発と交代するメンバーを決める。 ・3分ハーフ、前後半で交代し全員が出場する。 ・ペアチームが記録する。 ・各チームの実態把握	ミーティング <話し合いルール> ・話し合い中に他のことをしない。 ・良くない言葉は使わない。 ハンドサイン <チーム練習1> （シュート練習） ・シュート（技能）のポイントを掲示する。 ・重複障害生徒は別ゴールを準備する。 チーム内 相互評価 <ドリルゲーム1> （30秒シュート）	ハンドサイン <チーム練習2> （3対1ﾊﾟｽｹﾞｰﾑ） ・パスゲーム（技能）のポイントを掲示する。 ・オフェンスとディフェンスの両方を練習する。 ミーティング ・ドリルゲーム2のオフェンス担当とディフェンス担当を決める。 チーム内 相互評価 <ドリルゲーム2> （3対1ﾊﾟｽｹﾞｰﾑ）	ハンドサイン チーム内 相互評価 <ドリルゲーム1> （30秒シュート） <チーム練習3> （3対1ﾊﾟｽｹﾞｰﾑを発展させて） ・コートを1／4に分けて練習する。 ・ゴール前でディフェンスの後ろ（ブラインド）から空いている空間でパスを受けてシュートする。 <練習時の約束行動> ・アドバイスをもらったら「ありがとう」と応える。 ・失敗を責めない、笑わない。	ミーティング ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒 への補助 <ドリルゲーム3> （ドリブルシュートリレー） <チーム練習3> （3対1ﾊﾟｽｹﾞｰﾑを発展させて） ・仲間が重複障害生徒を補助して一緒に練習する。 <練習時の約束行動> ・ドリルゲーム等活動を終えた仲間とタッチする。	ミーティング <話し合いルール> ・わからないときは、その場で質問する。 ・タスクゲーム1の役割分担をする。 ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒 への補助 ルール作り <タスクゲーム1> （ハーフコートゲーム） ・セーフティエリアを設置 ・3分ハーフ（ﾊｰﾌﾀｲﾑは1分）、前後半で交代し全員が出場する。
まとめ		学習カード記入・学習の振り返り		学習カード記入・学習の振り返り	学習カード記入・学習の振り返り		学習カード記入・学習の振り返り
		片付け・次回の学習の確認・挨拶	次時の予告	片付け・次回の学習の確認・挨拶	片付け・次回の学習の確認・挨拶	次時の予告	片付け・次回の学習の確認・挨拶
主たるかかわり合い活動			教え合い → 話し合い →			助け合い → 話し合い →	→
			認め合い →				→

月日		10月20日（木）	10月25日（火）	10月27日（木）	11月1日（火）	
時		7	8	9	10	11
ねらい	1,2年		練習やゲームを通して仲間と積極的にかかわりながら、チームで話し合った作戦を成功させゲームを楽しむ。			
	3年		練習やゲームを通して仲間と自主的にかかわりながら、チームで話し合った作戦を成功させゲームを楽しむ。			
	重複		きまりやルールを守って、みんなとゲームを楽しむ。			
はじめ		集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時の ねらいの確認	集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時の ねらいの確認	集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時の ねらいの確認	集合・挨拶 健康観察 準備運動 本時・次時の ねらいの確認 全体で 平ろうルール確認	ミーティング ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒への補助ルール作り ＜確かめのゲーム＞ （チーム対抗戦） 〈ｹﾞｰﾑ時の約束行動〉 ・かけ声をかける。 ・始まりと終わりに相手と握手をする。 ・良いプレイのときはハイタッチをする。 ・第3試合 Ａ vs Ｄ ・第4試合 Ｂ vs Ｃ ・平ろうカップ閉会式 （表彰式、講評）
なか		・チームディフェンスの説明をする。 ミーティング ＜話し合いルール＞ 仲間の発言を最後まで聞く（見る）。 ・タスクゲーム2の役割分担をする。 ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒への補助ルール作り ＜タスクゲーム2＞ （セーフティエリアルール） ・セーフティエリア、スペシャルエリアを設置 ・3分ハーフ（ﾊｰﾌﾀｲﾑは1分）、前後半で交代し全員が出場する。	ミーティング ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒への補助ルール作り ＜タスクゲーム2＞ （セーフティエリアルール） 〈ｹﾞｰﾑ時の約束行動〉 ・かけ声をかける。 ・始まりと終わりに相手と握手をする。 ・良いプレイのときはハイタッチをする。 ミーティング 重複障害生徒への補助ルール作り ・平ろうルールについて ＜話し合いルール＞ ・意見に対して「どうして？」と理由を求める。	ミーティング ・平ろうルールについて班ごとに発表する。 ＜話し合いルール＞ ・意見に対して「どうして？」と理由を求める。 ミーティング ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒への補助ルール作り ＜練習試合＞ ・3分ハーフ（ﾊｰﾌﾀｲﾑは1分）、前後半で交代し全員が出場する。 〈ｹﾞｰﾑ時の約束行動〉 ・かけ声をかける。 ・始まりと終わりに相手と握手をする。 ・良いプレイのときはハイタッチをする。	・組み合わせ発表 ・平ろうカップ開会式 ミーティング ハンドサイン きょうだいチーム 重複障害生徒への補助ルール作り ＜確かめのゲーム＞ （チーム対抗戦） 〈ｹﾞｰﾑ時の約束行動〉 ・かけ声をかける。 ・始まりと終わりに相手と握手をする。 ・良いプレイのときはハイタッチをする。 ・3分ハーフ（ﾊｰﾌﾀｲﾑは1分）、前後半で交代し全員が出場する。 ・第1試合 Ａ vs Ｃ ・第2試合 Ｂ vs Ｄ	
まとめ		学習カード記入・学習の振り返り	学習カード記入・学習の振り返り	学習カード記入・学習の振り返り		学習カード記入・学習の振り返り
		片付け・次回の学習の確認・挨拶	片付け・次回の学習の確認・挨拶	片付け・次回の学習の確認・挨拶		片付け・挨拶

（８）かかわり合い活動に関する学習指導の工夫について

表３－２は、実際の授業場面で行う主なかかわり合いについて、整理したものである。

表３－２　主なかかわり合い活動

時間	重複障害生徒との 助け合い	学習内容を明確 にした教え合い	聴覚障害生徒同士の 話し合い	サインで伝える 認め合い
1				
2、3		チーム内相互評価	ミーティング	ハンドサイン
4		↓		↓
5、6	重複障害生徒への補助 ルール作り	きょうだいチーム	チームの作戦、戦術に 関するミーティング	↓
7	↓	↓	↓	↓
8	↓	↓	↓	↓
9	↓	↓	↓	↓
10、11	↓	↓	↓	↓

ア　重複障害生徒との助け合い

（ア）個人差への配慮

生徒Ａ・Ｂは、学習内容の理解が不十分で集中力も持続しないため、原則としてすべての場面で補助に付く。

生徒Ｃについては、視野狭窄があり、視力が悪いので、危険を回避するために原則としてすべての場面で補助に付く。

生徒Ｄについては、場面場面で本人の意志を確認しながら、仲間と同じ内容で取り組むか補助を付けて取り組むかを決めていく。仲間の協力は必要となるが、原則として補助は付かない。

（イ）補助について

ａ　ドリルゲーム、タスクゲーム、チーム練習では、チームの仲間が目標物を指差したり、誘導したりして一緒に取り組めるように補助をする。

ｂ　ゲームのときは、試合に出ていない同じチームの仲間が補助をする。

（ウ）ゲームでの特別ルール

第１時間目の「ためしのゲーム」から、「トラベリング」「ダブルドリブル」は反則としてとらないことを全体で確認する。

単元後半の練習試合や最後の「平ろうカップ」に向けて、重複障害生徒の特別ルールを追加していき、全体の場で確認しながら「平ろうルール」を作りあげていく。

ルール作りの項目は、重複障害生徒のルール、得点方法、スペシャルエリア・ルール、セーフティエリア・ルールを採用するか否かについて、及びチームから提案されたものを検討していく。

（エ）教具の工夫

重複障害生徒用ゴールは、特別ゴールを用意する。シュート練習では、投げる力を考慮してボールや距離を変えて練習に取り組ませる。

このような工夫をすることで、重複障害生徒もみんなと一緒に授業へ参加でき、周りの生徒も今まで以上に重複障害生徒とのかかわる時間がもてるようになると考える。

イ　学習内容を明確にした教え合い

（ア）チーム編成について

単元を通して同じメンバーでチームを構成する。メンバーを固定することで、生徒たちはお互いに様子がわかり、協力して学習に取り組みやすくなる。そうすることによって時間を追うごとに生徒同士のコミュニケーションが活発に行われるようになるのではないかと考える。

メンバーを決めるにあたっては、人間関係を考慮するとともに、リーダー性、運動技能、男女、学年、重複障害生徒など様々な生徒が混在する異質グループになるように構成する。このようなグループにすることで、生徒同士のかかわりの中で、教え合いや認め合いが生まれやすくなり、コミュニケーション・スキルの向上が期待できると考える。

（イ）学習資料の工夫

学習カードは、個人用学習カードとチーム用学習カードを用意する。

個人用学習カードは、感想の他は、記入するのに時間がかからないようできるだけ記述欄を減らし、授業の振り返りについては選択形式にする。質問の文章もできるだけ易しいことばを選ぶよう心掛ける。毎時、仲間のことを一番助けたり応援していた人の名前を書かせ、それを次時に班ごとに発表して賞賛していく。全体の場で賞賛することにより、生徒同士が協力し合う行動が班の中に広まり、肯定的な雰囲気が高まっていくと考える。

チーム用学習カードは、自チームで記入するものときょうだい（ペア）チームが記入するものを用意する。自チームでは、練習時に相互評価をさせる。また、きょうだいチームは、タスクゲーム、ゲームのときの記録をとり、アドバイスしながら報告させる。受け取ったチームは、その資料を参考にしてミーティングや作戦タイムで話し合いを行い、次にいかしていく。

（ウ）かかわり合う方法について

チーム練習やドリルゲームでは、１人の動きや技をチームの仲間が観察・評価をするチーム内相互評価を行わせる。また、タスクゲームやゲームでは、きょうだいチームを決め、１つのグループとして観察・評価させることにより、お互いが励まし合ったりアドバイスしたりすることができ、肯定的な関係へと意図的に進めることができると考える。[26)]

（エ）視覚的資料の活用

今回は、授業の様子をビデオに撮り、ポイントとなるところを次時の導入時に見せることとする。実際にビデオの映像を見ることによって、チームや自己の課題に気付く助けになると考える。そして、ホワイトボードを活用して、毎時の学習のねらいを掲示し、学習者一人ひとりがしっかりねらいを持って授業に臨めるように心がける。

また、いろいろなパスやシュートなどのスキルについても、わかりやすいようにイラストカードを作成していつでも確認できるよう掲示する。

その他の掲示物としては、肯定的な良いアドバイスの言葉を学習カードから拾って、班ごとに分けて紹介する。

教師が学習者に話をするときは、音声とともに必ず日本語対応手話を使うようにする。ろう学校においては、とにかく目から入る情報を大切にする。

ウ　聴覚障害生徒同士の話し合い

（ア）「話し合いのルール」（**図３－１**）を活用する。[21)]

話し合いがスムーズに行われるように、生徒同士の肯定的なかかわり合いが促されるように、「話し合いのルール」を提示することで、肯定的にかかわりやすい状況を設定していく。

＜３学年共通＞
・仲間の発言を最後まで聞く（見る）。
・わからないときは、その場で質問する。
・自分と違う考えでも間違いと決めつけない。
・話し合い中に、他のことをしない。
・良くない言葉を使わない。
・意見に対して、「どうして？」と理由を求める。

図３－１　話し合いのルール

（イ）話し合い活動では、例示を示す。

話し合い活動では、話し合う課題を明確にする。そして何もないところから話し合わせても進展していかないので、予想される答えを例示として示す。その中から自チームの状況を考え、判断させるようにする。また、その例示がきっかけとなって新たな気付きにつながることを期待する。

エ　サインで伝える認め合い

（ア）「ハンドサイン」の工夫

「仲間が失敗したとき」「仲間が成功したとき」「仲間が頑張っているとき」など、練習や試合の場面でよく出会うシーンで、どのように声をかけるかを生徒たちに投げかけ、「ドンマイ」や「やったね」、「ナイス」、「がんばれ」などの言葉を、班ごとに「サイン（身振り・手話など）」を決めて表現する。サインを決めることによって、口話（音声）や手話など主に使用するコミュニケーション手段が違う生徒同士でも、試合中や練習中に離れていても、アイコンタクトが取れれば、お互いの意志が伝達でき、コミュニケーションが図れると考える。

（９）その他の学習指導における工夫について

ア　授業のマネジメントについて[9)]

一単位の授業時間中の運動活動場面に配当される時間が多くなるように、集合場所、整列の約束事を決めて効率よく進められるように工夫する。

また効果的な授業を行うには学習場面の雰囲気も大切である。（８）で示したかかわり合い活動を通して、チームのメンバーに対する肯定的な評価を促し、お互いに協力し合う雰囲気を作っていけるように支援していく。

肯定的な雰囲気ができることによって、生徒同士の助言、励まし、補助、協同的作業といった場面が増え、また笑いや歓声、喜びの表現といった情緒的な解放も多く出現すると考える。

イ　学習場面での約束行動

それぞれの学習場面で、前述した「話し合いのルール」（**図３－１**）、そして「練習時の約束行動」（**図３－２**）、「ゲーム時の約束行動」（**図３－３**）を提示することで、生徒同士が肯定的にかかわりやすい状況を設定していく。[27)28)]

（ア）シュート練習、パスゲームなどチーム内で活動するとき

「練習時の約束行動」を示す。

（イ）ゲームを行うとき

・全員で決めた特別ルールを採用する。
・「ゲーム時の約束行動」を示す。

＜３学年共通＞
・失敗を責めたり、笑ったりしない。
・アドバイスしてもらったら、「ありがとう」と応える。
＜１、２学年＞
・ドリルゲームなどで活動を終えた仲間とタッチする。
・チームで決めた「ハンドサイン」を積極的に発信する。
・「ハンドサイン」を送られたら手を挙げて応える。
・重複の仲間に対しては、みんなで交代しながら補助をする。
＜３学年＞
・ドリルゲームなどで活動を終えた仲間と積極的にタッチする。
・チームで決めた「ハンドサイン」を自主的に発信する。
・「ハンドサイン」を送られたら手を挙げて笑顔で応える。
・重複の仲間に対しては、交代しながら進んで補助をする。

図３－２　練習時の約束行動

＜３学年共通＞
・チームで円陣を組んで、かけ声をかける。
・始まりと終わりの挨拶では相手選手と握手をする。
・良いプレイのときは、仲間とハイタッチをする。
＜１、２学年＞
・きょうだいチームは記録をして、良かったプレイを伝える。
・チームで決めた「ハンドサイン」を積極的に発信する。
・「ハンドサイン」を送られたら手を挙げて応える。
・重複の仲間に対しては、みんなで交代しながら補助をする。
＜３学年＞
・きょうだいチームは記録をして、良かったプレイを適切に伝える。
・チームで決めた「ハンドサイン」を自主的に発信する。
・「ハンドサイン」を送られたら手を挙げて笑顔で応える。
・重複の仲間に対しては、交代しながら進んで補助をする。

図３－３　ゲーム時の約束行動

ウ　「平ろうカップ」の開催

第１時間目のオリエンテーションのときに、最後に「平ろうカップ」を開催することを告げる。キャプテンなど係分担を決め、またチーム名も決めて、自チームへの愛着をもって団結して取り組んでいくように促す。

表彰式では、優勝、準優勝だけでなく、仲間と助け合う活動ができていたチームと個人も表彰することを伝える。そうすることで、仲間を応援したり重複障害生徒を補助したりすることを促し、試合に出ていないときもゲームに集中し、チームの肯定的な雰囲気が高まってくると考える。

エ　ドリルゲーム・タスクゲームについて[9)]

ボール運動（球技）では、メインゲームが単元教材作りの対象として位置付けられる。学習者はボール操作が難しかったり、ゲーム中に求められる判断が複雑であったりすると十分に楽しむことができない。そのため、ボール操作に関わった技能の習得を促す「ドリルゲーム」や

ゲームの中で要求される判断に基いた行動をやさしく学習する「タスクゲーム」を取り入れていく必要がある。

(ア) ドリルゲーム

ボール操作の技術や動き方に関わる練習内容をゲーム化したもの。漫然と繰り返される個々の技能の反復練習を明確な行動目標を設定することでゲーム化し、生徒の学習意欲を喚起させるもの。

a　ドリルゲーム１　＜30 秒シュート＞

ねらい	・ゴール下でシュートを確実に決められる技能を身に付ける。
方　法	・４つのゴールを使用する。１人ずつ 30 秒間連続で斜め 45 度の位置からシュートを打つ。入った回数はチームの仲間が数え、記録カードに記入する。(重複障害生徒は別ゴールを準備する) ・仲間の様子を注視し、ゴール数を数えて伝える。
指導のポイント	・シュートはバックボードを利用する。 ・活動を終えた生徒は仲間とタッチを交わす。 ・シュート（技能）のポイントを掲示する。

b　ドリルゲーム２　＜３対１パスゲーム＞

ねらい	・パスを受けるための動きを身に付ける。
方　法	・話し合いでオフェンス担当３人とディフェンス担当１人（２セット）を決める。 ・グリッドを作り、その中で３対１パスゲームをする。ディフェンスの頭越しのパスは禁止。パスは必ず左右両サイド。パスの受け手は、早くディフェンスのブラインドから出て、グリッドのコーナーへ移動してパスを受ける。２分間行い、パスの成功回数を数える。２回の合計で競う。
指導のポイント	・活動を終えた生徒は仲間とタッチを交わす。 ・パスゲーム（技能）のポイントを掲示する。 ・チーム練習で教え合いを促す。

c　ドリルゲーム３　＜ドリブルシュートリレー＞

ねらい	・スペシャルエリア（ドリルゲーム１でシュートした場所）へすばやくドリブルで移動してシュートを確実に決められる技能を身に付ける。
方　法	・２つのゴールを使用する。チームごとに１列に並んでセンターラインから開始してドリブルシュート（レイアップでもセットでもよい）を２分間連続して行う。ゴールの成否にかかわらず、１本シュートを打ったらドリブルして戻り次の人のボールを投げずに手渡す。 ・シュートは入ったら２点、リングに当たったら１点とし、２分間の合計得点を競う。(重複生徒は別ゴールを準備する）２分間が終了したらきょうだいチームと交代する。 ・きょうだいチームが得点を数えて発表し、良かった点を伝える。
指導のポイント	・シュートのとき、慌てずに確実なシュートを打つよう伝える。 ・きょうだいチームは良かった点を伝えられるように活動している様子を見るよう指示する。 ・活動を終えた生徒は仲間とタッチを交わしながら最後尾に並ぶ。 ・スペシャルエリアを示し、そこへボールを運ぶことが得点しやすくなることを伝える。

（イ）タスクゲーム

ゲームにおける技能や戦術を高めるために、特定の課題が焦点化されるように修正されたゲームのこと。

タスクゲーム作りの原則として次のことがあげられる。

・習得させたい技術・戦術的課題が明確であること。

・ゲーム本来の特性を失わないように課題に応じてコートや人数を修正すること。

a　タスクゲーム１　＜ハーフコートゲーム＞

ねらい	・セーフティエリアを作り、補助を含め攻守の担当を分けることで、一人ひとりがチーム内の役割に責任を持って取り組めるようにする。
方　法	・話し合いでオフェンス担当３人とディフェンス担当２人（２セット）を決める。 ・オフェンス担当とディフェンス担当の役割分担をする。オフェンス担当はフロントコートのみ、ディフェンス担当はバックコートのみのため、いつもアウトナンバーゲームが成立する。３分ハーフ（ハーフタイム１分）の試合を行う。必ず１人１回は出場する。シュートが決まったり、ディフェンスがカットしたら、２人でパスをつないでセーフティエリア（両サイドラインとセンターラインが交わる辺り）までボールを運べる。（重複障害生徒はセーフティエリアでプレイする） ・シュートが入ったら２点、リングに当たったら１点とする。 ・スペシャルエリアを設置し、そこへボールを運んだらフリーでシュートできる。 ・セーフティエリアの重複障害生徒を経由してからフロントコートへボールをつなぐ。
指導のポイント	・きょうだいチームは良かった点を伝えられるように活動している様子を見るよう指示する。 ・分担した役割をそれぞれが果たすことができたかチームで話し合う。 ・自分の希望だけでなく、チーム全体のことを考えさせる。

b　タスクゲーム２　＜セーフティエリア・ルール＞

ねらい	・重複障害生徒やなかなかボールに触れる機会の少ない生徒にもパスがまわり、仲間とのパス交換が行われやすい状況を作る。 ・慌てずに落ち着いてプレイできる状況を作る。
方　法	・セーフティエリア・ルールを適用する。セーフティエリアはノープレッシャーでプレイできる。３分ハーフ（ハーフタイム１分）で行う。（重複障害生徒はセーフティエリアでプレイする） ・シュートが入ったら２点、リングに当たったら１点とする。
指導のポイント	・話し合いでポジションや作戦を決める。 ・きょうだいチームは良かった点を伝えられるように活動している様子を見るよう指示する。 ・作戦がうまく機能したかチームで話し合う。

4　授業の実際

11時間扱いの第1時間目　　平成23年10月6日（木）　第4校時（11:40～12:25）

ねらい （1，2年）学習のねらいや全体のイメージをつかみ、バスケットボールの特性を知る。
（　3年　）学習のねらいや全体のイメージをつかみ、バスケットボールの特性を知る。
（ 重 複 ）仲間とかかわりながら体を動かす。

本時のねらい （1，2年）・仲間と運動を楽しむとともに、バスケットボールに関連して高まる体力を理解する。
・健康と安全に気を配っている。
（　3年 ）・仲間と運動を楽しむとともに、ゲームに関連した運動に取り組むことで体力が高まることを理解する。
・健康・安全を確保するために体調管理に気を配っている。
（ 重複 ）・仲間と一緒に行動して練習やゲームで体を動かす。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ20分	○　集合・整列・挨拶・出席確認 ○　オリエンテーション 【学習内容】 巧緻性、敏捷性、スピード、全身持久力などが、バスケットボールの練習等に関連して高まること。 ○　準備運動 ・チームに分かれ、キャプテン等の係やチーム名を決める。 ・ためしのゲームの先発と交代するメンバーを決める。	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・集合や整列はリーダー（3年）を中心にすばやく行うよう伝える。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・ケガをしないようにしっかり行うよう伝える。 ・バスケットボールの特性を説明し理解させる。	（1，2年） 【知識・理解】 ③バスケットボールに関連して高まる体力について、言ったり書き出したりしている。 （3年） 【知識・理解】 ③ゲームに必要な技術と関連させて補助運動や部分練習を取り入れ、継続して取り組むことで体力を高めることができることついて、言ったり書き出したりしている。
なか20分	【学習内容】 学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などが大切なこと。 1　ためしのゲーム ・現状の技能におけるゲームの様相を知る。 ・各チーム1試合（3分ハーフ）を行う。 ・交代しながら全員が出場する。 ・ペアチームが記録をとる。	・チームの中で協力し合いながら取り組むようアドバイスする。 ・安全に留意して、みんなで楽しくゲームができるような雰囲気づくりを大切にするよう支援する。 ・重複障害生徒はゲームでバイオレーションを取らないこと、別ゴールを使用することを全体で確認する。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・学習資料を活用し、練習内容や方法について具体的に示すことで理解を促す。 ・安全に活動することの大切さを説明する。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・チームごとにビブスを着て、自分が所属するチームがわかるようにする。	（1，2年） 【関心・意欲・態度】 ⑤健康・安全に気を配っている。 （3年） 【関心・意欲・態度】 ⑤健康・安全を確保するために体調管理に気を配っている。
まとめ5分	○　学習カードの記入と振り返り ○　片付け・次回の学習の確認・挨拶	・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に説明する。 ・協力して片付けを行うようにする。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・最初の授業ということもあり、生徒たちは緊張気味であったが、終始意欲的に取り組んでいた。
・予想以上に話し合いの時間必要だった。「チームのねらい」を決めるにあたって、例示を示し参考にするよう伝えたが、今回はあまり効果的ではなかった。毎時やるべき内容がわかり、例示を活用できるようになってくると変わってくるとは思う。時間に追われ、私自身も説明が十分ではなかった。
・話し合いやゲーム時の様子を見て、チーム力のバランスは概ね良いと思う。
・できれば補助に入っている教員とも、動き方などもっと具体的に打ち合わせをする時間をもちたい。
・重複障害生徒も自分が所属するチームを理解し、仲間と一緒に取り組んでいた。

11時間扱いの第2時間目　　平成23年10月11日（火）　第5校時（13:25～14:10）

ねらい （1，2年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。
（ 3年 ）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。
（ 重 複 ）友だちと協力して安全に練習に取り組む。

本時のねらい（1，2年）ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるためのポイントを見つける。
（ 3年 ）仲間に技術的な課題や有効な練習方法を選んで指摘する。
（ 重 複 ）仲間と一緒に取り組み、ゴールを意識してシュートする。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ 15分	○ 準備運動 ○ 集合・整列・挨拶・出席確認 ○ 本時の説明	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・前時の映像を見せながら、学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・前時の学習カードから仲間を助けていた人やチームワークを高めることばを紹介して肯定的な雰囲気を高める。	
なか 25分	【学習内容】 ボール操作やボールをもたないときの動きなどの技術を身に付けるために工夫すること。 課題や有効な練習方法を選ぶための取り組み方を工夫すること。 1 ミーティング ・チームで「ハンドサイン」を決めて、みんなが使えるように練習する。 ・「話し合いルール」を確認する。 2 「ハンドサイン」を使う練習 3 チーム練習1（シュート練習） ・シュートのポイントを確認する。 4 ドリルゲーム1 （30秒シュート） （チーム内相互評価）	・話し合う「ハンドサイン」の内容を掲示する。 ・ミーティングでは「話し合いルール」の内容を確認し掲示する。 ・話し合い中に他のことをしない。 ・良くない言葉は使わない。 ・バックボードの使い方、確実性の高いシュートの方法を説明する。（スペシャルエリア） ・シュートのポイントをわかりやすい場所へ掲示する。 ・ドリルゲーム1では、チームの仲間が取り組んでいる様子をお互いに観察し、アドバイスカードを使って教え合うよう指示する。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・シュートがうまく入らない生徒には、発問したりアドバイスすることで思考を促す。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・重複用別ゴールを準備して距離や高さを調節してシュート練習に参加させる。 ・個々の力量によってボールを小さいものや軽いものに変える。 ・練習に参加できない場合はボールを渡す係など可能な範囲で仲間とかかわらせる。	（1，2年） 【思考・判断】 ①ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるためのポイントを見つけている。 （3年） 【思考・判断】 ①仲間に技術的な課題や有効な練習方法を選んで指摘している。
まとめ 5分	○ 振り返り ○ 次時の学習の確認	・「ハンドサイン」を発信できたかたずねる。 ・次時の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・導入の部分で、掲示物が多すぎて説明が簡潔でなかった。こちらが混乱した分、生徒たちにも十分伝わらなかったのではないかと思われる。
・前時の反省から時間配分には注意していたのだが、本時の説明で5分超過してしまったため、活動中に時間的なゆとりをもてなかった。
・ビデオカメラ担当者とはいつも打ち合わせができず、直前にお願いする形なので、なかなかこちらの意図が十分伝えきれない。お願いしたいことを書いて三脚に貼るなど工夫が必要である。
・チーム内で相互評価をさせたことによって、生徒同士のやりとり、教え合いの場面が多くなった。
・重複障害生徒も特別ゴールを使って、仲間とともにシュート練習に取り組んでいた。

11時間扱いの第3時間目　　平成23年10月11日（火）　第6校時（14:20～15:05）

ねらい （1，2年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。
（ 3年 ）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。
（ 重 複 ）友だちと協力して安全に練習に取り組む。

本時のねらい （1，2年）・パスを受けるために空いている場所に動くことができる。
・バスケットボールの技術や戦術の名称について理解する。
（ 3年 ）・パスを出した後に次のパスを受ける動きをすることができる。
・バスケットボールの技術や戦術等をゲーム中に適切に発揮することが攻防のポイントであることについて理解する。
（ 重 複 ）・チームの練習や話し合いに参加する。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ5分	○ 集合・整列 ○ 本時の説明	・生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。	
なか30分	【学習内容】 パスを受けるために空いている場所に動くこと。 パスを出した後に次のパスを受けるために空いている場所に動くこと。 【学習内容】 バスケットボールの技術や戦術等の名称などについて理解すること。 そしてそれらをゲーム中に適切に発揮することが攻防のポイントであること。 <チーム練習、ドリルゲームでは積極的に「ハンドサイン」を使う> 1 チーム練習2 （3対1パスゲーム） ・オフェンスとディフェンス両方の練習をする。 ・ゆっくりオフェンスの動き方を確認する。 ・パスゲームのポイントを確認する。 2 ミーティング ・ドリルゲーム2の役割分担をする。 3 ドリルゲーム2 （3対1パスゲーム） ・たくさんパスをまわす。 （チーム内相互評価）	・課題となる場面を見せて、チーム練習に向けてイメージを持たせる。パスゲームのポイントを掲示する。 ・ディフェンス、オフェンスのことばの意味をおさえる。（掲示物） ・良いパスやシュート、動きが見られたら積極的に賞賛してより意欲的に取り組めるよう促す。 ・「ハンドサイン」を積極的に発信するよう再度伝える。 ・うまくパスを受けられない生徒がいたらアドバイスカードを活用しながらチーム内で動き方について教え合いが行われるよう促す。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・具体的にどういう動きをするのか見本を示しながら、練習では意識してゆっくりと行うよう支援する。 ・学習資料を活用し、練習内容や方法について具体的に示すことで理解を促す。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・ドリルゲームではボールの捕球を補助しその後のプレイにつなげる。 ・練習に参加できない場合はボールを渡す係など可能な範囲で仲間とかかわらせる。	（1，2年） 【運動の技能】 ③パスを受けるために空いている場所に動くことができる。 【知識・理解】 ①バスケットボールの技術や戦術の名称を言ったり書き出している。 （3年） 【運動の技能】 ③パスを出した後に次のパスを受ける動きをすることができる。 【知識・理解】 ①バスケットボールで用いられる技術や戦術などの名称があり、それらをゲーム中に適切に発揮することが攻防のポイントであることなどを言ったり書き出している。
まとめ10分	○ 学習カードの記入と振り返り ○ 片付け・次回の学習の確認・挨拶	・「話し合いルール」を守ることができたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信できたかたずねる。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・協力して片付けを行うようにする。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・3年生は、導入時に説明した「ディフェンス」「オフェンス」ということばを練習中に使っていた。
・パスのもらい方、動き方について、チーム内で教え合いながら活動していたが、動きをおぼえることに集中するあまり、ハンドサインの表現を忘れている様子が見られた。
・ビデオカメラのバッテリーが2時間分もたなかった。次回の2時間続きの授業では対策が必要である。
・トータルでは時間超過はしなかったが、第2時間目は時間超過していた。第3時間目で帳尻合わせした形となってしまったが、生徒たちは、話し合いの方法やこちらが求めている行動については徐々に理解できてきた様子が見られた。その結果、第3時間目はスムーズに流れていったように思う。

11時間扱いの第4時間目　　平成23年10月13日（木）　第4校時（11:40～12:25）

ねらい （1，2年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。
（ 3年 ）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。
（ 重 複 ）友だちと協力して安全に練習に取り組む。

本時のねらい （1，2年）ゴール前の空いている場所に動いて守備者がいない位置でシュートする。
（ 3年 ）守備者が守りにくいタイミングで、シュートをゴール枠内にコントロールする。
（ 重 複 ）仲間と一緒にチームの練習に参加する。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ10分	○ 準備運動 ○ 集合・整列・挨拶・出席確認 ○ 本時の説明	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・前時の学習カードから「ハンドサイン」を使っていた人やチームワークを高めることばを紹介して肯定的な雰囲気を高める。	
なか25分	【学習内容】 空いている場所に動いてシュートを打つこと。 守備者のタイミングをずらして、枠内にコントロールしたシュートを打つこと。 <ドリルゲーム、チーム練習では積極的に「ハンドサイン」を使う> <練習時の約束行動を確認する> 1 ドリルゲーム1 （30秒シュート） （チーム内相互評価） 2 チーム練習3 （3対1ﾊﾟｽｹﾞｰﾑを発展させて） ・コートを1／4に分けて練習する。 ・ゴール前でディフェンスの後ろ（ブラインド）から空いている空間でパスを受けてシュートする。	・チーム練習では「練習時の約束行動」の内容を確認し掲示する。 ・アドバイスをもらったら、「ありがとう」と応える。 ・失敗を責めたり、笑ったりしない。 ・バックボードの使い方、確実性の高いシュートの方法を掲示物とアドバイスカードで再確認する。（ポイントを掲示） ・実際の動き方を示し、チーム練習に向けイメージをもたせる。前時の掲示物に追加説明を加える。 ・スペシャルエリアを示し、そこへボールを運ぶことがシュートを決めやすくすることだということを意識させる。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・具体的にどういう動きをするのか見本を示しながら練習では意識してゆっくりと行うよう支援する。 <重複障害生徒への手立て> ・重複用別ゴールを準備して距離や高さを調節してシュート練習に参加させる。 ・練習に参加できない場合はボールを渡す係など可能な範囲で仲間とかかわらせる。	（1，2年） 【運動の技能】 ①ゴール前の空いている場所に動いて守備者がいない位置でシュートすることができる。 （3年） 【運動の技能】 ①守備者が守りにくいタイミングで、シュートをゴール枠内にコントロールすることができる。
まとめ10分	○ 学習カードの記入と振り返り ○ 片付け・次回の学習の確認・挨拶	・「練習時の約束行動」を守ることができたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信できたかたずねる。 ・チーム練習3のポイントができていたかアドバイスカードを使ってお互いに教え合いをしながら振り返る。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・協力して片付けを行うようにする。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・ドリルゲーム1では、アドバイスカードにシュートのポイントをチェックする作業に時間を費やしてしまった。
・本時のメイン練習だったチーム練習3に使える時間が少なくなってしまい、私の説明も不十分であった。チーム練習3は、次回もう1度取り組む予定なので、ブラインドから動いてパスを受けるなどポイントをしっかりおさえて説明したい。
・生徒たちの活動からは「教え合い」が行われている様子が伺えた。しかし、カードなどで「教え合い」が行われたことを形に残していくのは難しいと感じた。

11時間扱いの第5時間目　　平成23年10月18日（火）　第5校時（13:25～14:10）			
ねらい（1，2年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。 （ 3年 ）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。 （ 重 複 ）友だちと協力して安全に練習に取り組む。			
本時のねらい　（1，2年）分担した役割を果たすこと。 （ 3年 ）自己の責任を果たすこと。 （ 重 複 ）チームの仲間と一緒に行動する。			
時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ10分	○ 準備運動 ○ 集合・整列・挨拶・出席確認 ○ 本時の説明 ○ きょうだいチームを発表	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・前時の学習カードからアドバイスをしていた人やチームワークを高めることばを紹介して肯定的な雰囲気を高める。	
なか30分	【学習内容】 オフェンスとディフェンスの役割や責任を理解して取り組むこと。 <ドリルゲーム、チーム練習では積極的に「ハンドサイン」を使う> <練習時の約束行動を確認する> 1 ミーティング ・ドリルゲーム3、チーム練習3の役割分担をする。 2 ドリルゲーム3（1分30秒） （ドリブルシュートリレー） ・きょうだいチームが「アドバイスカード」に記入する。 3 チーム練習3 （3対1ﾊﾟｽｹﾞｰﾑを発展させて） ・仲間が重複障害生徒を補助して一緒に練習する。 3対1パスゲーム ↓ 3対2の攻防	・重複障害生徒も取り込んでチーム全体でかかわり合いをもつように支援する。 ・チーム練習では「練習時の約束行動」の内容を確認し掲示する。 ・ドリルゲーム等活動を終えた仲間とタッチする。 ・重複障害生徒に対してはみんなで交代しながら補助をする。 ・見本を見せたり、図で動き方を示して生徒が練習の意図や方法を理解しやすいようにする。 ・良い動きやパスが見られたら積極的に賞賛してより意欲的に取り組めるよう促す。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・フェアなプレーをしたり、分担した役割を果たすことでみんなが楽しく取り組めることを説明し、肯定的な声かけをする。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・重複用別ゴールを準備して距離を調節してシュート練習に参加させる。 ・練習に参加できない場合はボールを渡す係など可能な範囲でかかわりをもたせる。	（1，2年） 【関心・意欲・態度】 ③分担した役割を果たそうとしている。 （3年） 【関心・意欲・態度】 ③自己の責任を果たそうとしている。
まとめ5分	○ 振り返り ○ 次時の学習の確認	・「ハンドサイン」を発信できたかたずねる。 ・次時の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・話し合い活動の前に「話し合いルール」の説明と、タスクゲームの前に「新得点ルール」の説明を加えるのを忘れてしまった。
・本時はやや内容が多く時間が押してしまったが、チーム練習3では前回説明が不十分だったところを確認し、教え合いや助け合いの様子が見られた。

11時間扱いの第6時間目　　平成23年10月18日（火）　第6校時（14:20～15:05）

ねらい （1，2年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。
（ 3年 ）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。
（ 重 複 ）友だちと協力して安全に練習に取り組む。

本時のねらい （1，2年）・作戦などについての話し合いに参加する。
・自己やチームの課題を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を整理する。
（ 3年 ）・作戦などについての話し合いに貢献する。
・自己のチームや相手チームの特徴を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を選ぶ。
（ 重 複 ）・チームの練習や話し合いに参加する。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ5分	○ 集合・整列 ○ 本時の説明	・生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・ミーティングでは話し合いルールの内容を確認しを掲示する。 ・わからないときは、その場で質問する。	
なか30分	【学習内容】 チームの話し合いで、自己やチームの課題や相手チームの特徴を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を選ぶこと。 【学習内容】 チームの課題や作戦について自分の考えを伝えるなどして話し合いに取り組むこと。 <タスクゲームでは積極的に「ハンドサイン」を使う> 1 ミーティング ・タスクゲーム1の役割分担をする。 ・「話し合いルール」を確認する。 2 タスクゲーム1 （ハーフコートゲーム 5－5） ・重複障害生徒はセーフティエリアで参加する。 ・仲間が重複障害生徒の補助をする。 ・きょうだいチームが「ひとことアドバイス」を記入する。	・良い動きやパスが見られたら積極的に賞賛してより意欲的に取り組めるよう促す。 ・スペシャルエリアを示し、そこへボールを運ぶことがシュートを決めやすくすることだということを意識させる。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・バスケットボールの楽しさや喜びについて、興味がもてるように説明する。 ・学習ノートや映像を通じて課題を見付けられるようにする。 ・発問したりアドバイスすることで思考を促す。 <重複障害生徒への手立て> ・タスクゲームではボールの捕球を補助しその後のプレイにつなげる。 ・タスクゲームでは補助と一緒にサイドライン沿い中央付近（セーフティエリア）にいて、パスをリレーする。 ・練習に参加できない場合はボールを渡す係など可能な範囲でかかわりをもたせる。	（1，2年） 【関心・意欲・態度】 ④作戦などについての話し合いに参加している。 【思考・判断】 ②自己やチームの課題を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を整理している。 （3年） 【関心・意欲・態度】 ④作戦などについての話し合いに貢献している。 【思考・判断】 ②自己のチームや相手チームの特徴を見つけ、それに応じた作戦や練習方法を選んでいる。
まとめ10分	○ 整理運動 ○ 学習カードの記入と振り返り ○ 片付け・次回の学習の確認・挨拶	・「話し合いルール」を守ることができたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信できたかたずねる。 ・協力して片付けを行うようにする。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・いかにタスクゲームの内容を効率よく説明するかを考えていたが、図を用いて口頭で説明したあと、実際に生徒たちをコートに入れて動かせたことで理解できた様子だった。
・生徒たちは、タスクゲームの役割分担をする話し合い活動もスムーズになってきた様子が伺える。
・重複障害生徒の補助は、まだ他人任せの生徒が多く一部の生徒しか意識できていない様子が見られる。
・チーム練習でやったことが、タスクゲームの中でなかなかいかされていない。映像で示すなどして生徒に気付かせる必要がある。

11時間扱いの第7時間目　　平成23年10月20日（木）　第4校時（11:40～12:25）

ねらい （1，2年）分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール前の空間でパスをもらう動きを身に付ける。
（ 3年 ）自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール前に空間を作り出すための動きを身に付ける。
（ 重 複 ）友だちと協力して安全に練習に取り組む。

本時のねらい （1，2年）練習や試合の行い方、簡易な試合のルール、審判や運営の仕方について理解する。
（ 3年 ）練習や試合の行い方、ゲームのルール、審判や運営の仕方について理解する。
（ 重 複 ）チームの一員として試合にも応援にも参加する。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ 10分	○ 準備運動 ○ 集合・整列・挨拶・出席確認 ○ 本時の説明	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・前時の様子をVTRで示し課題を明確にする。 ・前時の学習カードから仲間を助けていた人やチームワークを高めることばを紹介して肯定的な雰囲気を高める。	
なか 25分	【学習内容】 練習や試合の行い方、簡易な試合やゲームのルール、審判や運営の仕方があること。 ＜タスクゲームでは積極的に「ハンドサイン」を使う＞ 1 チームディフェンスについて 2 タスクゲーム2の説明 3 ミーティング ・「話し合いルール」を確認する。 ・タスクゲーム2の役割分担をする。 4 タスクゲーム2の実際 ・重複障害生徒はセーフティエリアで参加する。 ・仲間が重複障害生徒の補助をする。 ・きょうだいチームが「ひとことアドバイス」を記入する。 （セーフティエリア・ルール） （スペシャルエリア・ルール） （新得点ルール）	・ミーティングでは話し合いルールの内容を確認し掲示する。 ・仲間の発言を最後まで聞く（見る）。 ・ディフェンスの方法やポジションを決める際のポイントを説明する。 ・セーフティエリア・ルールを説明し、誰に任せるのが適当かを話し合わせる。 ・スペシャルエリアを示し、そこへボールを運ぶことがシュートを決めやすくすることだということを意識させる。 ・新得点ルールを採用してゲームを行う。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・グループでのコミュニケーションが活発になるように支援し、理解が深まるよう促す。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・ゲームでは重複用別ゴールを準備する。 ・ゲームに出ていないときも仲間を応援するよう促す。 ・練習に参加できないときも仲間とタッチしたりして可能な範囲でかかわりをもたせる。	（1，2年） 【知識・理解】 ②練習や試合の行い方、簡易な試合のルール、審判や運営の仕方について、言ったり書き出したりしている。 （3年） 【知識・理解】 ②練習や試合の行い方、ゲームのルール、審判や運営の仕方について、言ったり書き出したりしている。
まとめ 10分	○ 学習カードの記入と振り返り ○ 片付け・次回の学習の確認・挨拶	・「話し合いルール」は守れたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信し、応えることができたかたずねる。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・前時のVTRを見せ、課題意識をもたせたのは良かったと思うが、説明に時間を費やしてしまった。更に例を限定して示すことが必要か。
・欠席の生徒が多く、きょうだいチームから応援にきてもらう人を確認する話し合いに時間がかかってしまった。
・時間が押してしまったために、前時のようにタスクゲームの内容を実際に生徒をコートに入れて説明できず、ルールの周知徹底が不十分だった。
・シュート時など、控えやきょうだいチームからハンドサインが発信されているが、コート上の生徒には十分届いていないので、ディフェンスのポジショニングとあわせて、もう少し周りを見るように伝える。

11時間扱いの第8時間目　　平成23年10月25日（火）　第5校時（13:25～14:10）

ねらい （1，2年）練習やゲームを通して仲間と積極的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（ 3年 ）練習やゲームを通して仲間と自主的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（ 重 複 ）きまりやルールを守って、みんなとゲームを楽しむ。

本時のねらい （1，2年）マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。
（ 3年 ）マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方に操作しやすいパスを送ることができる。
（ 重 複 ）チームの一員として試合にも応援にも参加する。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ10分	○ 準備運動 ○ 集合・整列・挨拶・出席確認 ○ 本時の説明	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・前時の学習カードから仲間を助けていた人やチームワークを高めることばを紹介して肯定的な雰囲気を高める。	
なか25分	【学習内容】 周りを見て、マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方にパスを出すこと。 <タスクゲームでは積極的に「ハンドサイン」を使う> <ゲーム時の約束行動を確認する> 1 タスクゲーム2の説明 2 ミーティング ・「話し合いルール」を確認する。 ・タスクゲーム2の役割分担をする。 3 タスクゲーム2（セーフティエリア）の実際 ・重複障害生徒はセーフティエリアで参加する。 ・仲間が重複障害生徒の補助をする。 ・きょうだいチームが「ひとことアドバイス」を記入する。 4 ミーティング（平ろうルールについて） ・セーフティエリア・ルール ・スペシャルエリア・ルール ・新得点ルール	・練習試合では「ゲーム時の約束行動」の内容を確認し掲示する。 ・チームで円陣を組んでかけ声をかける。 ・始まりと終わりの挨拶では相手選手と握手をする。 ・良いプレイのときは仲間とハイタッチする。 ・きょうだいチームが、ゲーム記録をとるよう伝える。 ・ミーティングでは話し合いルールの内容を確認し掲示する。 ・意見に対して「どうして？」と理由を求める。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・具体的にどういう動きをするのか見本を示しながら、練習では意識してゆっくりと行うよう支援する。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・仲間が補助をして、試合に参加できるように意識させる。 ・必要に応じてゲームでは重複用別ゴールを準備する。 ・試合に出ていないときも仲間を応援するよう促す。	（1，2年） 【運動の技能】 ②マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 （3年） 【運動の技能】 ②マークされていない味方や得点しやすい空間にいる味方に操作しやすいパスを送ることができる。
まとめ10分	○ 学習カードの記入と振り返り ○ 片付け・次回の学習の確認・挨拶	・「話し合いルール」「ゲーム時の約束行動」は守れたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信し、応えることができたかたずねる。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・平ろうルールについての話し合いに時間を十分与えたかったが、やはり少し急ぎ足になってしまった。
・今日も1班の人数が足りなく、4班から応援をもらう形になるので、早めに準備させたが、それでも時間は足りなかった。
・前回と同じタスクゲームをしたことで、ルール理解に頭を使うことが減り、その分応援に力が入ってゲームが盛り上がった。
・ハンドサインはたくさん発信されているが、コート上の仲間にはまだ十分伝わっていない。導入時にゲーム中に周りを見て、ハンドサインを送られていることに気付き、お互いの気持ちが伝わるようにしようと話しをしたが、次回も更に授業の雰囲気を高めていけるように声かけをしていきたい。

11時間扱いの第9時間目　　平成23年10月27日（木）　第4校時（11:40～12:25）

ねらい　（1，2年）練習やゲームを通して仲間と積極的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（　3年　）練習やゲームを通して仲間と自主的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（ 重 複 ）きまりやルールを守って、みんなとゲームを楽しむ。

本時のねらい　（1，2年）ボールを持っている相手をマークすることができる。
（　3年　）ゴール前の空いている場所をカバーして守ることができる。
（ 重 複 ）チームの一員として試合にも応援にも参加する。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ10分	○　準備運動 ○　集合・整列・挨拶・出席確認 ○　本時の説明	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・前時の学習カードから話し合いで1番発言していた人やチームワークを高めることばを紹介して肯定的な雰囲気を高める。	
なか25分	【学習内容】 ディフェンスの連携を良くするための方法をチームで話し合い、ポジションの役割を決めてゲームに取り組むこと。 ＜練習試合では積極的に「ハンドサイン」を使う＞ ＜ゲーム時の約束行動を確認する＞ 1　ミーティング（全体） ・「話し合いルール」を確認する。 ・平ろうルール確認・決定 2　ミーティング ・練習試合の役割分担をする。 3　練習試合 ・重複障害生徒はセーフティエリアで参加する。 ・仲間が重複障害生徒の補助をする。 ・きょうだいチームが「ひとことアドバイス」を記入する。	・ミーティングでは話し合いルールの内容を確認し掲示する。 ・意見に対して「どうして？」と理由を求める。 ・確認した「平ろうルール」は掲示する。 ・練習試合では「ゲーム時の約束行動」の内容を確認し掲示する。 ・チームで円陣を組んでかけ声をかける。 ・始まりと終わりの挨拶では相手選手と握手をする。 ・良いプレイのときは仲間とハイタッチする。 ・きょうだいチームが、ゲーム記録をとるよう伝える。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・具体的にどういう動きをするのか見本を示しながら、練習では意識してゆっくりと行うよう支援する。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・重複ルールを全体に周知し、全員が試合に参加できるように意識させる。 ・必要に応じてゲームでは重複用別ゴールを準備する。 ・試合に出ていないときも仲間を応援するよう促す。	（1，2年） 【運動の技能】 ④ボールをもっている相手をマークすることができる。 （3年） 【運動の技能】 ④ゴール前の空いている場所をカバーして守ることができる。
まとめ10分	○　学習カードの記入と振り返り ○　片付け・次回の学習の確認・挨拶	・「話し合いルール」「ゲーム時の約束行動」は守れたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信し、応えることができたかたずねる。 ・「平ろうルール」が公正なものであったかどうか、振り返りを促す。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・前時に話し合った内容を発表する際、時間短縮のために賛成か反対かだけをわかるようにホワイトボードに書き、その理由については口頭（手話）のみで板書しなかったが、全員に情報をしっかり伝えることを大切にするなら、理由も板書すべきであったと思う。
・相手ボールになってから、自陣への戻りが早くなってきた。攻守の切り替えを早くすることが大切だということが学習カードの記述にも見られる。
・生徒たちはきょうだいチームが試合をしているときも、とてもよく応援していて、授業の雰囲気も高まってきていると思う。次回最後の授業が終わったときにみんなが楽しかったと感じて終えられたらと思う。

11時間扱いの第10時間目　　平成23年11月1日（火）　第5校時（13:25～14:10）

ねらい　（1，2年）練習やゲームを通して仲間と積極的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（　3年　）練習やゲームを通して仲間と自主的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（ 重 複 ）きまりやルールを守って、みんなとゲームを楽しむ。

本時のねらい　（1，2年）仲間と役割分担をする場面で、役割に応じた協力の仕方を見付ける。
（　3年　）作戦などの話し合いの場面で、チームの合意を形成するためのかかわり方を見付ける。
（ 重 複 ）決まりを守って、みんなとゲームを楽しむ。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ10分	○　準備運動 ○　集合・整列・挨拶・出席確認 ○　本時の説明 ○　全体で平ろうルールの確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを説明する。 ・「ハンドサイン」についてや前時の学習カードの記述から良かったものを紹介し掲示することで肯定的な視点を持たせるように支援する。	
なか30分	【学習内容】 仲間と協力する場面で、役割に応じた協力の仕方を見付けるための工夫をすること。 ＜確かめのゲームでは積極的に「ハンドサイン」を使う＞ ＜ゲーム時の約束行動を確認する＞ 1　組合せ発表 2　平ろうカップ開会式 3　ミーティング（作戦タイム） ・試合に向けて役割分担をする。 ・きょうだいチームのふりかえりカードを参考にして作戦を話し合う。 4　確かめのゲーム（チーム対抗戦） ・重複障害生徒はセーフティエリアで参加する。 ・仲間が重複障害生徒の補助をする。 ・きょうだいチームが「ひとことアドバイス」を記入する。	・開会式に先立って、組合せ発表、「平ろうルール」の確認をして、大会の雰囲気を盛り上げる。 ・ミーティングでは話し合いルールの内容を確認し掲示する。 ・自分と違う考えでも間違いと決めつけない。 ・練習試合では「ゲーム時の約束行動」の注意すべき点を確認し掲示する。 ・チームで円陣を組んでかけ声をかける。 ・始まりと終わりの挨拶では相手選手と握手をする。 ・良いプレイのときは仲間とハイタッチする。 ・きょうだいチームが、ゲーム記録をとるよう伝える。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・発問したりアドバイスすることで思考を促す。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・ゲームではボールの捕球を補助しその後のプレイにつなげる。 ・試合に出ていないときも仲間を応援するよう促す。	（1，2年） 【思考・判断】 ③仲間と役割分担をする場面で、役割に応じた協力の仕方を見付けている。 （3年） 【思考・判断】 ③作戦などの話し合いの場面で、チームの合意を形成するためのかかわり方を見付けている。
まとめ5分	○　次時の学習の確認	・「ゲーム時の約束行動」は守れたかをたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信し、応えることができたかたずねる。 ・次回の学習の確認をすることで、意欲をもって終わるようにする。	

〈授業者による振り返り〉
・「平ろうカップ」の閉会式で表彰する予定だった生徒が途中早退する連絡があったので、個人賞については、授業の最初にみんなの前で表彰することにした。本人は照れくさそうにしていたが、仲間から拍手をもらえてよかったと思う。
・ゲーム前の円陣を組む際、重複障害生徒のところへ仲間があつまっていく様子が各班に見られ、チーム内での助け合い、かかわり合いが高まっていったことが伺えた。
・試合観戦のときも、きょうだいチームをよく応援していた。

11時間扱いの第11時間目　　平成23年11月1日（火）　第6校時（14:20～15:05）

ねらい （1，2年）練習やゲームを通して仲間と積極的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（ 3年 ）練習やゲームを通して仲間と自主的にかかわりながらコミュニケーションを深め、バスケットボールを楽しむ。
（ 重 複 ）きまりやルールを守って、みんなとゲームを楽しむ。

本時のねらい（1，2年）・積極的に取り組み、チームで勝敗を競う楽しさや喜びに触れる。
・仲間の学習を援助したり、フェアなプレイを守ろうとする。
（ 3年 ）・自主的に取り組み、チームで勝敗を競う楽しさや喜びに触れる。
・仲間と教え合いながら、ゲームではフェアなプレイを大切にしようとする。
（ 重 複 ）・決まりを守って、みんなとゲームを楽しむ。

時間	学習内容と活動	教師の指導・支援	具体の評価規準
はじめ2分	○ 集合・整列・出席確認 ○ 本時の学習の確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する。 ・学習のねらいや授業の進め方、安全への配慮などを確認する。	
なか33分	【学習内容】 バスケットボールの勝敗を競う楽しさや喜びに触れるように取り組むこと。 【学習内容】 仲間の学習を援助したり、教え合いながら、ゲームではフェアなプレイを守ったり大切にすること。 ＜確かめのゲームでは積極的に「ハンドサイン」を使う＞ ＜ゲーム時の約束行動を確認する＞ 1 ミーティング（作戦タイム） ・試合に向けて役割分担をする。 ・きょうだいチームで集まり、お互いに1試合目を振り返りアドバイスをする。 2 確かめのゲーム（チーム対抗戦） ・重複障害生徒はセーフティエリアで参加する。 ・仲間が重複障害生徒の補助をする。 ・きょうだいチームが「ひとことアドバイス」を記入する。 3 平ろうカップ閉会式 ・表彰式 ・講評	・ミーティングでは話し合いルールの内容を確認し掲示する。 ・自分と違う考えでも間違いと決めつけない。 ・練習試合では「ゲーム時の約束行動」の注意すべき点を確認し掲示する。 ・チームで円陣を組んでかけ声をかける。 ・始まりと終わりの挨拶では相手選手と握手をする。 ・良いプレイのときは仲間とハイタッチする。 ・きょうだいチームが、ゲーム記録をとるよう伝える。 〈C、C△の生徒への手立て〉 ・バスケットボールの楽しさや喜びについて、興味がもてるように説明する。 ・フェアなプレイをしたり、分担した役割を果たすことでみんなが楽しく取り組めることを説明し、肯定的な声かけをする。 〈重複障害生徒への手立て〉 ・ゲームではボールの捕球を補助しその後のプレイにつなげる。 ・試合に出ていないときも仲間を応援するよう促す。	（1，2年） 【関心・意欲・態度】 ①積極的に取り組み、チームで勝敗を競う楽しさや喜びに触れようとしている。 ②仲間の学習を援助したり、フェアなプレイを守ろうとしている。 （3年） 【関心・意欲・態度】 ①自主的に取り組み、チームで勝敗を競う楽しさや喜びに触れようとしている。 ②仲間と教え合いながら、ゲームではフェアなプレイを大切にしようとしている。
まとめ10分	○ 学習カードの記入と振り返り ○ 片付け・挨拶	・「話し合いルール」「ゲーム時の約束行動」を守ることができたかたずねる。 ・「ハンドサイン」を発信し、応えることができたかたずねる。 ・学習カードの記入の仕方がわからない生徒には個別に支援する。 ・協力して片付けを行うよう説明する。 ・単元を通しての感想を数人にたずねる。	

〈授業者による振り返り〉
・今までの傾向から全体的に急いでしまい、もう少し時間に余裕を持って進められれば良かった。生徒たちが話し合い等の活動に慣れて、時間的なロスが少なくなっていた。そのため、最後は時間が余る形となった。
・最後の授業であったが、4班のメンバーがそろわず、チームとしてベストの力を発揮できずに残念だった。
・生徒たちも、パスの種類やパスを受ける動きなど、パス回しに関することや、ディフェンスへの切り替えといったことを意識してゲームに取り組んでいたことがチーム用学習カードから読み取れた。
・セーフティエリアの重複障害生徒も仲間を意識してパスを出し、仲間とゲームを楽しんでいた。補助の生徒も集中して取り組み、助け合う活動ができた。
・一人ひとりが集中して取り組み、仲間とともにチームとしてバスケットボールを楽しむことができたと思う。

５　検証授業の結果と考察

研究主題に迫るため、検証授業から得られたデータを基に、検証の視点に沿って分析し、コミュニケーション・スキルを高めることができたかについて考察していくことにした。**表３－１**（P24、参照）

なお、分析、考察を進める上で、文中に使用した標本数については、**表３－３**の通りである。また、文中の生徒の記述内容については、意味を読み取りやすくするため加筆修正した表現で掲載した。

表３－３　文中に使用した標本数

時間	１時間目	2、3 時間目	４時間目	5、6 時間目	７時間目	８時間目	９時間目	10、11 時間目
人数	26 名	25 名	29 名	28 名	23 名	25 名	25 名	27 名
予備アンケート 28 名　　事前アンケート 29 名　　事後アンケート 29 名								

（１）仲間と肯定的にかかわり合うための手立ては有効であったか。

ア　仲間と協力して助け合うことができたか。

（ア）個人用学習カードによる分析

図３－４は、「あなたは、仲間をたすけることができましたか」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。

５、６時間目以降上昇し、２．５点を上回った。

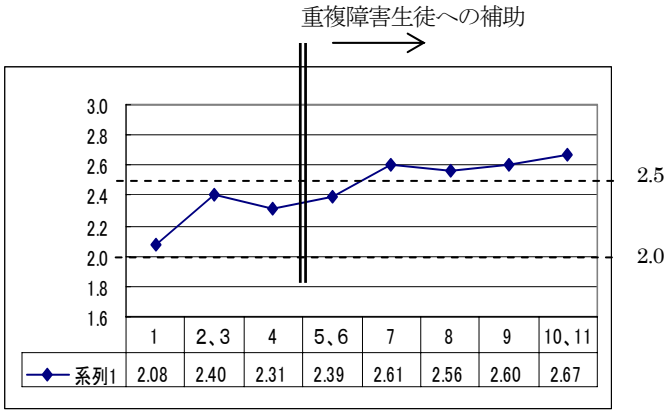


図３－４「あなたは、仲間を助けることができましたか」
（個人用学習カード）

（イ）チーム用学習カードの記述内容による分析

表３－４は、「平ろうルール」を決めていく際、「セーフティエリア・ルールは必要か」について、各班での意見及びその理由を抜粋したものである。

表３－４　「平ろうルールをつくろう」の各班の記述内容（チーム用学習カード）

「セーフティエリア・ルールは必要か」についてのコメント		
班	意見	理由
１班	（ 必要　必要ない ）	（H君が）パスするときあぶないから。 安全にパスできるため。
２班	（ 必要　必要ない ）	Mさんのため。セーフティエリアがなかったらMさんがプレーできないから！
３班	（ 必要　必要ない ）	重複生徒、バスケが苦手な人がいるから、あった方がボールにさわれるから。
４班	（ 必要　必要ない ）	平等に参加できるから。

（ウ）個人用学習カード及び事後アンケートの記述内容による分析

表３－５は、毎時間後個人用学習カード「今日の反省・感想」及び事後アンケートの記述の中から、仲間との助け合いについて書かれたコメントを抜粋したものである。

表３－５　仲間との助け合いに関する生徒の記述内容

	個人用学習カード、事後アンケートのコメントの抜粋
1	仲間のみんなと励まし合いながらシュート、パスゲームのルールを理解できて良かったと思います。（２、３時間目）
2	私はH君に通訳してあげたり励ましたりしました。（７時間目）
3	Ａを助けました。Ａがボールをもって、一緒に「えい！」と投げました。（７時間目）
4	H君をサポートすることができた。（９時間目）
5	きちんとしたチームワークがわかった。もっともり上げるルールがあれば、いいなと思います。（事後）
6	小学部のころより、ルールを理解して楽しめた。苦手の人もセーフティエリアなどによって、ボールに触れる機会があって良かったと思う。（事後）

（１）ア「仲間と協力して助け合うことができたか」の考察

これまでの授業では、重複障害生徒の補助は基本的に教員が行っており、本単元の前半も同様の形で進めた。５時間目からは、補助を教員に頼るのではなく、できるだけ生徒が補助していくようにはたらきかけたため、授業では、生徒が重複障害生徒に話の内容を通訳したり、集合場所へ誘導したり、チーム練習時の補助をする様子が多く見られるようになったと考える。

形成的授業評価でも「仲間を助けることができた」と感じた生徒は、５、６時間目以降数値が伸び、右肩上がりに高まった。２．５点を上回り、授業成果を上げることができたと考える。**（図３－４）**

「平ろうルール」の「セーフティエリア・ルール」を決めていく際、各班の「理由」を見ると、重複障害生徒を含め、仲間の一人ひとりがバスケットボールを楽しみながら一緒に参加できるようにするためには必要か否かという考え方で判断しているのが表れている。**（表３－４）**

生徒の記述には、お互いに励ましたり、補助したり、仲間と助け合って取り組むことを意識していることが表れている。**（表３－５）**

以上のことから、重複障害生徒への補助、仲間の一人ひとりが楽しめるルール作りなどをすることによって、重複障害生徒を含め、仲間と協力して助け合う活動ができたと考える。

イ　仲間にアドバイスをするなど教え合うことができたか。

（ア）事前・事後アンケートの記述内容による分析

図３－５は、「ルールや練習方法などを教え合うことができる」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。

「はい」と答えた生徒は５割を超えた。

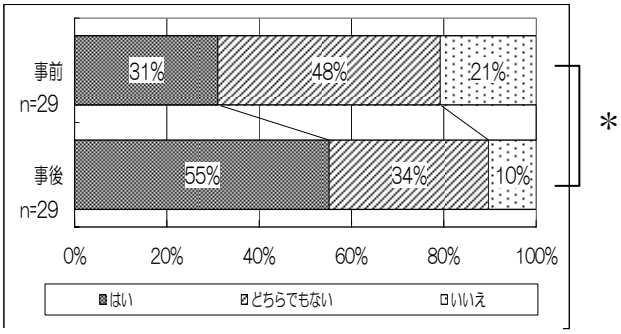


図３－５「ルールや練習方法などを教え合うことができる」（事前・事後アンケート）

（イ）チーム用学習カードの記述内容による分析

表３－６は、きょうだいチームからの「ひとことアドバイス」の記述が、次の時間の活動にいかされた例を抜粋したものである。

表３－６　仲間との教え合いに関する生徒の記述内容（チーム用学習カード）

きょうだいチームからのアドバイス 「改善するともっと良くなるところ」	チーム用学習カード 「チームのねらい」	「チームで良かったところ」
パスするとき、近くにいた方がいいと思う。（５、６時間目）	パスの仕方を工夫する。	パスをたくさん使うことができた。（７時間目）
ディフェンスが固まりすぎだから広がった方がいい。（８時間目）	いいプレーができるように頑張る！	前回より守りが良くなった。攻めも。（９時間目）
ディフェンスはちょっと広がった方がいい。（８時間目）	ハンドサイン、ハイタッチなどをする。	ディフェンス、オフェンスのとき広がれた。（９時間目）

（ウ）個人用学習カード及び事後アンケートの記述内容による分析

表３－７は、個人用学習カード「今日の反省・感想」及び事後アンケートの記述の中から、仲間との教え合いについて書かれたコメントを抜粋したものである。

表３－７　仲間との教え合いに関する生徒の記述内容

	個人用学習カード、事後アンケートのコメントの抜粋
1	今日は、いろいろな先輩から教えてもらって楽しかった。（２、３時間目）
2	わからないところは、教えてあげたりすることができました。（２、３時間目）
3	３対１パスゲームは初めてでしたが、先輩が教えてくれて、なるほどと思いました。（２、３時間目）
4	先輩がシュートやパスなどを教えてくれたので、なるほどと思いました。（８時間目）
5	初めてのときは、どうすればみんなで試合に勝てるか分からなかったけど、練習をやってみたら、みんな上手くなって良かったです。（事後）
6	試合のとき、別のチームのやり方が違っているとき、教えてあげました。（事後）
7	Ｋさんが少し教えてくれました。（事後）
8	私は、最初は苦手だったけど、先輩が教えてくれた事を練習したら出来て、楽しく盛り上がりました。（事後）

表３－８は、視覚的資料としてビデオ映像を用いて課題を提示し、その授業後に書かれた個人用学習カードのコメントを抜粋したものである。

表３－８　ビデオ映像で課題を確認した授業後の記述内容（個人用学習カード）

時間	映像の内容	個人用学習カードのコメントの抜粋
2	協力し合う態度	仲間の意見を集めたいと思います。
		みんなと一緒に協力した。
		みんなで教え合えたらいいなあと思います。
7	ディフェンスのブラインドから出る動き	試合のとき、少し動きができたと思います。
		相手のかげにいないことが少しできた。
		試合をやってもまだわからないところがあります。
		難しいと思いました。
8	ゲーム時のポジショニング	チームのパスの流れが良かった。
		ゲームは勝ったが、バランスは少し悪い。
		ゲーム中、パスの前、準備ができました。

（１）イ「仲間にアドバイスをするなど教え合うことができたか」の考察

事前・事後アンケートの結果について、「ルールや練習方法などを教え合うことができる」（**図３－５**）では、５％水準で有意差が見られた。このことから授業中、仲間同士協力して教え合いが行われていたと考える。

本単元の前半では、主にチーム内で教え合う活動が深まるように、「アドバイスカード」を使って相互評価に取り組ませた。また５時間目からはきょうだいチームを作り、タスクゲームではお互いのゲームの様子を観察し、「ひとことアドバイス」を記入して教え合い活動が深まるように取り組ませた。

相互評価させるにあたり、シュート練習やパスゲームの練習時に、お互いにアドバイスができるよう、技能のポイントを班ごとに見えやすい場所へ掲示した。アドバイスする点を図とともに明確にすることで、コミュニケーション手段として主に聴覚（音声）を頼りにしている生徒にも、手話を頼りにしている生徒にも、そして重複障害生徒にも見える形で長く情報を保障することができた。生徒たちは授業中に何度も技能のポイントを確認しながら教え合っており、事後アンケートの「バスケットボールのやり方が紙に書いて貼ってあって分かりやすいです」という記述にも、視覚的資料が有効であったことが表れている。

また、視覚的資料として、前時の様子をビデオで示し、改善していきたい点に気付かせるよう工夫した。生徒たちは、自分や仲間の様子が映っている映像を、関心を持って見ていた。お互いの課題に気付き、その視点を持ってきょうだいチームの様子を観察できていたことが「ひとことアドバイス」の記述に表れている。また、「ひとことアドバイス」を受けて、次の時間では、そのアドバイスを参考にしながらチームとして取り組んでおり、きょうだいチームで教え合う活動ができていたと考える。（**表３－６**）更に、自己や自分のチームについても、**表３－８**の記述から、示された課題の視点を持って取り組んでいたと考える。

その他、学習カードや事後アンケートの記述にも生徒同士の肯定的な教え合いが行われていたことが表れている。（**表３－７**）

以上のことから、視覚的資料を有効に活用しながら、チーム内の相互評価やきょうだいチームを作ってお互いにアドバイスすることで、仲間と教え合う活動ができたと考える。

ウ　課題解決に向けて仲間と話し合うことができたか。

（ア）個人用学習カードの記述内容による分析

図３－６は、「あなたのチームは、仲間の意見を聞く（見る）ことができましたか」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。１時間目から２．５点を上回った。

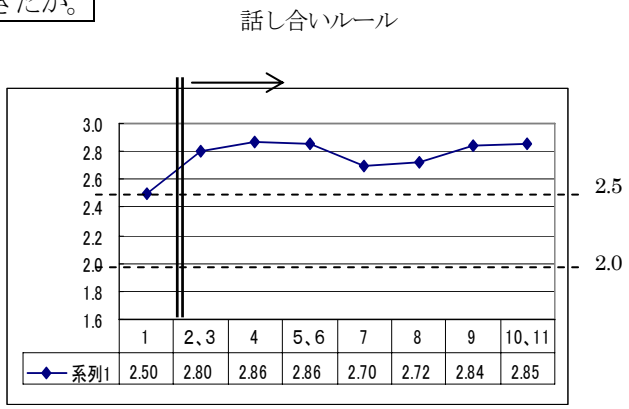


図３－６「あなたのチームは、仲間の意見を聞く（見る）ことができましたか」（個人用学習カード）

図３－７は、「あなたのチームは、課題を解決するために積極的に意見を出し合うことができましたか」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。10、11 時間目に２．５点を上回った。

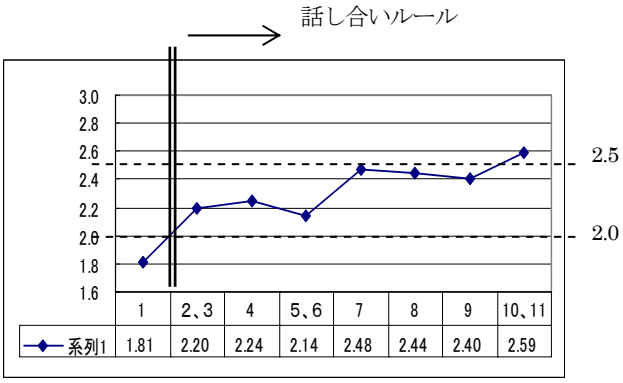


図３－７「あなたのチームは、課題を解決するために積極的に意見を出し合うことができましたか」（個人用学習カード）

表３－９は、個人用学習カード「今日の反省・感想」の記述の中から、仲間との話し合いについて書かれたコメントを抜粋したものである。

表３－９　仲間との話し合いに関する生徒の記述内容（個人用学習カード）

	個人用学習カードのコメントの抜粋
1	先週よりちょっとだけど、意見が言えるようになりました。（２、３時間目）
2	みんなで楽しくプレイし、意見を出し合うことができてよかった。（２、３時間目）
3	キャプテンが休みだったので、かわりにやりました。きちんとみんな話し合いができてよかったです。（７時間目）
4	５時間目（10 時間目）の試合は、悪い面がたくさんあったので、次の試合の前にみんなでたくさん作戦を話し合って逆転することができてよかった！（10、11 時間目）

（イ）事前・事後アンケートによる分析

図３－８は、「グループで作戦をたててゲームや競争をすることができる」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。「はい」と答えた生徒は６割を超えた。

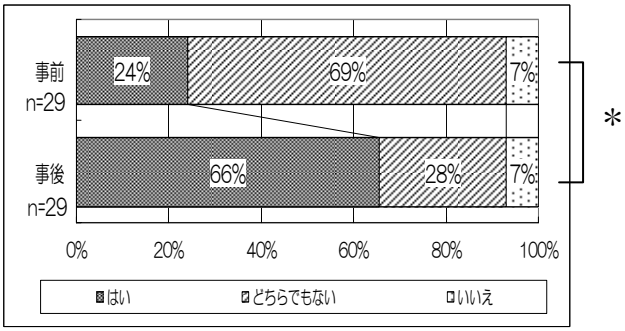


図３－８「グループで作戦をたててゲームや競争をすることができる」（事前　・事後アンケート）

図３－９は、「グループやチームで話し合うときは、自分から進んで意見を言うことができる」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。事後アンケートで「はい」と答えた生徒は５割を超えた。

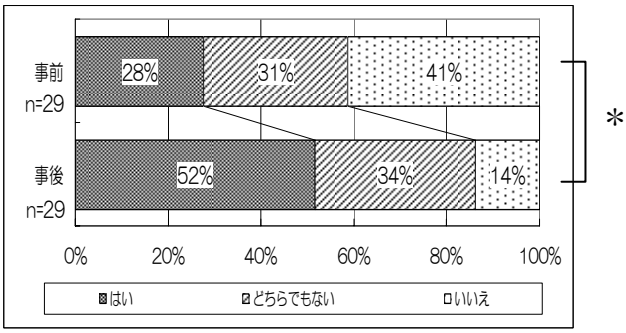


図３－９「グループやチームで話し合うときは、自分から進んで意見を言うことができる」（事前・事後アンケート）

（１）ウ「課題解決に向けて仲間と話し合うことができましたか」の考察

主題設定の理由で述べたように、今まで話し合い活動に十分取り組んでこなかったため、今回の検証授業では、毎時話し合い活動を組み込んでいった。その話し合い活動が肯定的な雰囲気の中で行われるように、「話し合いのルール」を取り入れ、５回に分けて６項目提示していった。否定的な行動を禁じ、１年生や普段なかなか意見を言えない生徒も、積極的に発言や質問ができる環境を整えることを目的とした。

映像から、馬蹄形に広がって話し合いを進める隊形が、夢中になるにつれ車座になって顔を突き合わせて話し合っている場面など､生徒同士の話し合いが活発に行われている様子が見られた。

図３－６の「仲間の意見を聞く（見る）ことができましたか」については、１時間目から高い数値を示した。これは、ろう学校の特徴の１つで、聴覚障害者にとっては、見ていないことが、すなわち情報が伝わっていないことになる。（どれだけ理解できたかは別として）そのため幼少の頃から「話者を見る」という態度を身に付けるよう指導されてきており、それが表れた結果と考える。

一方、「積極的に意見を出し合うことができましたか」（**図３－７**）の結果が示すように、語彙の乏しさから、意志を自分のことばで表現することが課題であるのも、ろう学校の特徴である。しかし、毎時、チーム内で作戦や戦術などを話し合う活動を続けた結果、10、11 時間目には２．５点を上回ることができたと考える。

図３－６で、７時間目に数値が落ちているのは、公式大会で各班の主力となる生徒が５名抜けたため、それぞれが意見を出し合えても、仲間の意見を聞いたり（注視したり）まとめたりという話し合い活動がスムーズに行われなかったためと考える。

事前・事後アンケートの結果（**図３－８、図３－９**）については、５％水準で有意差が見られた。「グループで作戦をたててゲームや競争をすることができる」、「グループやチームで話し合うときは、自分から進んで意見を言うことができる」で「はい」と回答した生徒が大幅に増え、チームの作戦や戦術を話し合う活動ができたと考える。

以上のことから、話し合いの場面で、「話し合いのルール」を提示し、積極的に発言したり、質問したりしやすい環境を整えることで、チームの作戦や戦術といった課題解決に向けて仲間と話し合うことができたと考える。

エ　仲間の良いところを見付け認め合うことができたか。

（ア）個人用学習カードの記述内容による分析

図３－10 は、「あなたは、仲間をほめたり、励ましたりしましたか」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。単元後半は、８時間目を除いて２．５点を上回った。

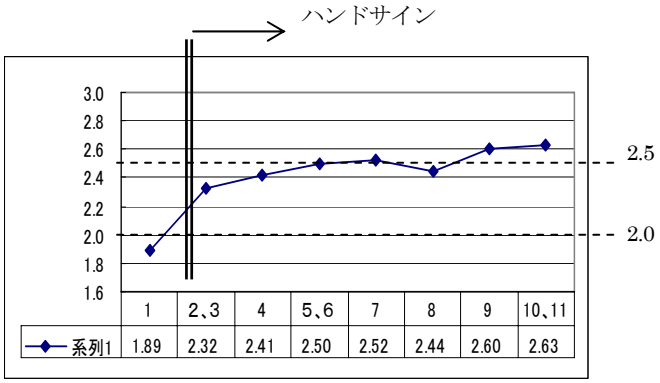


図３－10「あなたは、仲間をほめたり、励ましたりしましたか」（個人用学習カード）

図３－11 は、「あなたは、仲間にほめられたり、励まされたりしましたか」について、３段階で記入したものを得点化し、示したものである。全体的に右肩上がりではあるが、２．５点には届かなかった。

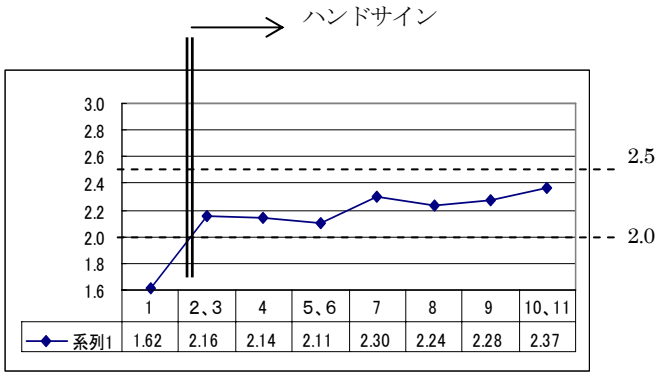


図３－11「あなたは、仲間にほめられたり、励まされたりしましたか」（個人用学習カード）

表３－10 は、個人用学習カード「今日の反省・感想」の記述の中から、仲間との認め合いについて書かれたコメントを抜粋したものである。

表３－10　仲間との認め合いに関する生徒の記述内容（個人用学習カード）

	個人用学習カードのコメントの抜粋
1	ハンドサインはとてもおもしろかったです。（２、３時間目）
2	この前はハンドサインを出すのが少なかったが、今回はたくさんハンドサインを出せた。（４時間目）
3	今回はきちんとハンドサインを出して良かったです。（４時間目）
4	ぼくもハンドサインをいっぱいやったのでよかったです。（４時間目）
5	ハンドサインをたくさん使うことができた。「ありがとう」ときちんと言えたり、相手も「ありがとう」と言ってくれてきもちよかった。（４時間目）
6	ほめたり、はげましたりハンドサインを使えるようになって良かったです。（４時間目）
7	Ｍさんとたくさんタッチできて良かったです。（５、６時間目）
8	積極的にハンドサインを出すことが出来ました。（笑顔を意識して）（８時間目）
9	試合が始まる前に円陣を組んだのがよかった。（９時間目）
10	みんなの考え方が通じることができた。（10、11 時間目）
11	勝敗は圧倒的だったけど、最後まで諦めなかったこのメンバーに感謝!!（10、11 時間目）
12	最後にきちんとチームをまとめることができた。きちんとハンドサインを出すことができた。（10、11 時間目）

（イ）事後アンケートの記述内容による分析

表３－11 は、事後アンケート「バスケットボールの授業をやってみてどうでしたか」の記述の中から、仲間との認め合いについて書かれたコメントを抜粋したものである。

表３－11　仲間との認め合いに関する生徒の記述内容（事後アンケート）

	事後アンケートのコメントの抜粋
1	平ろうルールやハンドサインなど色々なことをやってみて、セーフティエリアも付けて試合をしたので、重複生徒やバスケが苦手の人でもボールにさわる機会があってよかった。
2	応援でハンドサインをたくさん使った。
3	はじめの授業のときはぜんぜんハンドサインを使わなかったけど、２週後にはたくさん使っていたので良かった。平ろうルールはとてもいいと思います。
4	バスケは試合を応援しながら見てコツを学ぶだけでなく、仲間との関わりも学べるスポーツだと思います。
5	チームの心がひとつにまとまってバスケをやれて良かったです。
6	ハンドサインを使っていい気持ちになれたと思います。平ろうルールはやりやすくて面白かったです。試合も盛り上げることができて良かったです。
7	ハンドサインを使ってよかったです。理由は、運動の授業ではほとんどシーンとしていたが、今回のバスケットボールではハンドサインを使って楽しかったから。

（１）エ「仲間の良いところを見付け認め合うことができたか」の考察

第２時間目に生徒同士の「認め合い」が深まるよう、班ごとにハンドサインを決めさせた。そして、そのハンドサインを練習やゲームの場面で積極的に使うようはたらきかけたため、**図３－10、図３－11** ともに２時間目から数値が上昇したと考える。

図３－10 の、「あなたは、仲間をほめたり、励ましたりしましたか」については、単元の後半の５、６時間目以降では、ほとんどが目標である２．５点を上回った。これは、きょうだいチームを決めたことで、自分のチームだけでなく、きょうだいチームに対してもハンドサインや声援を送ることが増えたためと考える。８時間目に若干数値が落ち込んでいるのは、次時に発表する「平ろうルール」の話し合い活動に時間を割いたためと考える。

図３－11 は、**図３－10** の数値に比べ、全体的に低い数値を示している。これは、仲間から賞賛や励ましの「ハンドサイン」が送られているのだが、それを見逃して気付いていないためと考える。音声ならば、見ていなくても相手に届くが、ろう学校ではそれができない。これもろう学校ならではの特徴である。目標の２．５点には届かなかったものの２時間目以降、右肩上がりの結果を示し、概ね授業成果が上がったと考える。

表３－10、表３－11 の記述にも、生徒たちが積極的にハンドサインを使って自分の意志を伝えたり、仲間とタッチしたりしてお互いの良さを認め合っているのが表れている。

以上のことから、肯定的なかかわり合いが深まるように、仲間のプレイをほめたり励ましたりする意志をハンドサインという簡単なサインで示すことによって、手話中心か口話中心かというコミュニケーション手段の違いに関わらず、お互いのプレイに集中し、良いところを見付け認め合うことが概ねできたと考える。また、映像から、個人差はあるものの、重複障害生徒にとっても意志表示の手段としてハンドサインは有効であったと考える。

（１）「仲間と肯定的にかかわり合うための手立ては有効であったか」についてのまとめ

以上のように分析した結果、次のことが明らかになったと考える。

ア　仲間と協力して助け合うことができた。

イ　仲間にアドバイスをするなど教え合うことができた。

ウ　課題解決に向けて仲間と話し合うことができた。

エ　仲間の良いところを見付け認め合うことができた。

よってこの４つの分析の視点から、肯定的な雰囲気の高まりに伴い、仲間と肯定的にかかわり合うための手立ては有効であったと考える。

（２）コミュニケーション・スキルを高めることができたか

ア　コミュニケーション・スキル尺度による分析

図３－12－１、２は、生徒一人ひとりについて学級担任及び体育担当教諭が３名で評価したコミュニケーション・スキル尺度の粗点を換算表（P21、22 参照）にて換算した評価点の結果である。評価点の一般平均は 10 である。

図３－12－１は、事前評価の結果をまとめたもので、一般平均を下回る結果を示した。

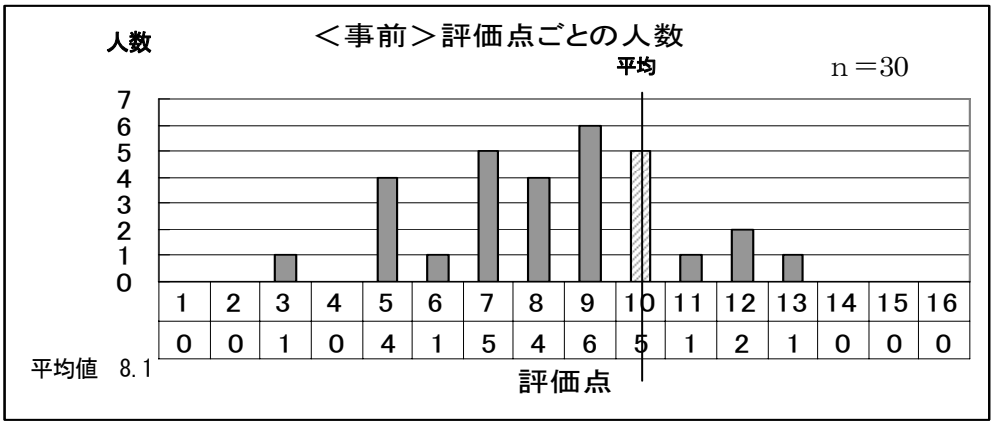


図３－12－１　コミュニケーション・スキル評価点ごとの人数＜事前＞

図３－12－２は、事後評価の結果をまとめたもので、一般平均に達する結果を示した。

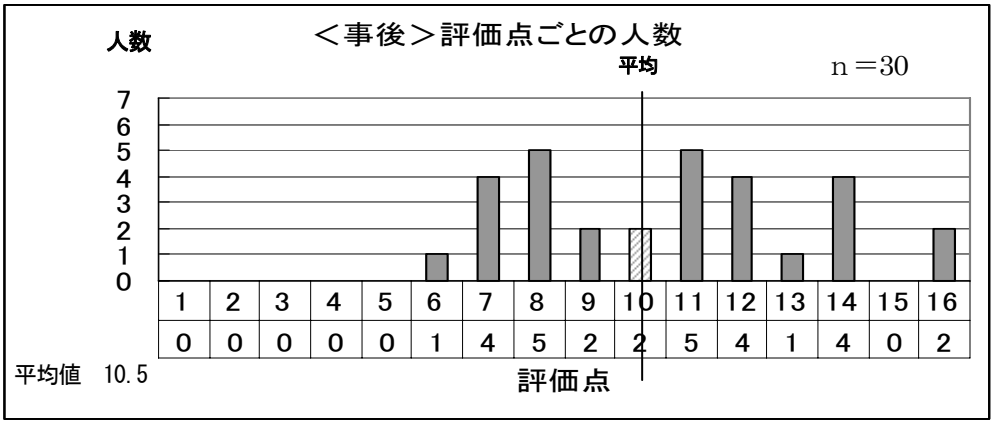


図３－12－２　コミュニケーション・スキル評価点ごとの人数＜事後＞

イ　事前・事後アンケートによる分析

図３－13 は、「他の人が運動しているとき、応援することができる」について、３段階で記入したものを得点化し示したものである。「はい」と答えた生徒は８割を超えた。

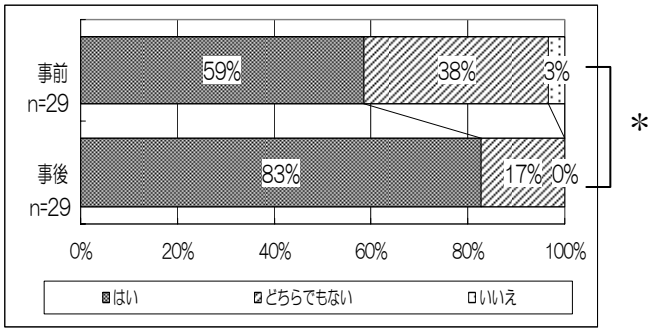


図３－13「他の人が運動しているとき、応援することができる」　（事前・事後アンケート）

ウ　映像による分析

ゲーム中のコート内における生徒のコミュニケーション・スキルの高まりとその様子をコート外で応援する生徒のコミュニケーション・スキルの高まりを、**表２－７**（P22、参照）の指標を基に肯定的な人間関係行動と肯定的な情意行動に分けて、映像の中で表出されたものをカウントした。

図３－14 は、１時間目「ためしのゲーム」、６時間目「タスクゲーム」、11 時間目「確かめのゲーム」における、ゲーム中（コート内）に表現された肯定的な人間関係行動と肯定的な情意行動の回数の推移を表したグラフである。授業が進むにつれ高まっていった。

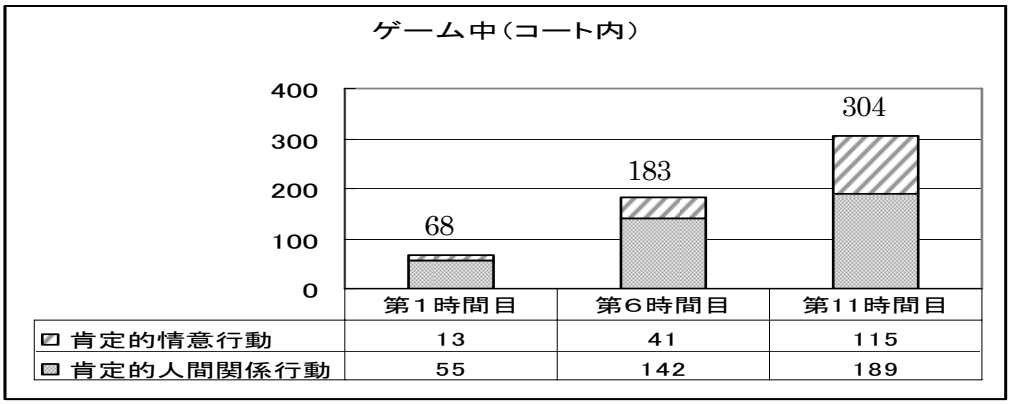


図３－14　ゲーム中（コート内）における生徒間の肯定的なかかわり合いの数

図３－15 は、１時間目「ためしのゲーム」、６時間目「タスクゲーム」、11 時間目「確かめのゲーム」における、きょうだいチームや控え生徒による応援（コート外）で表現された肯定的な人間関係行動と肯定的な情意行動の回数の推移を表したグラフである。こちらも授業が進むにつれ高まっていった。

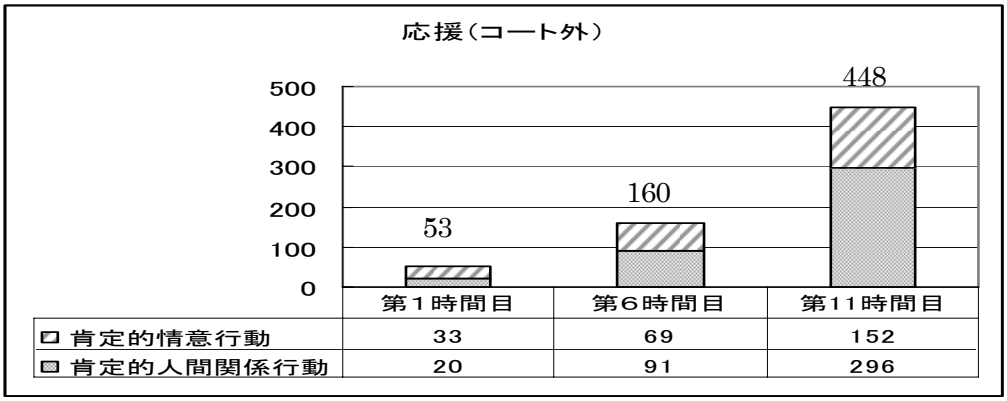


図３－15　応援（コート外）における生徒間の肯定的なかかわり合いの数

表３－12 は、事後アンケート「バスケットボールの授業をやってみてどうでしたか」の記述の中から、仲間とのかかわり合い全般について書かれたコメントを抜粋したものである。

表３－12　仲間とのかかわり合い全般に関する生徒の記述内容（事後アンケート）

	事後アンケートのコメントの抜粋
1	ハンドサインを使うことはいい気持ちになれたと思います。平ろうルールはやりやすくて面白かったです。最初は全く分からなかったけれど、だんだんわかるようになって良かったです。試合も盛り上がることができて良かったです。
2	最初はハンドサインを使わなくて静かな雰囲気でしたが、仲間とチーム力を深めてハンドサインをたくさん使ったり、作戦を考えたりすることができた。３班（きょうだいチーム）のいいところや直した方がいいところを見付けることができた。楽しくバスケットボールができてよかった。
3	バスケットボールをやって、コミュニケーションを取り合ってよかったです。またバスケをやりたいです。
4	自分のチームの心がひとつにまとまってバスケをやれてよかった。

（２）「コミュニケーション・スキルを高めることができたか」の考察

コミュニケーション・スキル尺度を基に分析した結果、検証授業前の時点において、ろう学校の生徒のコミュニケーション・スキルは、一般平均を下回り、「コミュニケーション・スキルが十分に育っていない」という結果が出た。（**図３－12－１**）

一方、事後アンケートの結果（**図３－12－２**）では、一般平均を上回る生徒が増え、全体的にコミュニケーション・スキルが高まった。生徒同士のさまざまなかかわり合いを通して、コミュニケーション・スキルが高まっていったと考える。

図３－13 では、「はい」と答えた生徒は８割を超え、「他の人が運動しているとき、応援することができる」について、５％水準で有意差が見られた。ゲーム中、賞賛したり励ましたり、仲間を応援するという形で、きょうだいチームを中心に肯定的なかかわり合いができたと考える。

映像からは、**表２－７**（P22、参照）の指標を基に、ゲーム中と応援の場面について、「肯定的な人間関係行動」と「肯定的な情意行動」をカウントした。生徒同士のかかわり合いが深まることで、授業における肯定的な雰囲気が高まり、授業が進むにつれてコミュニケーション・スキルが高まっていったと考える。（**図３－14、図３－15**）

また、**表３－12** の記述にもかかわり合いが深まっていったことが表れている。

そして、**表２－７**の話し合いの学習場面についてもP56（１）のウで考察したように高まりが見られた。（**図３－６、図３－７、図３－８、図３－９**）

以上のことから、話し合いの場面やゲーム中のパフォーマンスに対して、相手のことを配慮しながら自分の意志を表現する機会が増え、コミュニケーション・スキルが高まったと考える。

（２）「コミュニケーション・スキルを高めることができたか」についてのまとめ

以上のように分析した結果、

コミュニケーション・スキルを高めることができたと考える。

６　指導の工夫とその効果及び課題

（１）重複障害生徒への補助

ア　個人差への配慮

生徒Ａ・Ｂは、学習内容の理解が不十分で集中力も持続しないため、原則としてすべての場面で補助に付いた。

生徒Ｃについては、視野狭窄があり、視力が悪いので、危険を回避するために原則としてすべての場面で補助に付いた。

生徒Ｄについては、場面場面で本人の意志を確認しながら、仲間と同じ内容で取り組むか補助を付けて取り組むかを決めるようにした。結果的にはすべての場面で仲間と協力し合いながら補助は付かずに取り組んだ。

生徒Ａ・Ｂ・Ｃについては、５時間目以降できるだけ生徒同士が補助していくようにはたらきかけた。その結果生徒同士助け合う場面が増えていったが、一部の生徒に負担がかかっているケースが見られた。「チームみんなで助け合うように」と声かけをしたが、十分改善されたとは言えない状況であった。もちろん補助についている教員も生徒にすべて任せるのではなく、近くで見守る形をとった。

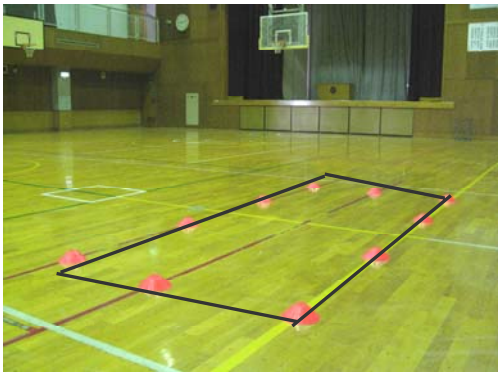
イ　練習やゲームでの特別ルール

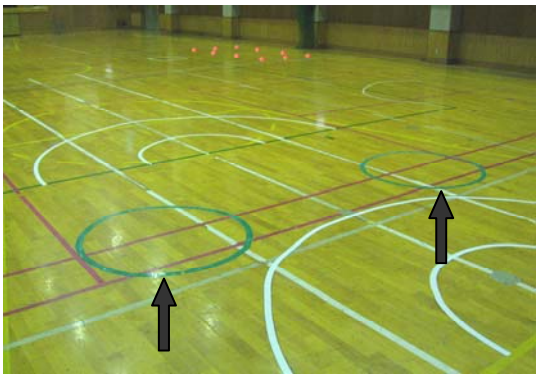
第１時間目の「ためしのゲーム」から、「トラベリング」「ダブルドリブル」は反則としてとらないことを全体で確認し、その後の練習やゲームでは再確認することなく全体に受け入れられていった。

タスクゲームで、いろいろなルールや条件付けを提示し、ルールとして取り入れたいものを班ごとに話し合って選択し、全体の場で確認しながら「平ろうルール」を作りあげていった。

ルール作りの項目は、セーフティエリア・ルール、スペシャルエリア・ルール、新得点方法を採用するか否かについてそれぞれ検討した。チームの意見をまとめる際に、必ずその理由を説明することとした。班ごとに理由を述べさせることで、助け合いや認め合いといった意図を確認することができた。

セーフティエリアは、できるだけコート内の生徒との接触を避けられるよう、安全を考慮して両サイドライン沿いに設定した。





セーフティエリア（左）と スペシャルエリア（右）

ウ　教具の工夫

重複障害生徒用のゴールとして、円柱のボールかごを、カラーボックスを２つ重ねた上に固定したものを用意した。シュート練習では、ボールを投げる力を考慮しながら距離を変えて練習に取り組んだ。

このような工夫をすることで、重複障害生徒もみんなと一緒に授業へ参加でき、周りの生徒も補助をすることで、今まで以上に重複障害生徒とのかかわる時間をもてるようになった。

仲間に補助してもらいながらシュート練習をしている様子

重複障害生徒用ゴール

（２）学習内容を明確にした教え合い

ア　チーム編成について

チームは、普段の人間関係を考慮するとともに、リーダー性、運動技能、性別、学年、重複障害生徒などを考慮し、各班８名ずつ４チームを編成した。運動技能については、ゲームの様子からも大きな力の差はなく、生徒たちからも不満の声は一切聞かれなかった。

話し合いの場面においても、リーダー性のある３年生を均等に割り振り、またリーダーを補助できる力をもった２年生の割り振りにも考慮したので、比較的４班ともスムーズに話し合いが進められていた。

きょうだいチームについては、特に重複障害生徒と休みがちな生徒の人数を考慮して編成した。きょうだいチームの組み方には一長一短があり、今回のように重複障害生徒と人数を考慮した場合、ゲームを進行していく上では適当であったが、連帯性や親密性を高めるには、より良い組み合わせ方があったのではないかと考える。

イ　学習資料の工夫

（ア）個人用学習カード

ろう学校の生徒は、文を書くのが苦手という生徒が多い。学習カードを記入するのに時間がとられないようにするため、できるだけ記述欄を減らし選択形式にした。また、質問の文章もできるだけ易しい表現にし、ルビをふるようにした。

今後は、何のために記入するのかをしっかり理解させ、記入にあたっては、授業のねらいに即した回答となるようなことばかけをしていく必要性を感じた。

（イ）チーム用学習カード

チーム用学習カードには、「チームのねらい」を記入させた。なかなか決められない状況を予測して、「今日のねらい」に即した「チームのねらいの例」を毎時参考になるよう提示した。はじめは時間がかかっていたが、授業を進めていくうちに、やるべきことを理解してスムーズに進められるようになっていった。

またチーム用学習カードには、きょうだい（ペア）チームが記録する欄を設けた。タスクゲームやゲームのときに記録をとり、きょうだいチームに「ひとことアドバイス」を添えて報告させた。ここでも「アドバイス」するポイントを「チームワーク」、「シュート」、「パス」、「ボールをもらう動き」の４つの項目に分けて例を示し、仲間の様子を見る視点を示すとともに、話し合いがスムーズに行われるよう配慮した。

しかし実際は、きょうだいチームの「ひとことアドバイス」やチームの振り返りを話し合う時間が十分確保できなかったので、一部の生徒が話して記入してしまったり、授業後に記

入したりしていた。反省や他者からのアドバイスを次にいかすためにも振り返りに要する時間をしっかり確保する工夫が必要と感じた。

（ウ）視覚的資料の活用

a　ビデオ映像

毎時授業の様子をビデオに撮り、ポイントとなるところを次時の導入時に見せた。具体的には、２時間目、７時間目、８時間目の導入でビデオ映像を使用した。２時間目は協力し合う態度、７時間目はディフェンスのブラインドから出る動き、８時間目はゲーム時のポジショニングについてそれぞれ説明した。はじめは、映像を使って伝えたいことがたくさんあり、説明が長くなってしまったが、７時間目、８時間目ではポイントを絞って説明できたので、生徒たちも課題を把握しやすかったのではないかと推測する。

「チームのねらい」や学習カードの記述などから、良かった点や改善すべき点を口頭で説明するだけでなく、実際の映像で示すことで、生徒たちはその課題に気付きイメージしやすくなったと考える。

映像で動き方を確認している様子

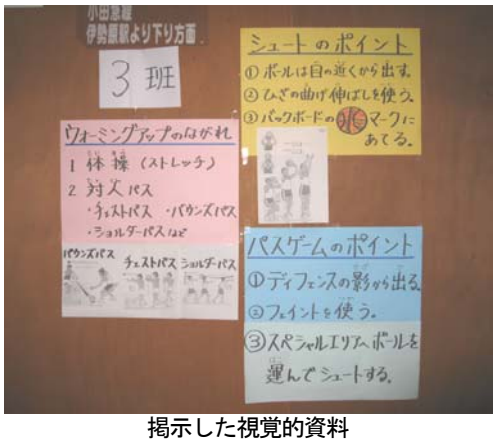
b　掲示物

チーム練習時にアドバイスや相互評価するにあたっての視点が明確になるように、それぞれ運動技能のポイントを掲示した。その際、シュートに関してはボールの位置や姿勢を、パス練習では動き方を図で示して視覚的にとらえられるようにした。

またウォーミングアップの内容もチームごとに掲示し、パスの方法もいつでも確認できるようにそれぞれ図で示した。

その他、チーム用学習カードに書かれた「チームで良かったこと」を、掲示した班ごとの模造紙に追記していった。更に個人用学習カードで毎時「チームで１番」だった仲間の名前を書かせた。その内容は、技能的なものではなく、誰もが１番になれる内容にした。例えば、「１番ハンドサインを使っていた人」や「１番仲間を助けていた人」、「１番応援した人」などである。そして、最終的に１番得票数の多かった生徒を「フレンドシップ王」として表彰した。

このように、「チームで良かったこと」や「フレンドシップ王」についてなど、授業の肯定的な雰囲気を高めていく上でも、掲示物を利用していくことは有効であったと考える。



掲示した視覚的資料

シュートのポイントで示したマーク

（３）聴覚障害生徒同士の話し合い

ア　話し合いがスムーズに行われるように、生徒同士の肯定的なかかわり合いが促されるように、「話し合いのルール」**図３－１**（P36、参照）を提示した。**図３－６**（P54、参照）、**図３－７**（P55、参照）でもわかるように「話し合いのルール」を示した２、３時間目以降伸びているのが見てとれる。

イ　話し合い活動では例示を示す

話し合い活動では、話し合う課題を明確にするとともに、参考となるような例示を示すようにした。何もないところから話し合わせてもなかなか決められない状況が予測される。そのため、毎時の「チームのねらいの例」や「ふりかえりのポイント」、「チームの作戦の例」をあらかじめ示して、話し合い活動がスムーズにかつ活発に行われるように配慮した。

このように例示を示していくことは、生徒の能力にもよるが、小学部、中学部段階では、運動に関する語彙を増やしたり、仲間の様子を見る視点や種目の特性を理解していく上で有効であると考える。

（４）　サインで伝える認め合い

ア　「ハンドサイン」の工夫

第２時間目に、生徒同士の「認め合い」が深まるよう、班ごとに２種類のハンドサインを決めさせた。１つが、「仲間が良いプレイをしたり、成功したとき」、もう１つが、「仲間が失敗したり、励ますとき」に示すサインである。

実際に話し合わせる前に、このような場面でどのようなことばかけをするか発問した。生徒たちからは「ナイス」、「すごい」や「ドンマイ」、「大丈夫」などの意見が出た。これらの具体的なことばを確認し、ハンドサインを連想しやすい状況を作った後に話し合わせた。反対に、具体的なことばを示したことで、各班の考えたハンドサインは似ているものが多い結果になってしまった。大きなジェスチャーでオリジナリティのあるものを要求したが、実際は、手話から派生する表現しやすいハンドサインとなった。

そのハンドサインを練習やゲームの場面で積極的に使うようはたらきかけた結果、お互いのプレイに集中し、良いところを見付け認め合う活動ができたと考える。口話（音声）や手話など主に使用するコミュニケーション手段が違う生徒同士でも、また個人差はあるものの、重複障害生徒にとっても意志表示の手段として有効であったと考える。

（５）その他の学習指導における工夫について

ア　授業のマネージメントについて

一単位の授業時間中の運動活動場面に配当される時間が多くなるように、集合場所や話し合いの場所、整列の約束事を決めて効率よく進められるようにした。また２時間目以降、ウォーミングアップは挨拶の前に各班で行うようにした。メンバーが揃わないと始められないので、一人ひとりの意識も高まり集合が早くなっていった。

図３－16 では、５％水準で有意差が見られ、ここにも授業へ参加する意識の変化が表れている。

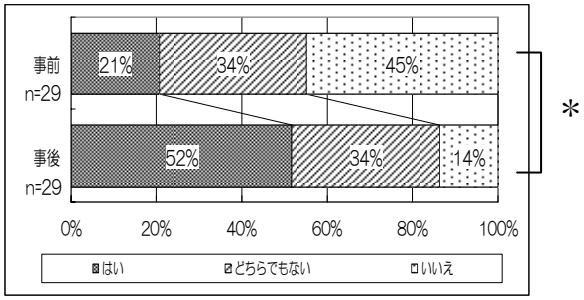
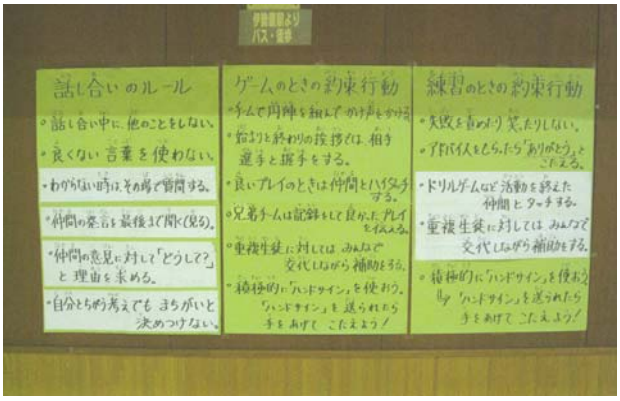


図３－16「授業が始まる前は、いつもはりきっている」（事前・事後アンケート）

イ　学習場面での約束行動

それぞれの学習場面で、生徒同士が肯定的なかかわり合いが促されるように、「話し合いのルール」**図３－１**（P36、参照）、「練習時の約束行動」**図３－２**（P37、参照）、「ゲーム時の約束行動」**図３－３**（P37、参照）を提示した。

「ゲーム時の約束行動」には、「チームで円陣を組んで、かけ声をかける」、「良いプレイのときは仲間とハイタッチをする」という項目を設けた。授業の様子から、前者は、試合前の円陣を組むときに、セーフティエリアにいる重複障害生徒のところへ仲間が集まっていってかけ声をかける場面が見られるようになった。また、３班は、最後の授業が終わり、チームが解散する際にもキャプテンが仲間を呼び集め、円陣を組み、かけ声をかけていたのがとても印象的であった。後者も試合中にハイタッチをする場面が増えた。



学習場面での約束行動

また、ビデオ映像でカウントした「肯定的な情意行動」の中で、ハイタッチの回数も授業が進むにつれ増えていったことから、練習時やゲーム時の約束行動を設けることも、仲間の良いところに目を向けさせ、肯定的な人間関係作りや肯定的な雰囲気作りに有効であったと考える。

生徒たちが、話し合いや練習、ゲーム時にそれぞれ示された内容を意識して取り組んでいたことが、授業の様子や学習カードから見取ることができる。

ウ　「平ろうカップ」の開催

全体で確認して決めた「平ろうルール」を取り入れて、「平ろうカップ」を開催した。自分が所属するチームへの愛着とともに、きょうだいチームに対する連帯感をもって応援にも力がこもっていた。

事後アンケートの感想の中に勝敗のことが１つも書かれていなかったことから、勝敗に一喜一憂するというより、仲間と協力してバスケットボールを楽しむことができたと考える。

７　検証授業全体を振り返って

ここまで今回の検証授業について、分析の視点に沿って振り返ってきたが、ここでは検証授業全体を振り返っていきたい。

（１）生徒同士のかかわり合いについて

今回の授業は、１年生から３年生合同の複式、男女共習更に重複障害生徒も合同という学習グループで計画をした。中学校学習指導要領では、目標や指導内容など、１、２年生と３年生に分けて示されており、重複障害生徒においては個々の対応が要求された。

全体を通して、今まで以上に話し合いや学習カードへ記入する学習活動が増えたことで、時間配分の難しさを感じた。しかしながら生徒たちは、話し合う内容や取り組み方が分かってくるにしたがって、時間的なロスが少なくなっていった。このような取組みを今後も継続していくことで、話し合い活動に費やす時間も短縮され、内容的にも充実していくと考える。

話し合い活動の中で、チーム内相互評価やきょうだいチームによる「ひとことアドバイス」を受けて、その内容を個人やチームにフィードバックし、改善していくという点においては、十分な時間を与えられなかったと感じている。限られた授業時間を有効に使うためにも、他者からのアドバイスを次の活動にいかしていくはたらきかけがもっと必要であったと考える。

話し合いや教え合いなど、授業の中で生徒同士のかかわり方は様々で１つだけではない。毎時どのようなかかわり合いを中心に深めていくのかを更に明確にして、授業を展開していく工夫が必要であると考える。

今回、集団的達成「運動技能」を見る項目で、「あなたのグループは、今日の課題を解決できましたか」（**図３－17**）、「あなたは、チームのみんなで最後まで頑張ったという満足感を味わうことができましたか」（**図３－18**）について、どちらも２、３時間目以降、２．５点を上回っており、仲間との肯定的なかかわり合いを通して、運動技能も高まったと考える。

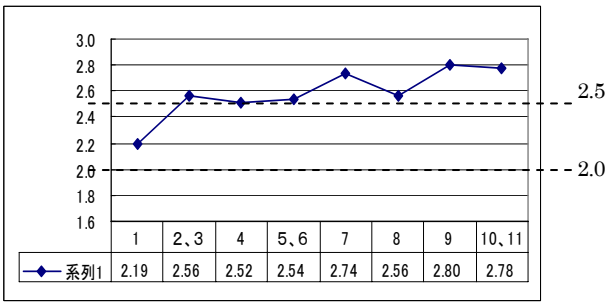


図３－17「あなたのチームは、今日の課題を解決できましたか」　（個人用学習カード）

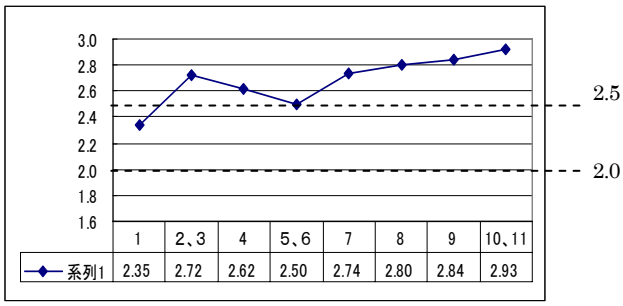


図３－18「あなたは、チームのみんなで最後まで頑張ったという満足感を味わうことができましたか」（個人用学習カード）

「バスケットボールの授業では、みんなが楽しく勉強できる」（**図３－19**）でも５％水準で有意差が見られた。

これらの結果から、バスケットボールの特性に触れながら、球技の楽しさを味わうことができたと考える。

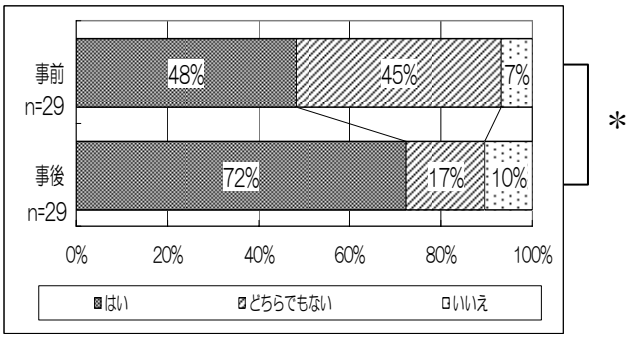


図３－19「バスケットボールの授業では、みんなが楽しく勉強できる」（事前・事後アンケート）

（２）重複障害生徒とのかかわりについて

重複障害生徒については、「重複障害生徒の個人目標」（Ｐ31、参照）に照らし合わせ、今回の検証授業で、聴覚障害生徒と重複障害生徒とのかかわり合いが深まり、重複障害生徒の目標が十分達成できるよう、補助に入っている教員と協力しながら授業を進めていった。重複障害生徒も聴覚障害生徒とともに助け合いや教え合い、話し合い、認め合いといった活動を進めていく中で、生徒同士のかかわり合いは深まっていったと考える。

重複障害生徒４名のうち、Ｄは仲間と同じ課題に取り組むことができた。Ｂは普段から仲の良い仲間を同じチームに入れ、できるだけ教員は見守る体制で、仲間のサポートを得ながら一緒に練習に取り組めるよう工夫した。その結果、授業に長い時間集中して取り組むことができた。シュート練習も本人の希望で通常のゴールで行った。ＡとＣは、補助の教員にサポートしてもらいながら、重複障害生徒用ゴールを使用してシュート練習を行った。その結果、チームから取り出して、別の練習内容に取り組むことなく、仲間と一緒に同じ練習内容に取り組むことができた。また単元の後半は、仲間が補助を行ってシュート練習に取り組み、生徒同士のかかわり合いを深めることもできた。**表３－13**「補助教員が見た重複障害生徒の様子」からも、「重複障害生徒の個人目標」が十分達成されていたと考える。

重複障害生徒の個人目標

生徒	学年	単元目標	内容・方法・手立て
A	1	補助してもらいながらボールを保持したり仲間を意識して投げたりしてみんなと一緒に運動することができるようにする。	ビブスの色を意識するよういつも着用する。仲間からの声かけを多くしてチームの仲間を意識させる。
B	1	チームの仲間と協力し、集中して指示された運動を安全にできるようにする。	仲間や周りからの声かけを多くして、関心が授業に向くように支援する。
C	2	簡易化された道具やルールの下、自分の役割に合わせて、無理せず安全に運動することができるようにする。	タスクゲームやゲームでも、補助が代わりにボールを受けることでその後のプレイができるようにする。
D	2	自分の体調や体力に注意しながら仲間と協力しながら安全に運動することができるようにする。	取り組む課題ごとに本人と相談しながら進めていく。適切に声かけをしてオーバーワークにならないように意識させる。

表３－13　補助教員が見た重複障害生徒の様子

生徒	補助教員のコメント
A	チームでの仲間との話し合いにはあまり興味がなかったようだが、ゲーム時は仲間の様子に興味深げで、じっと見ていたり、笑うような声を出したりしていた。仲間の補助を嫌がらずに動いていた。セーフティエリアでは、補助を受けてボールを保持することはできた。自力で投げることはしなかった。
B	自分の所属するグループや仲間を覚え、集合や整列などをスムーズに行うことができた。また、体操や話し合いの際には自らグループの輪に加わり、仲間からの声かけやサポートを受けながら一緒に身体を動かしたりグループの話し合いを聞いたりすることができた。 練習では、みんなと同じ練習をしたいと意見を述べ、仲間の動きを真似してパスやシュートなどの練習に意欲的に取り組み、シュートが入ったときはみんなで喜ぶことができた。試合では決められたポジション（セーフティエリア）で待ち、仲間からボールをもらってパスを出すことができた。また、ハンドサインを促すと仲間と一緒に表現することができた。 授業（単元）全体を通して、同じグループで活動したことで、自分のグループのメンバーやビブスの色をきちんと理解できていた。そのため、誰と一緒にいればいいのか、誰にパスを出せばいいのかがわかり、安心して活動に取り組み仲間とともに楽しむことができた。
C	自分から活動しようとする気持ちが高く、何をすれば良いか積極的に確認することができていた。また仲間との話し合いの場では、仲間の援助を受けることが多かったが、自分の意見もしっかり伝えることができていた。タスクゲームやゲームでもルールをよく理解して取り組めている様子であった。同じチームの仲間にパスを出すときも、味方を意識してパス出しすることができていた。安全に気を付けて活動することも自分なりにしっかりと判断することができていて、仲間からの協力も素直に受け入れることができていた。助けてもらうことは多くあったが、味方への励ましのサインを積極的に行うこともでき、仲間との交流する良い機会になったと感じられる。
D	積極的に活動に取り組み、仲間とともに活動を楽しむことができた。はじめは少しボールを怖がっている様子があったが、練習を繰り返すうちに慣れていき、積極的に身体を動かすことができた。同じグループの仲間がパスを出すときは、強さを加減したり近くにボールをもらいに寄って行ったりとチームワークができあがっていた。仲間やきょうだいチームのプレイに対してハンドサインを表現して応援することもできた。 チームの一員として練習やゲームを楽しむことができ、また意欲や技能の向上にもつながった。

第４章　研究のまとめ

１　研究の成果と課題

本研究では、ろう学校のバスケットボールの授業において、仲間とのかかわり合いを通してコミュニケーション・スキルを高める授業作りに役立つ提案を行うことを目的に研究を進めてきた。

その結果、次のことが明らかになった。

仲間と協力して助け合うこと、仲間にアドバイスするなど教え合うこと、チームの作戦や戦術といった課題解決に向けて仲間と話し合うこと、仲間の良いところを見付け認め合うこと、これらの仲間との肯定的なかかわり合いを通して、授業における肯定的な雰囲気が高められたと考える。

授業における肯定的な雰囲気が高められたことで、相手のことを配慮しながら自分の意志を表現する機会が増え、コミュニケーション・スキルが高まったと考える。

この研究の主題にかかわる課題として次のようなことがあげられる。

今回の授業を通して、自分の意志を表現することに視点をあてて取り組んできたが、発信された情報を理解するための受容力の向上にも目を向け、表現力と受容力のバランスを考えながら取り組む必要があると考える。それは、受容力が向上することによって、より多くの情報を得ることができ、それに伴って表現力も向上していくと考えるからである。

今回の学習の進め方を１、２年生に継承させつつ、更に学習成果が上がるよう工夫していく必要があると考える。

また、バスケットボールの特性に触れることができたかについては、今回、研究の対象とすることができなかった。仲間との肯定的なかかわり合いを深めることによって、バスケットボール（ゴール型）の特性に触れることができたかについて、更には技能の向上につながったかどうかについても視点をあてていく必要があると考える。

２　今後の展望

今回は、チーム練習やゲーム中、仲間のプレイを注視し、相手のことを配慮しながら自分の意志や感情を表現していく方法の１つとして「ハンドサイン」を用いた。そして、約束行動として、送られてきた「ハンドサイン」に「応える」ことを求めた。

しかし、P58 第３章５（１）のエで述べたように、「ハンドサイン」という情報が、コート上の仲間に十分届いていない状況がある。練習やゲームに集中していたり、余裕がなかったりすると周りの様子には気付きにくいものである。ろう学校では、相手（情報の発信者）を見ていなくては情報が入ってこないという特性がある。

それでも生徒たちは一生懸命にサインを送り続けていた。この取組みを続け、ハンドサインに応じることを、今後も生徒たちに要求するならば、少しずつ視野が広がり、アイコンタクトなど仲間とのコミュニケーションが増えていくのではないかと考える。

更に「ハンドサイン」への応え方を１つの表現方法にするのではなく、もっと自由に自分の気持ちを表現させる指導の工夫ができれば、よりコミュニケーション・スキルが高められるのではないかと考える。

表４－１は、今回の検証授業の成果を基に再考した単元計画（案）である。しかし、毎年、学習者の構成は変わることと、日頃、教材準備にあてる時間が少ないことを考慮すると、実態やねらいによって、どのようなかかわり合いを深めていくかを選択する必要があると考える。例えば、今回のように「態度」の向上をねらうのであれば、「助け合い」「認め合い」を重視し、「技能」の向上をねらうのであれば、「教え合い」「話し合い」を重視するなどである。

表４－１　検証授業の成果から考えられるバスケットボールの単元計画（案）

<table>
<tr><th colspan="2">時</th><th>1</th><th>2</th><th>3</th><th>4</th><th>5</th><th>6</th><th>7</th><th>8</th><th>9</th><th>10</th><th>11</th><th>12</th></tr>
<tr><td rowspan="3">ねらい</td><td>1、2年</td><td colspan="4">分担した役割に積極的に取り組むとともに、練習ではゴール下の空間でパスを受ける動きを身に付ける。</td><td colspan="4">チームの話し合い活動に参加し、チームのディフェンス・フォーメーションを理解して練習に取り組み、ボールをもっている相手をマークできるようにする。</td><td colspan="4">練習やゲームを通して積極的に仲間とかかわり合いながら、チームで話し合った作戦を成功させゲームを楽しむ。</td></tr>
<tr><td>3年</td><td colspan="4">自己の役割に責任をもって取り組むとともに、練習ではゴール下に空間を作る動きを身に付ける。</td><td colspan="4">チームの話し合い活動に貢献し、チームのディフェンス・フォーメーションを理解して練習に取り組み、ゴール前の空いている場所をカバーできるようにする。</td><td colspan="4">練習やゲームを通して自主的に仲間とかかわり合いながら、チームで話し合った作戦を成功させゲームを楽しむ。</td></tr>
<tr><td>重複</td><td colspan="4">チームの仲間を知り、協力しながら体を動かす。</td><td colspan="4">仲間と協力して安全に練習に取り組む。</td><td colspan="4">決まりやルールを守って仲間とゲームを楽しむ。</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="12">本時のねらい　　準備運動</td></tr>
<tr><td colspan="2">学習活動</td><td>＜ためしのゲーム＞</td><td colspan="3">＜基礎技能の習得＞
ゴール下シュート　→　パスゲーム
・ゴール下の空間でボールを受ける動き
・ゴール下に空間を作る動き</td><td colspan="4">＜動きの感覚づくり＞
セーフティエリア・ルール　→
ディフェンス・フォーメーション
・ボールを持っている相手をマーク
・ゴール前の空いている場所をカバー</td><td colspan="4">＜戦術の実践＞
練習試合　→　バスケットボール大会
・チームディフェンスの実践
・オフェンスの工夫</td></tr>
<tr><td rowspan="4">主なかかわり合い活動</td><td>助け合い</td><td></td><td colspan="3">重複の補助</td><td colspan="4">重複の補助
（セーフティエリア・ルール）</td><td colspan="4">重複の補助
（セーフティエリア・ルール、応援）</td></tr>
<tr><td>教え合い</td><td></td><td colspan="3">チーム内相互評価
（ドリルゲーム、チーム練習）</td><td colspan="4">きょうだいチームのアドバイス
（チーム練習、タスクゲーム）</td><td colspan="4">きょうだいチームのアドバイス
（タスクゲーム、大会）</td></tr>
<tr><td>話し合い</td><td>役割分担</td><td colspan="3">役割分担
（チーム全体に向けての発言）</td><td colspan="4">役割分担　　戦術の理解
（わからないときの質問）</td><td colspan="4">役割分担　　戦術の工夫　　作戦
（相手にわかりやすく話す）</td></tr>
<tr><td>認め合い</td><td></td><td colspan="3">チームのハンドサイン
（賞賛、励ましのサイン）</td><td colspan="4">きょうだいチームのハンドサイン
（賞賛、励ましのサイン）　→　応答の促し</td><td colspan="4">きょうだいチームのハンドサイン
→　応答の充実</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="12">整理運動　　授業のふりかえり・学習カードの記入　　次時の確認</td></tr>
</table>

また、ろう学校の特徴の一つでもある「自分の意志や感情を言葉で表現するのが苦手」ということについて、話し合いの場面に限定して、指導の工夫をしていくのも一つの方法ではないかと考える。

杉山は、「体育という場では、伝達スキル、解読スキルのいずれについても、非言語的なコミュニケーション・チャネルを用いたスキルが重要な位置を占めていることになる。もちろん言語的なコミュニケーションも、他の教育場面より活発に行うことが可能である。」と述べている。[29] また、渋倉は、「体育授業の空間には、子どもが日常生活で遭遇しうる様々な状況や場面が用意されている。例えば、「競争」、「協調」、「公正」、「責任」などの社会的態度が求められる場面、あるいは喜怒哀楽の感情を経験する場面が存在する。」と述べている。[30]

これらの考え方から、学校目標でもある「コミュニケーション・スキルの向上」について、今後更に、体育の授業において、どのような手立てが有効かを検討していくとともに、学級担任や他教科とも連携を図り、学部全体ひいては学校全体で取り組んでいくことが大切だと考える。そして、ろう学校では相手に伝わりにくい感情表現も、卒業後、聴者の社会では相手にしっかり伝わり、コミュニケーションが深まることも説明し、ろう学校で身に付けたコミュニケーション・スキルをいかしていく大切さを生徒たちに伝えていきたい。

３　最後に

今までは、ろう学校では話し合い活動をさせると時間がかかり、身体活動にあてる時間が少なくなってしまうので、その手立てを講じるよりも運動量を確保することを優先してきた。しかし、今、考えると、それは私にとって都合の良い口実でしかなかった。

この反省を基に、今回の研究では、バスケットボールの授業における仲間との様々なかかわり合いを通して、肯定的な雰囲気を高め、コミュニケーション・スキルを高めることを目的として取り組んだ。

計画を立て始めた段階では、あれもこれもと盛り込みすぎて、11 時間の単元計画では収まりきれない状態であった。そして細かな計画を立てていけばいくほど、無理な面が浮き彫りになっていった。内容を精査して臨んだ検証授業でも、途中で何度も計画を練り直していくことになった。

検証授業前は、どれだけ生徒同士のかかわり合いが深まるのか不安であった。しかし、いつも生

徒たちは意欲的に取り組み、時間を追うごとに生徒同士のかかわり合いは深まっていき、最後の「平ろうカップ」では自分が試合に出ていないときも集中して応援し、大変盛り上がった試合を展開してくれた。

今回の研究を通して、多くの先生方からご指導ご助言をいただき、また様々な文献を読む機会を得て、１年間研修できたことは私にとって大きな財産となった。

これからも、生徒たちの長いライフステージで、仲間と運動に親しむ態度を育んでいく授業実践に取り組んでいきたい。

［引用・参考文献］

１）高橋健夫『体育授業を観察評価する　授業改善のためのオーセンティックアセスメント』　明和出版　2003 年 10 月　16－19　　45－48

２）『中学校学習指導要領解説　保健体育編』　文部科学省　平成 20 年９月

３）岡出美則「新学習指導要領にみる文科省の意図とねらい」　『体育科教育』　大修館書店　2008 年６月　20－23

４）『特別支援学校学習指導要領解説』　文部科学省　教育出版　平成 21 年６月

５）『新学習指導要領による中学校体育の授業　下巻』　大修館書店　　2001 年４月

６）草野勝彦、西 洋子、長曽我部博、岩岡研典『「インクルーシブ体育」の創造』　市村出版　2007 年　８－９　　20－21

７）長曽我部博「小学生と知的障害児とのインクルージョン実践」　　『体育科教育』　大修館書店　2003 年８月　46－49

８）脇中起余子『聴覚障害教育これまでとこれから』コミュニケーション論争・9 歳の壁・障害認識を中心に　北大路書房　2009 年９月

９）高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田 靖『新版体育科教育学入門』　大修館書店　2010 年４月　42　　70－73　　125－126

10）高橋 明『障害者とスポーツ』　岩波新書　2004 年６月

11）大橋 潔「体育における「学び」の探求」　『体育科教育』　大修館書店　2011 年６月　29－31

12）五町歩美「聴覚障害者の生涯スポーツにおける「デフスポーツ」の役割」　平成 21 年度修士論文　筑波大学大学院人間総合科学研究科

13）齊藤まゆみ「聴覚障害者のアダプテッド・スポーツ」　矢部京之助、草野勝彦、中田英雄『アダプテッド・スポーツの科学　～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』　市村出版　2004 10 月　158－159

14）宇土正彦『学校体育授業事典』　大修館書店　1995 年７月

15）今村律子「コミュニケーション・スキルを考える」　『コーチング・クリニック』　ベースボール・マガジン社　2005 年６月　68－69

16）芝 健太『プロが教える　はじめてのＮＬＰ超入門』　成美堂出版　　2011 年 12 月　　113－115

17）今村律子「コミュニケーション・スキルの向上」　『コーチング・クリニック』　ベースボール・マガジン社　2005 年７月　70－71

18）白石二三恵「「コミュニケーション能力」を育む授業をデザインする」　『体育科教育』　大修館書店　2008 年 10 月　46－50

19）中島俊介「コミュニケーション・スキルが育つ体育とは」　『体育科教育』　大修館書店　2004 年４月　26－29

20）高橋健夫「よい体育授業を求めてこれからの体育授業研究に求められること」　『体育科教育』　大修館書店　2011 年５月　46－51

21）中野正明、井上美代子、中西幸太、今枝春美「コミュニケーション能力を高める体育学習の在り方」　－学びへの意欲と学びの質を高める言語活動を中心に－

22）佐藤 豊「健やかな体をはぐくむ体育学習の展開①」　『中等教育資料』　文部科学省　　2008 年５月　62－63

23) 梅田幸博、東 克彦「思考力、判断力、表現力を高める体育科教育の学習指導過程の工夫」　－課題解決場面での言語活動の充実を視点に－
24) 是枝喜代治『特別支援教育に役立つ実践事例集　－子どもの困り感に寄り添って』 学習研究社 2008 年　113－114　136－137
25) 上野一彦、岡田 智「特別支援教育［実践］ソーシャルスキル　マニュアル　明治図書出版　144－147
26) 河野一則、吉田昌史「子ども相互のかかわり合いを重視した中学年のサッカーゲーム」　『体育科教育』　大修館書店　2003 年８月　73－75
27) 篠崎 徹、高橋健夫、岡出美則、吉永武史「仲間とのかかわり合いを育む体育授業の実践」　『体育科教育』　大修館書店　2003 年２月　64－67
28) 長島正明「かかわり合いを深めるソフトバレーボールの授業」『体育科教育』 大修館書店　2003 年 11 月　73－75
29) 杉山佳生「体育からコミュニケーション・スキルを捉える視点」　『体育科教育』　大修館書店 2004 年４月　14－17
30) 渋倉崇行「身体活動はコミュニケーション・スキルを高めるか」　『体育科教育』　大修館書店 2004 年４月　18－21